斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅳ

三谷遺跡・藤廻遺跡・長廻遺跡
大井谷Ⅱ遺跡・瀧谷山城跡

2003年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
出　雲　市　教　育　委　員　会

斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅳ

三谷遺跡・藤廻遺跡・長廻遺跡
大井谷Ⅱ遺跡・瀧谷山城跡

2003年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
出　雲　市　教　育　委　員　会

序

国土交通省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係諸機関と協議しながら進めていますが、避けることができない埋蔵文化財については、事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成８年度から出雲市教育委員会にご協力いただいて調査を行ってきましたが、平成13年度をもって必要な現地調査をすべて終了しました。本書は平成12年度から平成13年度の間に調査を実施した、三谷遺跡、藤廻遺跡、長廻遺跡、大井谷Ⅱ遺跡、瀧谷山城跡についてその調査成果を報告するものであります。

国土交通省出雲工事事務所といたしましては、出雲市教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財保存のため、調査を円滑に進めてまいりました。その成果をこれまで３巻の報告書に編集して発刊しておりますが、これらと同様に、本書が埋蔵文化財に対する一層の関心とご理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に、今回の発掘調査及び本書の発刊にあたり、ご協力いただいた出雲市教育委員会ならびに関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成 15 年 (2003) ３月

国土交通省中国地方整備局
出雲工事事務所
所長 **船橋昇治**

序

近年、出雲市内では国道9号バイパス建設、新内藤川拡幅などの大規模な開発事業が、国や県によって進められています。特に大津地区や古志地区は、斐伊川放水路建設や一般県道多伎江南出雲線改良など、大事業が集中して進められている地区であります。また、同時に両地区には、この地の歴史解明においても重要な弥生時代の西谷墳墓群や、大規模な集落跡が集中する古志遺跡群が存在しています。このため、工事予定地内では平成３年度から島根県教育委員会が発掘調査を開始していましたが、平成８年度からは出雲市教育委員会も参入し、共に調査を進めてきました。この結果、平成13年度をもって必要な現地調査をすべて終了するに至りました。

出雲市教育委員会では斐伊川放水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書を、これまで３巻発行してまいりました。本書は、斐伊川放水路建設に伴う出雲市の埋蔵文化財調査を締めくくる第４巻目であります。掲載しているのは、三谷遺跡、藤廻遺跡、長廻遺跡、大井谷Ⅱ遺跡、瀧谷山城跡の５遺跡であり、いずれも今後、当市における埋蔵文化財の調査や研究に欠かせない成果を上げております。

本書が、さらなるこの地の歴史解明の一助となり、埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いです。

今後とも地元の皆様の熱意により、後世にこれらの遺跡が伝えられることを期待するとともに、本書の刊行にあたりまして、ご指導、ご協力を賜りました国土交通省出雲工事事務所をはじめ、関係者の方々に心からお礼申し上げます。

平成15年(2003)３月

出雲市教育委員会

教育長　多　久　　博

例　言

1．　本書は、国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所の依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成12年度(2000)から平成13年度(2001)にかけて実施した、斐伊川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．　本書で取り扱う遺跡は、三谷遺跡、藤廻遺跡、長廻遺跡、大井谷Ⅱ遺跡、瀧谷山城跡である。

3．　遺跡の所在はいずれも出雲市内で次のとおりである。

三谷遺跡：大津町字三谷3204-1　藤廻遺跡：大津町字藤廻3443外　長廻遺跡：大津町3219外

大井谷Ⅱ遺跡：上塩冶町1319外　瀧谷山城跡：大津町字長廻3434-7外

4．　調査工程及び調査組織は次のとおりである。

調査工程

平成12年度～平成13年度　現地発掘調査及び室内整理作業

平成14年度　室内整理作業及び報告書作成

調査主体　出雲市教育委員会

平成12年度(2000)

事 務 局　大田　茂(出雲市教育委員会 文化振興課長)、川上　稔(同 課長補佐)

調査指導　池淵俊一(島根県教育委員会 文化財課)、山根正明(県立松江南高等学校)

調 査 員　戸崎愛美(出雲市教育委員会 文化振興課 主事)、坂本豊治(同)

調査補助　伊藤めぐみ、坂本奈津子、滝尻幸平(以上、臨時職員)

平成13年度(2001)・平成14年度(2002)

事 務 局　板倉　優(出雲市文化企画部 芸術文化振興課長)、川上　稔(同 文化財室長)

調査指導　池淵俊一(島根県教育委員会 文化財課)、山根正明(県立松江南高等学校)

調 査 員　三原一将(出雲市文化企画部 芸術文化振興課 文化財室 副主任主事)、
戸崎愛美(同 主事)、坂本豊治(同)

調査補助　伊藤めぐみ、勝部真紀、坂本奈津子、滝尻幸平、宮崎　綾(以上、臨時職員)

5．　発掘作業(発掘作業員雇用、測量発注など)については、出雲市教育委員会から社団法人中国建設弘済会島根支部に委託して実施した。

担 当 者　高橋憲生(技術員:H12・H13)、板倉次郎(技術員:H12・H13)、
木村　恵(事務員:H12)、板倉律子(事務員:H13)

6．本書の執筆及び編集は、調査員が協議して行い、文責は目次に記した。

7．遺構の略称記号は基本的に次のとおりであるが、遺構によっては性格が異なる場合もある。

SI：竪穴住居　SB:掘立柱建物　SK:土坑　P:柱穴　SD:溝状遺構　SX:その他の遺構

8．本書で使用した測地系は日本測地系(改正前)である。

9．本書で用いた北はすべて座標北を示す。

10．本書の写真図版に掲載した航空写真を除く写真の撮影は、調査員が行った。

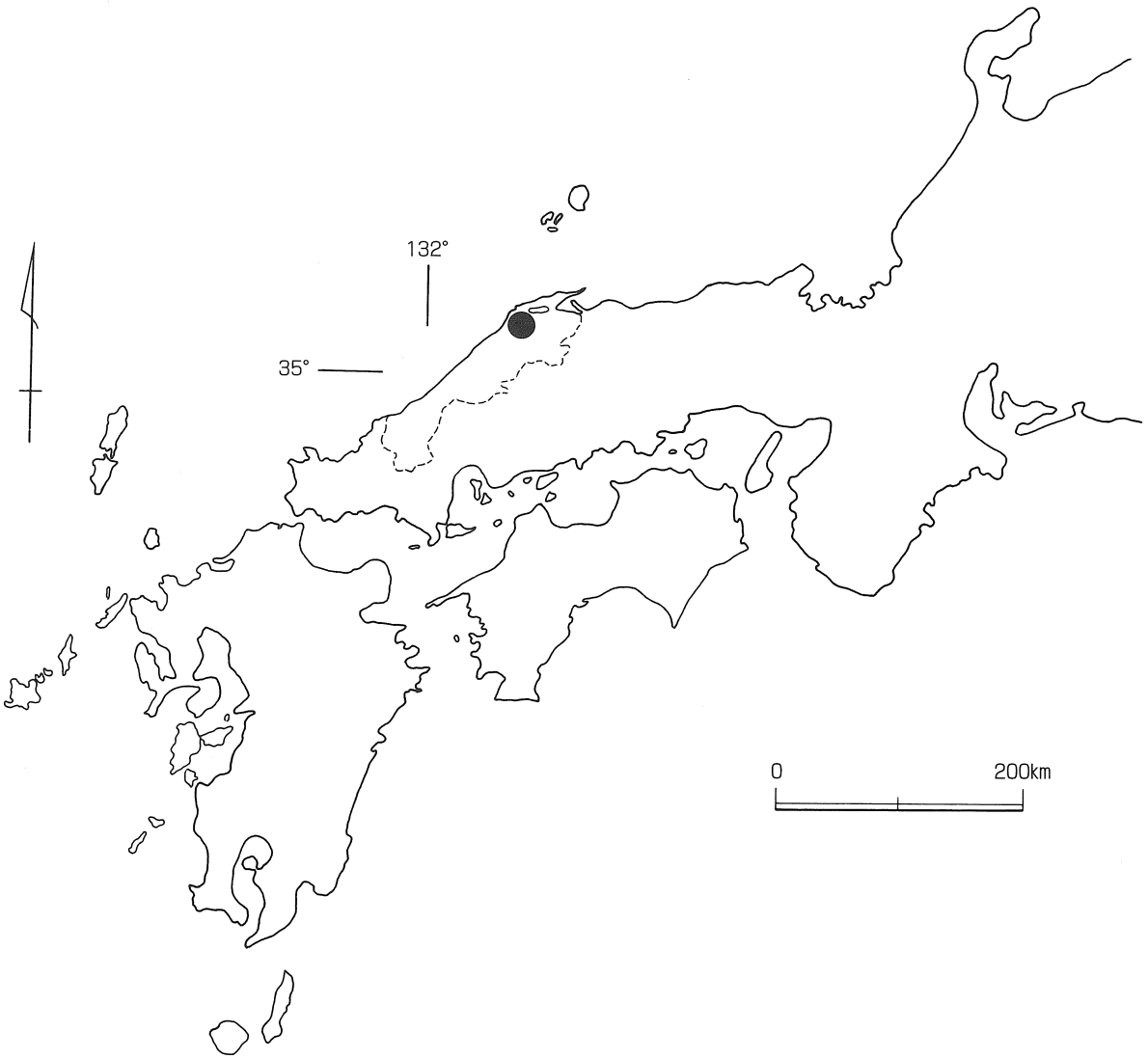
11.　発掘調査、遺物整理につては、次の方々から協力を得た。

発掘調査　吾郷園生子、安食　勉、有田俊夫、井上　茂、今岡春義、今岡　実、大島　唯、大輝　聖、奥田利晃、勝部武夫、勝部初子、鎌田　悟、桐原竹夫、来間達夫、神門幸子、駒孝次郎、佐野静枝、上代　勇、杉原秀雄、高橋イキコ、高橋ナツエ、竹田美代子、成相吉隆、秦　幸正、原　恒文、原　昇、藤江　実、福田雅美、星野勝義、宝正千賀子、三島文子、森山貞治、吉川善美ほか

遺物整理　阿久津洋子、荒木恵理子、石川桂子、河井栄子、永田節子、田部美幸

12.　遺物の実測については、調査員、調査補助員、室内整理作業員があたった。

13.　本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会で保管している。



島根県出雲市の位置

目　次

序

序

例　言

目　次

挿図目次　表目次　写真図版目次

第１章　調査に至る経緯 ……（戸崎）……　1

第２章　既往の調査 ……（三原）……　1

第３章　位置と環境 ……（三原）……　3

第４章　三谷遺跡 ……（坂本）……　5

第５章　藤廻遺跡 ……（坂本）……　17

第６章　長廻遺跡 ……（坂本）……　27

第７章　大井谷Ⅱ遺跡 ……（坂本）……　39

第８章　瀧谷山城跡 ……（戸崎・三原）……　47

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第３章　位置と環境

図１　出雲平野の主要遺跡（1：65,000）…… 4

第４章　三谷遺跡

図２　試掘状況…… 6
図３　調査区平面図・土層図……7・8
図４　ＳＸ０１～０３遺構図…… 9
図５　ピット図１……11
図６　ピット図２……12
図７　包含層出土遺物実測図１……13
図８　包含層出土遺物実測図２……15

第５章　藤廻遺跡

図９　調査前測量図……17
図10　調査区配置図……18
図11　調査区平面図・土層図……19・20
図12　調査終了後測量図……21・22
図13　調査区西半部遺構図……24
図14　階段状遺構図……25
図15　ピット図……25

第６章　長廻遺跡

図16　調査区位置図……27
図17　調査区平面図・南壁土層図……28
図18　ＳＩ０１・ＳＤ０１遺構図……30
図19　ＳＩ０１出土遺物実測図……31
図20　ＳＤ０１遺物出土状況……32
図21　ＳＤ０１出土遺物実測図……33
図22　ＳＩ０２遺構図……34
図23　ＳＩ０２出土遺物実測図……34
図24　１区包含層出土遺物実測図……35
図25　２区包含層①出土遺物実測図……36
図26　２区包含層②出土遺物実測図……37

第７章　大井谷Ⅱ遺跡

図27　調査区配置図……40
図28　Ａ区・Ｄ区平面図…… 41
図29　Ｄ区平面図・土層図…… 43・44
図30　ＳＤ０１出土遺物実測図…… 45
図31　包含層出土遺物実測図…… 45

第８章　瀧谷山城跡

図32　瀧谷山城跡と周辺の中世城館跡（1:30,000）47
図33　瀧谷山城跡調査範囲図（1：4,000）…… 48
図34　瀧谷山城跡平成12年度調査区（1：1,500）… 50
図35　堀切状遺構実測図（1：60）…… 51
図36　石切場実測図（1：60）…… 51
図37　ＳＸ０１実測図（1：60）…… 51
図38　竪堀状遺構実測図（1：60）…… 52
図39　階段状遺構実測図（1：60）…… 52
図40　杭配置図（1：600）…… 54
図41　遺構配置図（1：500）…… 55
図42　調査前地形測量図（1：700）…… 56
図43　ＳＢ０１測量図（1：50）…… 57
図44　ＳＤ０１断面（Sec.1～Sec.3）図（1：40）…… 58
図45　北1郭東切岸断面（Sec.4）図（1：60）…… 58
図46　15ラインセクション（Sec.5）図（1：60）…… 59
図47　Ｃ23-Ｄ24ラインセクション
（Sec.6）図（1：60）…… 59
図48　ＳＢ０２測量図（1：50）…… 60
図49　ＳＤ０２断面（Sec.7）図（1：40）…… 61
図50　北2郭北切岸断面（Sec.8）図（1：60）…… 61
図51　6ラインセクション（Sec.9）図（1：60）… 62
図52　北3郭セクション
（Sec.10・Sec11）図（1：100）…… 63
図53　北３郭北切岸断面（Sec.12）図（1：60）…… 63
図54　Eラインセクション（Sec.13）図（1：60）…… 64
図55　E22Gr出土磁器実測図（1：3）…… 64
図56　E23Gr出土砥石実測図（1：2）…… 64

表　目　次

第２章　既往の調査

表１　出雲市教育委員会実施発掘調査遺跡一覧表 … 2

第４章　三谷遺跡

表２　ピット観察表 …… 10

第８章　瀧谷山城跡

表３　主要基準杭座標一覧表 …… 53

写真図版目次

カラー図版

図版１－１　斐伊川と三谷遺跡（南から）
　　２　三谷遺跡完掘（上空から）
図版２－１　藤廻遺跡調査前（東から）
　　２　藤廻遺跡階段状遺構（北から）
図版３－１　斐伊川と藤廻遺跡（西から）
　　２　藤廻遺跡完掘（上空から）
図版４－１　瀧谷山城跡全景（北から）
図版５－１　瀧谷山城跡遠景（東から）
　　２　瀧谷山城跡調査地全景
　　（主郭から北を望む）
図版６－１　瀧谷山城跡SB02完掘状況（南から）
　　２　瀧谷山城跡北2郭北切岸断面：Sec. 8
　　（西から）

三谷遺跡

図版７－１　調査前（北西から）
　　２　調査前（東丘陵から）
　　３　１区完掘状況（南から）
図版８－１　土器出土状況
　　２　ピット検出状況（北から）
　　３　ピット完掘状況（北から）
図版９－１　柱根検出状況
　　２　ピット断面
　　３　ＳＸ０３完掘状況
図版10－１　ＳＸ０１完掘状況
　　２　完掘状況（北から）
　　３　完掘状況（東丘陵から）
図版11－１　包含層出土土器１
図版12－１　包含層出土土器２
図版13－１　包含層出土土器３

藤廻遺跡

図版14－１　調査前（東から）
　　２　調査中（西から）
　　３　瀧壺とピット（瀧上段から）
図版15－１　Ｐ２～Ｐ４
　　２　Ｐ１
　　３　階段状遺構
図版16－１　道状遺構（東から）
　　２　道状遺構（北東から）
　　３　道状遺構（ノミ痕）
図版17－１　道状遺構（ノミ痕）
　　２　道状遺構とＳＸ０１
　　３　ＳＸ０１（北から）

長廻遺跡

図版18－１　調査前（東から）
　　２　１区調査中
　　３　１区土層堆積状況
図版19－１　ＳＩ０２（東から）
　　２　１区完掘状況（南から）
　　３　ＳＩ０１（東から）
図版20－１　ＳＩ０１（西から）
　　２　壁際土坑出土土器
　　３　ＳＤ０１土器出土状況
図版21－１　ＳＩ０１出土土器（19－１）
　　２　ＳＤ０１出土土器（21－１～３）
図版22－１　ＳＤ０１出土土器（21－４・５）
　　２　ＳＩ０２出土土器（23－１・２）
　　３　１区包含層出土土器（24－１～３）

図版23－１　１区包含層出土土器（24－４～11）
　　２　２区包含層①出土土器（25－１～10）
図版24－１　２区包含層①出土土器
　　（25－７・11～25）
　　２　２区包含層②出土土器（26－１～10）

大井谷Ⅱ遺跡

図版25－１　調査前
　　２　ＳＤ０１土層堆積状況
　　３　完掘状況（東から）
図版26－１　ＳＤ０１出土土器（30－１～18）
　　２　包含層出土土器（31－１～３）

瀧谷山城跡

図版27－１　瀧谷山城跡と斐伊川（南から）
　　２　瀧谷山城跡と斐伊川（北西から）
図版28－１　平成12年度調査区全景（上が東）
　　２　堀切状遺構（上が南西）
図版29－１　石切場（上が南西）
　　２　ＳＸ０１（上が南西）
　　３　竪堀状遺構・階段状遺構（上が南西）
図版30－１　平成13年度調査区と主郭（上が南東）
　　２　平成13年度調査区全景（上が南東）
図版31－１　調査前状況
　　（北２郭から北１郭と主郭を望む）
　　２　調査前状況（北１郭から北を望む）
　　３　主郭平坦面（北東から）
図版32－１　ＳＢ０１完掘状況（南から）
　　２　ＳＢ０１－Ｐ４完掘状況（南から）
　　３　ＳＤ０１完掘状況（北から）
図版33－1　北１郭東斜面切岸（南東から）
　　２　北１郭東斜面切岸断面:Sec.4（西から）
　　３　北１郭西斜面完掘状況（北東から）
図版34－１　北２郭調査風景（南西から）
　　２　北２郭完掘状況（南西から）
　　３　ＳＢ０２完掘状況（上が東）
図版35－１　Sec.1・Sec.2設定状況（南東から）
　　２　Sec.2・Sec.3設定状況（南東から）
　　３　Sec.2土層堆積状況（北東から）
図版36－１　Ｇ２Gr付近ピット検出状況（北から）
　　２　Ｇ２Gr付近ピット完掘状況（北西から）
　　３　出土遺物（左：55-1・右：56-1）

第１章　調査に至る経緯

斐伊川放水路建設予定地における埋蔵文化財調査については、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）からの委託によって、平成３年（1991）から島根県教育委員会が実施してきた。しかし、事業予定地には上塩冶横穴墓群をはじめ、周知の遺跡が数多く存在し、さらに調査に伴って新たに発見される遺跡も多く、調査量が増大して工事の進捗が遅れている状況にあった。

このような状況の中、平成７年（1995）に事業者である建設省と調査を受託している島根県教育委員会から、出雲市教育委員会に対し、同事業に係わる埋蔵文化財調査について、一部を担当してほしい旨の依頼があった。出雲市教育委員会では当該事業の重要性などを考慮してこれを受け、三者で協議を重ねた結果、平成８年度（1996）から発掘調査の一部を担当することで合意した。

なお、この際に発掘調査に係わる県・市の分担については、基本的に島根県教育委員会が放水路開削部などの本体部分、出雲市教育委員会が工事用道路、残土処理場、グリーンステップなど本体に伴う周辺部分について調査していくことを確認している。平成12年度（2000）からは、大津地区の開削部については島根県教育委員会と出雲市教育委員会で面積分担し、調査を行っている。

第２章　既往の調査

出雲市教育委員会が平成８年度（1996）から平成14年度（2002）の７年間にわたり実施してきた、一連の斐伊川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要について簡単に振り返ってみたい。

平成８年度（1996）は上塩冶横穴墓群第17支群と、第17支群が築かれた丘陵斜面下の谷部の調査を実施した。上塩冶横穴墓群第17支群は以前から12基の横穴墓が確認されており、既に調査も実施されていた。しかし、今回の調査で新たに２基の横穴墓が発見され、全14基の横穴墓について実測が行われた。谷部については、試掘調査で遺物が出土した谷１区と谷２区の調査を実施した。この結果、谷1区からは柱穴と考えられる遺構が多数検出された。また、谷２区からは近世遺構面が確認され、建物跡などを検出している。

平成９年度（1997）は上塩冶横穴墓群第18支群、第19支群、第38支群、三田谷３号墳、石切場跡１、大井谷Ⅲ遺跡の調査を実施した。周知の第18支群から新たに横穴墓は発見されず、以前から知られていた２基の調査にとどまったが、横穴墓に伴う須恵器などの遺物が出土している。第19支群では４基の横穴墓が調査され、須恵器などの遺物が出土している。新発見の第38支群では、３基の横穴墓が調査されている。石切場１は第19支群と第38支群が存在する尾根の頂部で新たに発見された遺跡であるが、調査の結果、横穴墓より新しい時期のものであると推定されている。なお、三田谷3号墳と大井谷Ⅲ遺跡は翌年度まで調査を継続している。

平成10年度（1998）は、三田谷３号墳、大井谷Ⅲ遺跡、石切場２、光明寺３号墓、光明寺４号墳、

大井谷Ⅰ遺跡、大井谷Ⅱ遺跡の調査を実施した。三田谷３号墳は後期から終末期の古墳であり外護列石や横穴式石室の側壁以下が残存していた。大井谷Ⅲ遺跡は上塩冶横穴墓群第18支群と第38支群の間の谷に位置しており、多数の柱穴と思われる遺構が確認されている。石切場２は残存状況があまり良くなかったが、石切の際に利用されたと思われる袋状鉄斧が出土している。光明寺３号墓は石製骨蔵器が直葬されているマウンドを持つ墓で、全国的にも珍しい発見となり現地保存となった。光明寺４号墳については、横穴式石室の残存状況が良くなかったが、外護列石と周壕が比較的良く残っていた。よって、築造課程の復元が可能な資料となっている。大井谷Ⅰ遺跡は中世の柱穴や加工段、近世の溝状遺構や柱穴状遺構を検出している。なお、大井谷Ⅱ遺跡は平成12年度まで調査を継続している。

平成11年度（1999）はこれまで調査した遺跡の報告書作成期間にあて、上塩冶横穴墓群第17・18・19・38支群、大井谷Ⅲ遺跡、石切場１・２、三田谷３号墓をまとめたものと、光明寺３号墓・４号墳をまとめたものの２巻の報告書を発行している。なお、大井谷Ⅱ遺跡についてはこの年度も調査を継続している。

平成12年度（2000）は大井谷Ⅱ遺跡、三谷遺跡、藤廻遺跡、瀧谷山城跡の調査を実施すると同時に、大井谷Ⅰ遺跡、大井谷Ⅱ遺跡の調査成果をまとめた報告書を1巻発行している。

この年度に調査した４遺跡のうち、大井谷Ⅱ遺跡を除く３遺跡はいずれも斐伊川放水路開削部に位置する遺跡である。大井谷Ⅱ遺跡からは中世の遺構が検出されると同時に、陶磁器も多量に出土している。付近に寺院跡が存在する可能性を示唆している。三谷遺跡と藤廻遺跡の調査成果については、本書で報告するので概要は割愛する。なお、長廻遺跡と瀧谷山城跡は平成13年度まで調査を継続した。

平成13年度（2001）は長廻遺跡、瀧谷山城跡と、追加調査が必要となった大井谷Ⅱ遺跡の調査を実施した。また、平成14年度（2002）は報告書作成期間にあて、報告の終わっていない三谷遺跡、藤廻遺跡、長廻遺跡、大井谷Ⅱ遺跡、瀧谷山城跡の調査成果を報告すべく本書を発行するに至った。これによって、平成８年度から実施してきた斐伊川放水路建設に伴う発掘調査をすべて終了する運びとなった。

調査年度	遺跡名	所在地（出雲市）	主な遺構	主な遺物	調査面積（㎡）	文献
H8(1996)	上塩冶横穴墓群第17支群	上塩冶町3094-3外	横穴墓14基	須恵器、金環	2,900	1
H8(1996)	谷Ⅰ区	上塩冶町3094-3外	土坑、ピット群	須恵器、陶磁器	460	1
H8(1996)	谷Ⅱ区	上塩冶町3094-3外	掘立柱建物跡、ピット列	陶磁器	460	1
H9(1997)	上塩冶横穴墓群第18支群	上塩冶町1429外	横穴墓2基	須恵器、ガラス小玉	8,600	1
H9(1997)	上塩冶横穴墓群第19支群	上塩冶町3096外	横穴墓4基	須恵器、土師器	1,300	1
H9(1997)	上塩冶横穴墓群第38支群	上塩冶町3094-2外	横穴墓3基	須恵器、丹塗土師器	100	1
H9(1997)	石切場跡1	上塩冶町3096外	加工痕	なし	240	1
H9・H10	三田谷3号墳	上塩冶町3096外	方墳、外護列石、横穴式石室	須恵器	64	1
H9・H10	大井谷Ⅲ遺跡	上塩冶町1429外	ピット群	須恵器、土師器	500	1
H10(1998)	石切場跡2	上塩冶町1429外	加工痕	煙管、鉄斧	790	1
H10(1998)	光明寺3号墓	上塩冶町3098	石製骨蔵器	人骨	450	2
H10(1998)	光明寺4号墳	上塩冶町3098	方墳、外護列石	鉄釘		2
H10(1998)	大井谷Ⅰ遺跡	上塩冶町3002-1	溝状遺構	土師器、須恵器、陶磁器、石製品	1,350	3
H10～H12	大井谷Ⅱ遺跡	上塩冶町1319外	中世墓、石段遺構、階段状遺構、石敷状遺構	須恵器、土師器、陶磁器、金属器、木製品、漆器、羽口	7,500	3
H12(2000)	三谷遺跡	大津町字三谷3204-1	ピット群	土師器	900	本書
H12(2000)	藤廻遺跡	大津町字藤廻3443外	道、階段、水門状遺構	なし	200	本書
H12(2000)	瀧谷山城跡	大津町字長廻3434-7外	堀、石切場	なし	1,800	本書
H13(2001)	瀧谷山城跡	大津町字長廻3434-7外	掘立柱建物跡	土器、陶磁器	2,300	本書
H13(2001)	長廻遺跡	大津町3219外	竪穴住居跡	土師器	500	本書
H13(2001)	大井谷Ⅱ遺跡	上塩冶町1319外	溝状遺構	須恵器、土師器	50	本書

表１　出雲市教育委員会実施発掘調査遺跡一覧表

第３章　位置と環境

出雲平野は南北を中国山地と島根半島に、東西を宍道湖と日本海によって囲繞されている。また、中国山地に源流を辿り、かつてともに日本海に注いでいた斐伊川と神戸川の沖積作用により形成された沖積平野である。沖積作用が始まったのは約3,600年前頃と推定されており、それ以前は日本海から現在の松江市辺りまでは古宍道湖湾が占めていたと考えられることから、遺跡が出現する箇所は出雲平野形成と密接に関わっているようである。以下に古代の出雲平野における集落の消長について概観しておきたい。

現在のところ、出雲平野において旧石器時代の遺跡は確認されていない。この地の遺跡の初現は、縄文時代の早期末である。縄文時代には出雲平野の大部分が古宍道湖湾によって占めていたと考えられることから、遺跡の出現は山麓付近などに限られていたようである。早期末の遺跡としては、上長浜貝塚、菱根遺跡が挙げられる。また、後期・晩期の遺跡としては、以前から矢野遺跡、出雲大社境内遺跡が知られていたが、近年の調査で蔵小路西遺跡、三田谷Ⅰ遺跡などでもこの時期の遺物が確認されている。

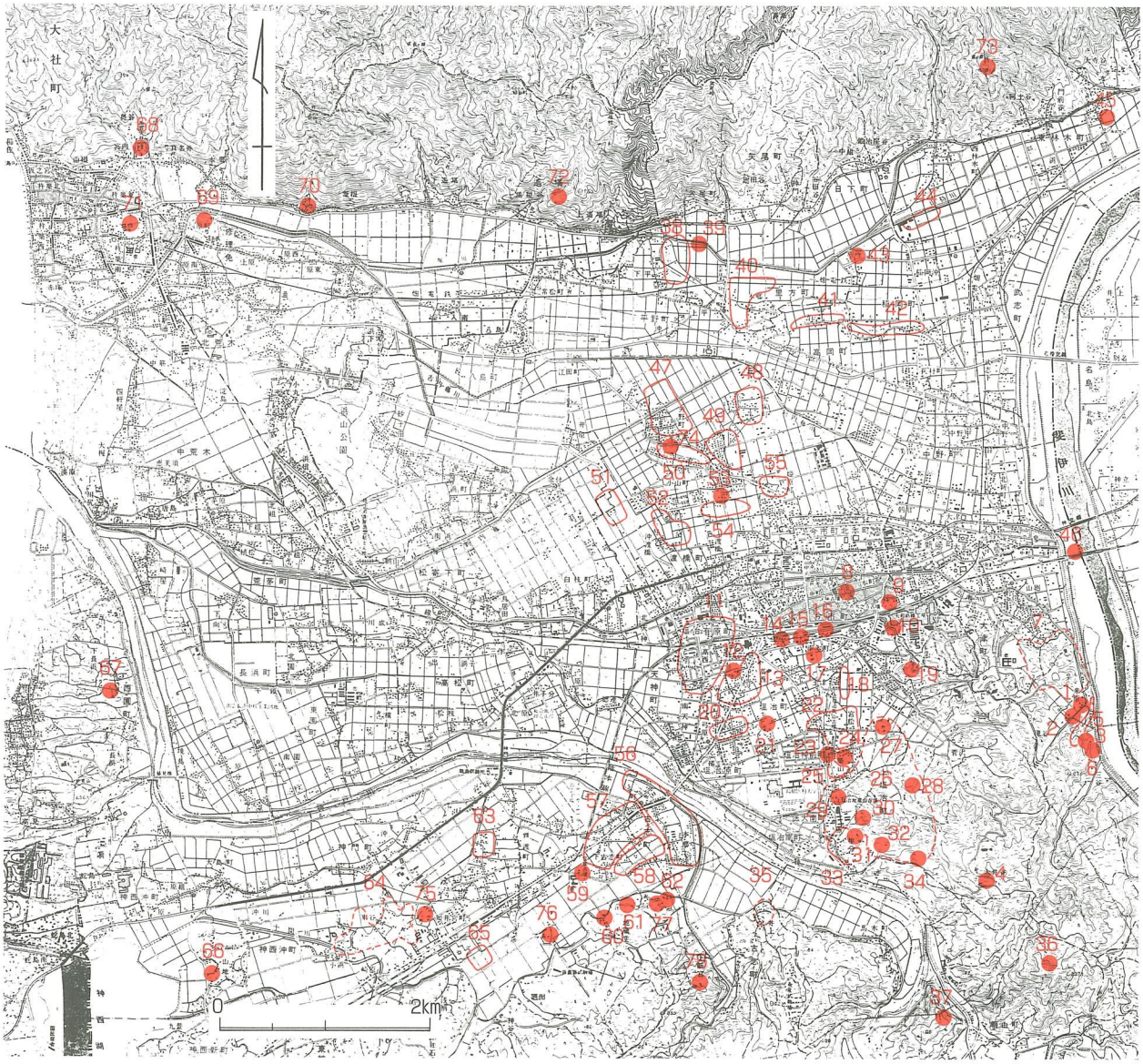
弥生時代前期の遺跡としては、矢野遺跡、原山遺跡などが挙げられる。弥生時代中期から神門水海の汀線付近に、天神、四絡、古志遺跡群などの大規模な集落が出現する。近年の調査では、天神遺跡、古志本郷遺跡などで環濠と考えられる大溝の検出が相次いでおり、出雲平野においても環濠を配した集落形態が広く採用されたと考えられる。これらの遺跡を背景に弥生時代後期には、この地の首長を葬ったとされる西谷３号墓など6基の四隅突出型墳丘墓を含む、西谷墳墓群が平野の南丘陵上に築造されるに至る。

古墳時代前期・中期には集落跡はほとんど確認されていない。この時期の古墳として、大寺古墳、山地古墳などが知られているものの、その数はごく僅かである。集落が衰退傾向にあったとも推定されている。しかし、後期後半以降には、島根県内では最大級の石室を有する今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳を筆頭に多数の古墳が築造され、また、上塩冶横穴墓群に代表される横穴墓群が飛躍的に増える傾向にある。

奈良時代以降のこの地の様子は、733年に編纂された『出雲国風土記』で辿れるほか、近年の調査でも新発見が相次いでいる。光明寺３号墓では石櫃が検出され、既知の小坂古墳や朝山古墓とともに、この地の初期火葬墓の解明に進展をみせつつある。また、古志本郷遺跡では官衙跡と推定される大型の掘立柱建物跡が確認され、神門郡家との関連が注目されている。また、蔵小路西遺跡からは、周囲を濠で囲繞した館跡が発見されるなど、中世城館跡の調査事例も増えつつある。

今回の調査対象遺跡である三谷遺跡、藤廻遺跡、長廻遺跡、大井谷Ⅱ遺跡、瀧谷山城跡の5遺跡はいずれも国土交通省出雲工事事務所が進める、斐伊川放水路事業地内に存在する遺跡であり、大井谷Ⅱ遺跡を除く４遺跡は放水路開削部付近に所在している。この箇所は、中国山地から派生する丘陵の尾根が斐伊川沿いに北に張り出しており、４遺跡はこの丘陵の尾根上や谷に占地している。また、大井谷Ⅱ遺跡については、これらから南西約1.8kmの地点の丘陵斜面に占地している。

これらの遺跡が存在する出雲市上塩冶地域を中心とする地区は、縄文時代以降の遺跡が連綿と確認されている地区であり、出雲平野の遺跡の変遷を解明する上でも極めて重要な地区である。



1.三谷遺跡　2.藤廻遺跡　3.長廻遺跡　4.大井谷Ⅱ遺跡　5.瀧谷山城跡　6.権現山古墳　7.西谷墳墓群　8.塚山古墳
9.今市大念寺古墳　10.平家丸城跡　11.天神遺跡　12.浄音寺境内館跡(伝塩冶氏館跡)　13.高西遺跡　14.善行寺遺跡
15.藤ヶ森遺跡Ⅱ地点　16.藤ヶ森遺跡Ⅰ地点　17.藤ヶ森南遺跡　18.角田遺跡　19.向山城跡(大廻城跡)　20.弓原遺跡
21.神門寺境内廃寺　22.宮松遺跡　23.塩冶判官館跡　24.上塩冶築山古墳　25.築山古墳　26.上塩冶横穴墓群
27.塩冶神社境内遺跡　28.大井谷城跡　29.上塩冶地蔵山古墳　30.半分城跡　31.権現山城跡　32.三田谷Ⅱ・Ⅲ遺跡
33.三田谷Ⅰ遺跡　34.光明寺3号墓・4号墳　35.井上横穴墓群　36.唐墨城跡　37.姉山城跡　38.高浜Ⅱ遺跡
39.里方八石原遺跡　40.高浜Ⅰ遺跡　41.高岡遺跡　42.稲岡遺跡　43.里方別所遺跡　44.山持川川岸遺跡　45.青木遺跡
46.斐伊川鉄橋遺跡　47.矢野遺跡　48.大塚遺跡　49.小山遺跡第3地点　50.小山遺跡第２地点　51.白枝荒神遺跡
52.渡橋沖遺跡　53.小山遺跡第１地点　54.蔵小路西遺跡　55.姫原西遺跡　56.古志本郷遺跡　57.下古志遺跡　58.田畑遺跡
59.宝塚遺跡　60.地蔵堂横穴墓群　61.妙連寺山古墳　62.放れ山古墳　63.知井宮多聞院遺跡　64.神門横穴墓群　65.浅柄遺跡
66.山地古墳　67.上長浜貝塚　68.出雲大社境内遺跡　69.原山遺跡　70.菱根遺跡　71.鹿蔵山城跡　72.蛇山城跡
73.鳶ヶ巣城跡　74.三木氏館跡　75.智伊館跡　76.布智城跡　77.浄土寺山城跡　78栗栖城跡

図1　出雲平野の主要遺跡(1:65,000)

第４章　三谷遺跡

第１節　位置と環境

三谷遺跡は出雲市大津町字三谷3204－1に所在し、出雲平野の南丘陵の谷部に位置する。以前は水田として利用されていたようだが、現地調査時は荒野地となっていた。東側の丘陵を越えると、島根県東部を代表する河川である斐伊川が北に向かって流れている。近隣の遺跡としては、当遺跡の東丘陵に瀧谷山城跡や長廻横穴墓群・長廻遺跡などがある。また、当遺跡の南西谷奥には藤廻遺跡がある。

第２節　調査の概要

三谷遺跡は斐伊川放水路事業に伴う試掘調査により発見した新発見遺跡である。大津地区の試掘調査は平成11年度に島根県教育委員会と出雲市教育委員会が地区を分けて共同で行った。当遺跡は島根県教育委員会が試掘調査し、古墳時代の土器が出土した。本調査は島根県教育委員会と出雲市教育委員会が協議した結果、平成12年４月より出雲市教育委員会が行うこととなった。当遺跡の本調査は平成12年４月17日～平成12年６月16日の約２ヶ月間行った。

調査は試掘結果を基に、遺物包含層上面までを重機により掘削し、以下の遺物包含層は人力により掘削した。当遺跡の発掘調査面積は約900㎡であった。

調査前の地形は南側に向かい段状に上がっており、南側の標高の高い部分を１区、北側の低い部分を２区として調査を行った。

１区の調査では、実測可能な遺物や遺構は確認できず、遺跡の北端付近と考えられる。したがって、試掘調査で出土した遺物は２次堆積した遺物と考えられよう。

２区の調査では、古墳時代の土器を包含する層を確認し、その下層で性格不明の土坑３基、ピット53穴を検出した。土坑からは明確な遺物は出土していないが、古墳時代の土師器の小片と考えられる土器が出土しているため、古墳時代の遺構と想定できる。また、ピットは掘立柱建物や住居などの柱穴として並ぶものは確認できなかったが、４穴で柱根が残っていた。遺物は古墳時代の土師器の小片が出土している。柱根の存在から何らかの遺構があったことが想定される。土坑やピットとの関係についても不明であるが、近い時期に築造されたと考えられる。

第３節　調査の結果

（１）層序

基本層序は、地表の１層は約1.5ｍの暗褐色粘質土が厚く堆積している。この層には遺物が包含されていないため、重機によって掘削し２層より人力により掘削を開始した。まず、南北、東西にサブトレンチを設定し掘削を進めたが、２層～５層までは遺物を包含しないことが分かり、６層の暗青灰色粘質土のみに遺物を包含することが確認できた。そのため、再び重機により２層～５層の約１ｍの掘削を行い、６層上面から本格的な発掘調査を開始した。遺物包含層は６層のみで、その下層は遺構検出面である。調査区の地形は１区～２区に緩やかに傾斜し、土層も南から北へ堆積したことがわかる。

（２）調査の結果

１区の調査では、遺物・遺構は確認できていない。試掘調査で出土した遺物は、２次あるいは３次堆積によるもので、遺跡の本体からははずれていたと考えられる。よって、１区～２区の南側で遺跡の南端の境界線が引けるであろう。

２区の調査では、遺構としては性格不明な土坑ＳＸ０１～０３と、ピット53穴を検出した。ＳＸ０１とＳＸ０２は平行するように並ぶ細長い土坑である。ＳＸ０３は平面形が隅丸方形をなし、ＳＸ０１・０２から約13m離れたところで検出した。ピットは53穴と多く検出しているが、住居や掘立柱建物などの柱の並びは確認できなかった。ピットの埋土はほとんど同じであり、埋没時期は近い時期であったと考えられる。ピットの中にはＰ４、Ｐ13、Ｐ17、Ｐ20のように柱根が残っているものもあった。６層の遺物包含層からは古墳時代の土器を中心に、弥生時代や奈良時代の土器などが出土している。

当遺跡の性格は集落跡と考えられる。しかし、遺跡の範囲がごく限られていることや、試掘調査の結果から北側に池あるいは沼のようなものがあったと考えられることから、水辺において古墳時代の人たちが何らかの行動をした遺跡で、一般的な集落跡とは性格を異にした場所と予想される。

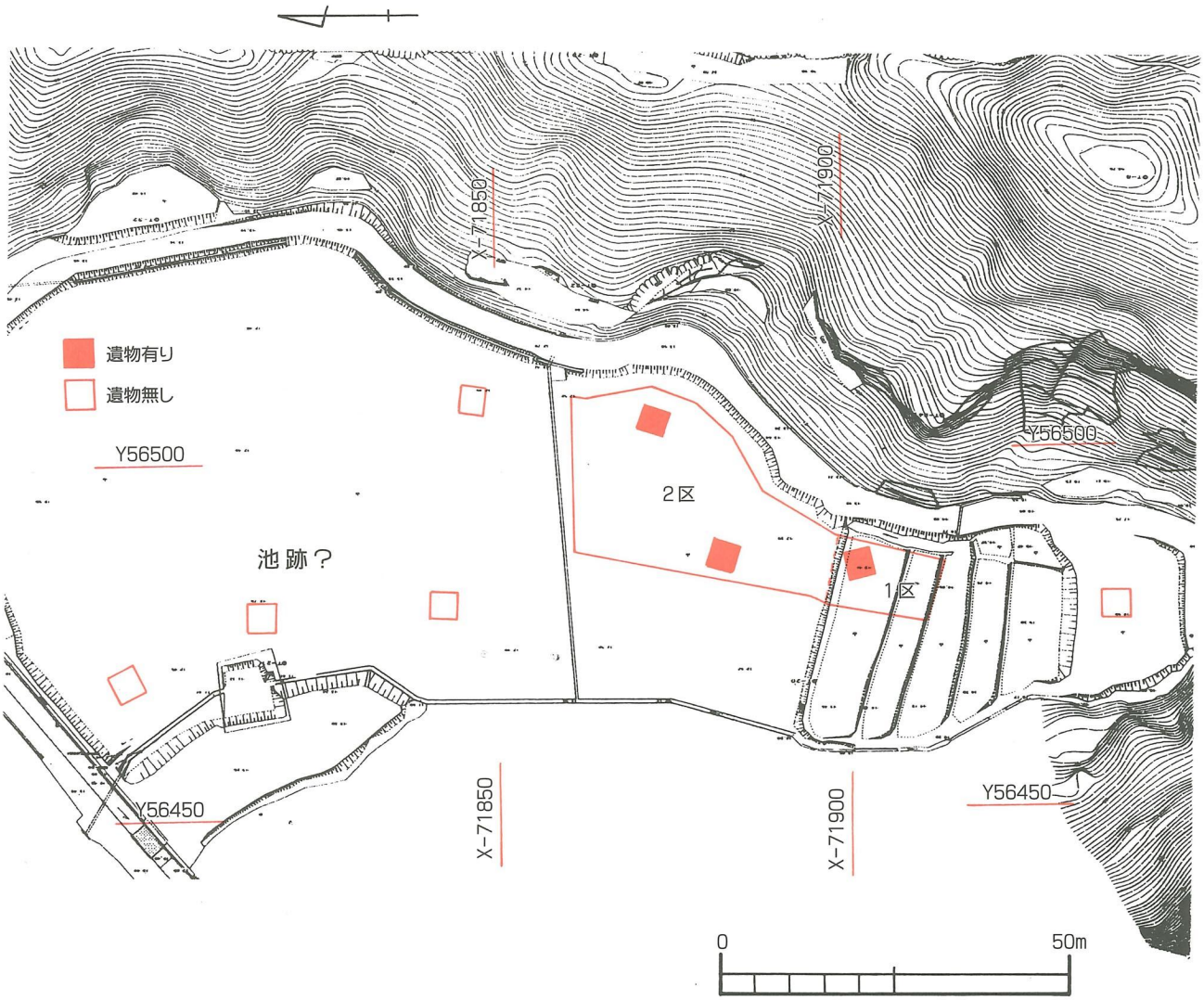


図2 試 掘 状 況

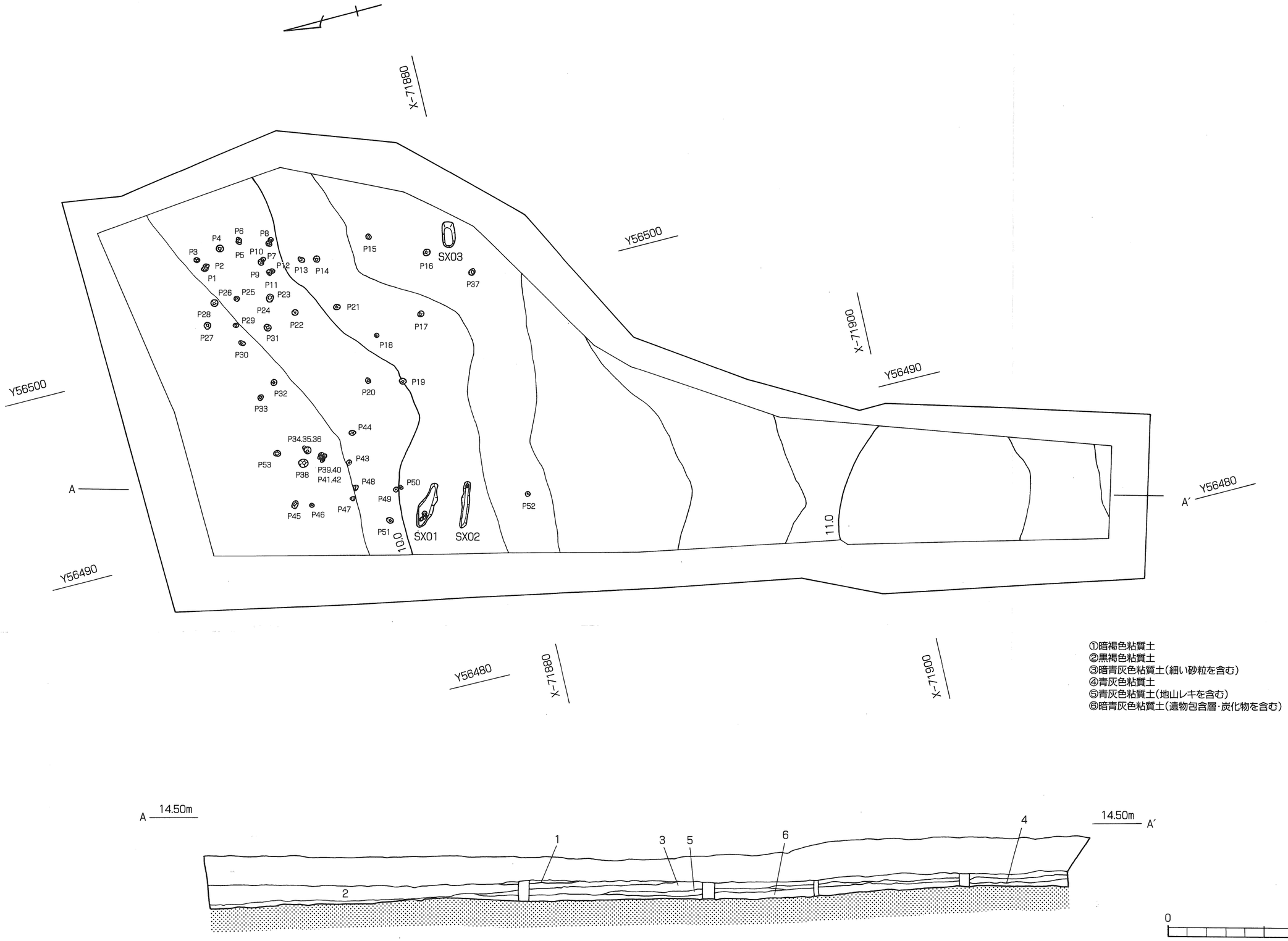


図3　調査区平面図・土層図

ＳＸ０１（図４）

ＳＸ０１は２区中央東よりの地山面で検出した。平面形は細長くいびつで、遺構中央で膨らんでおり、南東―北西に伸びる土坑である。断面形はゆがんだレンズ状をなす。長軸は約240cm、短軸は約80cm、深さ約20cmをなす。底面では2ヶ所のくぼみを検出したが性格は不明である。埋土には暗褐色粘質土が堆積し、古墳時代の土師器の小破片が数点出土した。しかし、小破片で実測不可能であった。ＳＸ０１の性格は不明である。

ＳＸ０２（図４）

ＳＸ０２はＳＸ０１の南約1.5m離れて平行に並んでいる。平面形は細長くいびつな棒状をなし、断面形は逆台形状をなす。長軸は約240cm、短軸は30cm、深さは５cmをなす細長く、浅い土坑である。埋土には暗褐色粘質土が堆積していたが、遺物は出土していない。

ＳＸ０３（図４）

ＳＸ０３は２区中央西側の地山面で検出した。平面形は長軸が東西方向の隅丸方形をなし、断面形は逆台形状をなす土坑である。長軸は約130cm、短軸は約70cm、深さ約20cmである。埋土には暗褐色粘質土が堆積していたが、遺物は出土していない。

ＳＸ０１～０３の性格や正確な時期は不明である。しかし、埋土が同じであることから比較的時期の近い時に造られたと考えられる。そうすると、ＳＸ０１から出土した土師器が古墳時代のものと考えられるので、ＳＸ０１～０３の土坑は古墳時代に造られた可能性が高い。

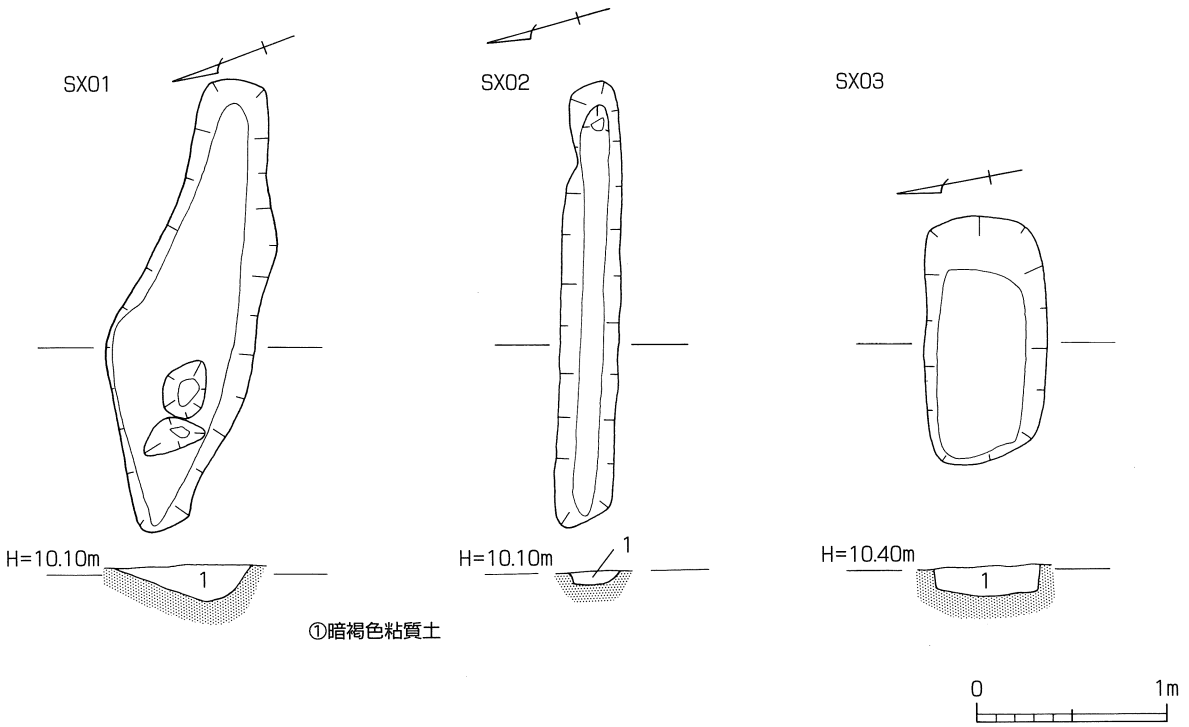


図4　SX01～03遺構図

ピット（表２、図５、図６）

ピットは２区で53穴を検出したが、遺構としての並びは確認できず、これらピット群の性格は不明である。検出面は７層の地山である。ピットには埋土が暗灰色粘質土（１層）のピットと、暗青灰色粘砂土（２層）のピットがあり、切り合い関係から２層をもつピットが古くつくられている。出土遺物は土師器の小破片で実測可能な遺物は出土していないが、古墳時代頃の遺構である可能性が高い。

表2　ピット観察表

ピット番号	直径(cm)	深さ(cm)	埋土	摘要
1	30	36	1	P2を切っている
2	30	36	2	P1に切られている
3	20	14	1	
4	32	60	1	柱根が残る
5	24	24	1	P6を切っている
6	24	24	2	P5に切られている
7	26	14	1	P8を切っている
8	23	20	2	P7に切られている
9	25	16	1	P10を切っている
10	20	16	2	P9に切られている
11	32	30	1	P12を切っている
12	22	30	2	P11に切られている
13	24	58	1	柱根が残る
14	28	30	1	
15	28	22	1・2	
16	30	26	1	
17	30	56	1	柱根が残る
19	30	32	1	
20	22	50	1	柱根が残る
21	30	32	1	
22	22	42	1	
23	14	34	1	P24を切っている、サブトレにより半壊
24	40	20	2	P23を切られている、サブトレにより半壊
25	20	20	1	サブトレにより半壊
26	30	20	1	
27	30	12	1	P28を切っている
28	24	12	2	P27に切られている
29	24	26	1	
30	50	20	1	
32	24	40	1	
33	28	20	1	
34	38	42	1	P36を切って、P35に切られている
35	20	10	1	P34を切っている
36	38	24	2	P34に切られている
37	30	24	1	
38	50	20	1	
39	30	10	1	P40、P41、P42を切っている
40	26	10	1	P41を切って、P39に切られている
41	30以上	10	2	P39、P40、P42に切られている
42	30	10	1	P41を切って、P39に切られている
43	26	32	1	
44	24	28	1	
45	35	34	1	
46	20	20	1	
47	24	24	1	
48	24	18	1	
49	28	30	1	
50	22	36	1	
51	20	26	1	
52	18	20	1	
53	26	24	1	

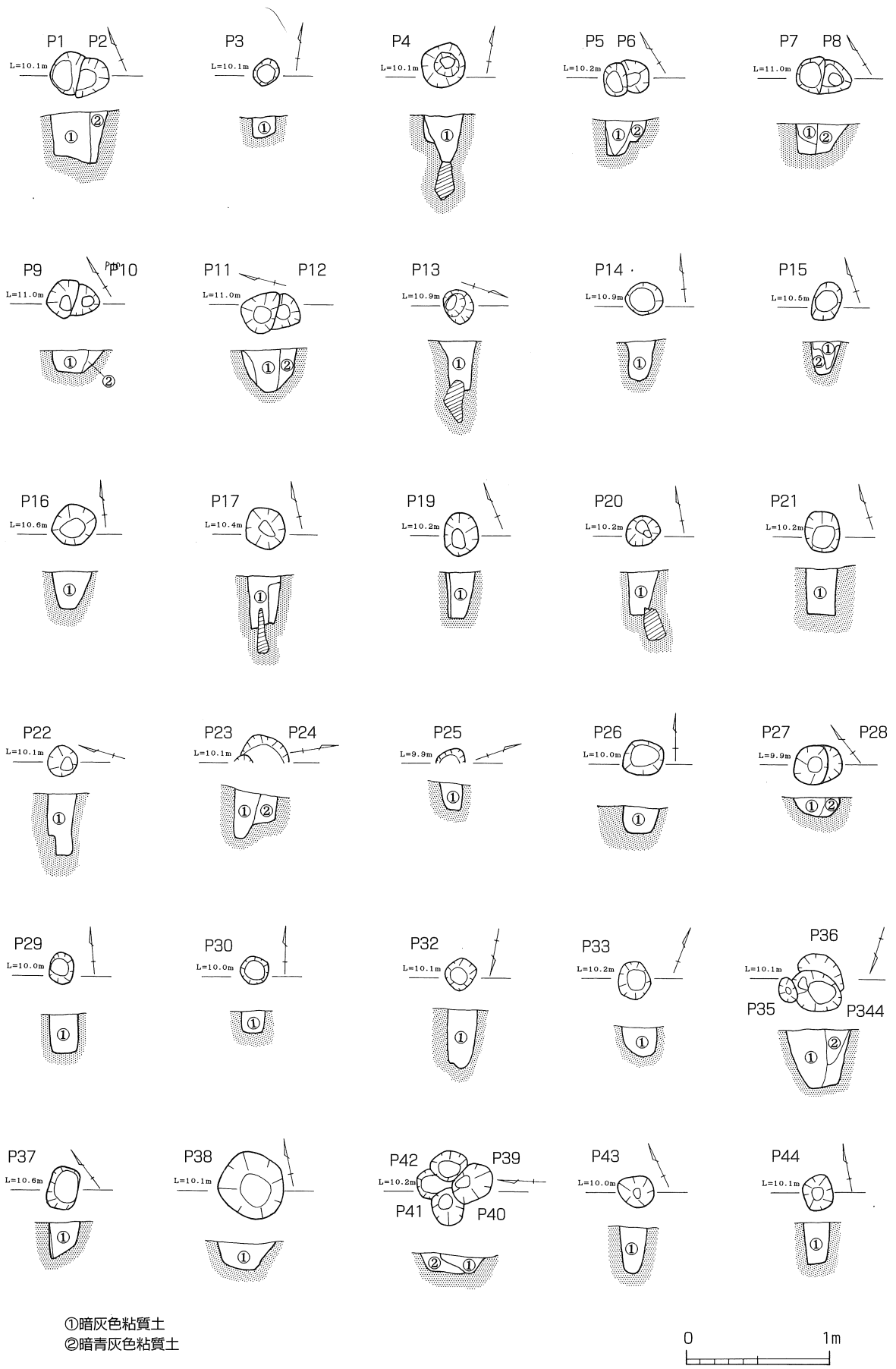

P1 P2
L=10.1m
P3
L=10.1m
P4
L=10.1m
P5 P6
L=10.2m
P7 P8
L=11.0m
P9 P10
L=11.0m
P11 P12
L=11.0m
P13
L=10.9m
P14
L=10.9m
P15
L=10.5m
P16
L=10.6m
P17
L=10.4m
P19
L=10.2m
P20
L=10.2m
P21
L=10.2m
P22
L=10.1m
P23 P24
L=10.1m
P25
L=9.9m
P26
L=10.0m
P27 P28
L=9.9m
P29
L=10.0m
P30
L=10.0m
P32
L=10.1m
P33
L=10.2m
P36
L=10.1m
P35 P344
P37
L=10.6m
P38
L=10.1m
P42 P39
L=10.2m
P41 P40
P43
L=10.0m
P44
L=10.1m
①暗灰色粘質土
②暗青灰色粘質土
0
1m

図5 ピット図1

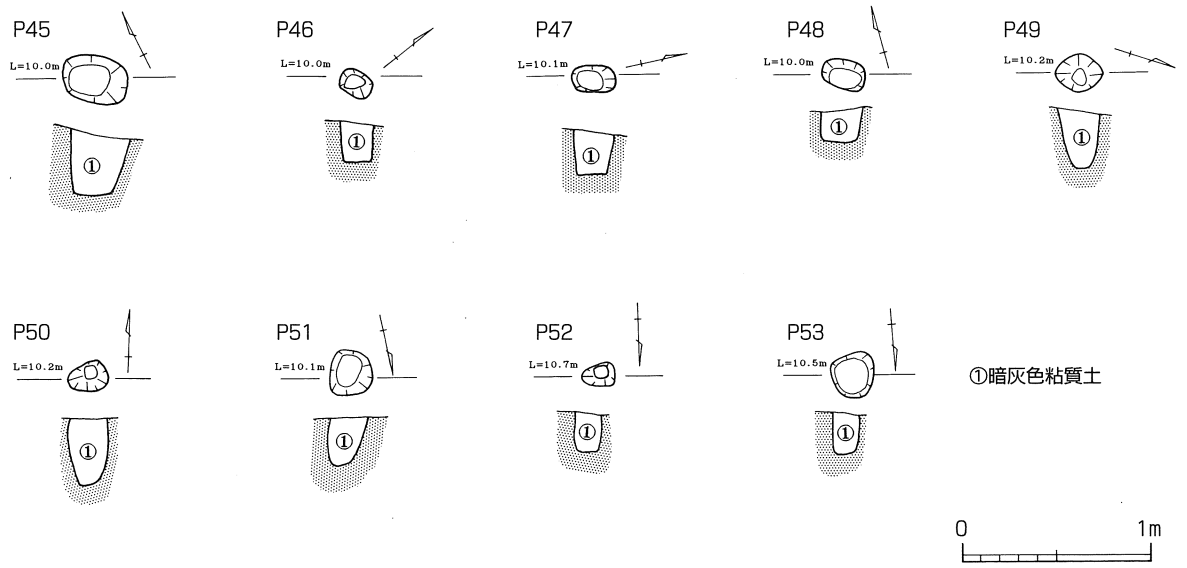


図6 ピット図2

包含層出土遺物（図７、図８）

遺物包含層は７層で、多くの土器破片が出土し、実測可能な遺物44点を掲載する。出土土器は古墳時代を中心に、弥生土器片や奈良時代の土器も出土している。

図７－１、２は弥生土器の甕の口縁部である。１は口径約17.3cm、残高4.2cmを測る。屈曲部はＣ字状に外反し、口縁部は短く直立する。口縁部外面には４条の擬凹線文が施してある。胴部外面はナデ、内面はケズリが施してある。色調は暗褐色をなし、胎土に長石・石英を含む。時期は弥生後期前葉（草田１期）と考えられる。２は複合口縁をなす甕で口径約20cm、残高4.7cmを測る。２次口縁部は外反して開き、中央が膨らみ、口縁端部は先細りする。内外面はナデが施してある。時期は弥生後期終末（草田５期）と考えられる。

図７－３～図８－20は古墳時代の土師器である。図７－３～７は複合口縁壺あるいは甕の口縁部から胴部にかけての破片である。３は甕で口径約18cm、残高5.9cmを測る。１次口縁と２次口縁の外面接合部は丸く、口縁端部は面をなす。胴部外面にはヨコハケメ、内面にはケズリが施してある。胎土には長石、石英、白色砂粒を含み、色調は黄橙色をなす。４は壺で口径約26.6cm、残高5.2cmを測る。２次口縁部は器壁が厚く、直立し、口縁端部は面をなす。内外面ともにナデが施され、胎土に長石、石英を含み、色調は浅黄色をなす。５は壺で、口径約26.8cm、残高7.5cmを測る。頸部は筒状をなし、１次口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸い。内外面ともにナデが施され、器壁は厚く、胎土に長石、石英を含み、色調は浅黄色をなす。６も壺で口径約18.4cm、残高4.5を測る。１次口縁部は短く外反し、口縁端部は丸い。内外面ともにナデが施され、器壁は厚く、胎土に長石、石英を含み、色調は浅黄色をなす。７は壺の頸部片で、胴部と頸部の境に１条の方形の突帯が巡る。頸部径15.2cmを測り、胴部内面はケズリが施され、器壁は厚い。色調は浅黄色をなす。

図７－８、９は小型丸底壺の口縁部片である。８は口径約9.8cm、残高5.3cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は先細る。口縁部外面はタテハケ後ナデ消し、胴部内面には指頭圧痕がある。胎土

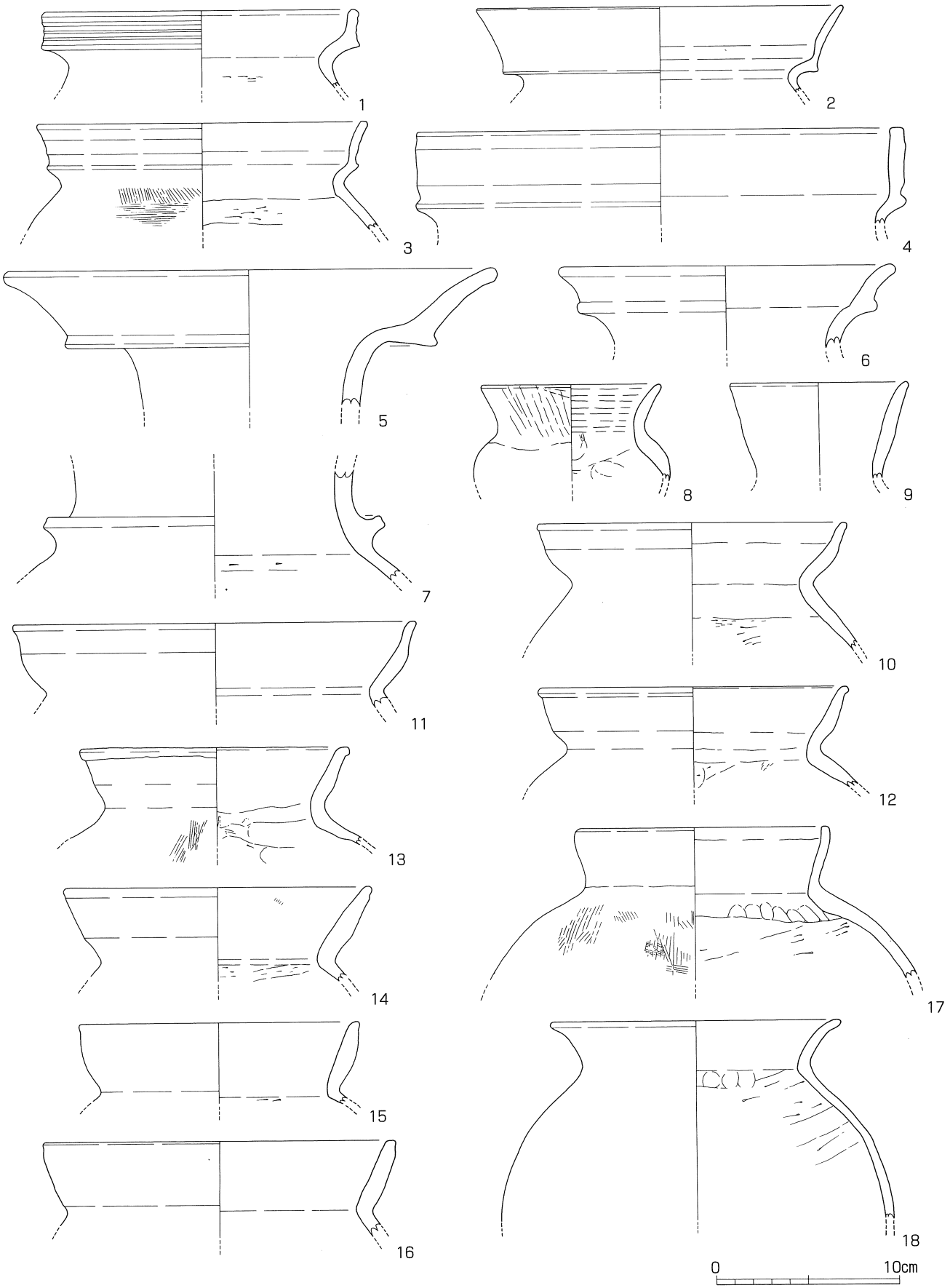


図7　包含層出土遺物実測図　1

に長石、石英を含み、色調は黄褐色をなす。９は口径約9.8cm、残高5.1cmを測る。口縁部は直線的に開き、口縁端部は先細る。内外面ともナデが施してあり、胎土は精製され色調は浅黄色をなす。

図７－10～18は単純口縁をなす甕の口縁部から胴部にかけての破片で、胴部内面にケズリが施され、胎土に長石、石英を含む。10～12は複合口縁の名残があり、口縁端部はやや外方に引き出されている。10は口径16.9cm、残高7.1cmを測る。色調は浅黄色をなす。11は口径約21.7cm、残高4.6cmを測り、全面に磨滅している。色調は灰白色をなす。12は口径約16.9cm、残高5.7cmを測る。胎土に赤色粒も含み、色調は灰白色をなす。13～17は口縁部が内湾気味に開くものである。13は口縁端部が外方に肥厚している。口径約14.8cm、残高5.3cmを測り、胴部外面はタテハケが施され、色調は浅黄色をなす。14は口縁端部が面をなし、口径約16.8cm、残高5.2cmを測り、色調は浅黄色をなす。15は口縁端部がやや外方につまみ出され、口径約15.3cm、残高4.5cmを測り、色調は浅黄色をなす。16は口縁端部がやや外方につまみ出され、口径19.2cm、残高5.3cmを測り、全面に磨滅が著しく、色調はにぶい黄褐色をなす。17は口縁部が内湾気味に直立し、口縁端部は面をなし、口径約16.3cm、残高9.4cmを測る。胴部外面にはタテハケメが施され、指頭圧痕がある。色調は黄灰色をなす。17は口縁部が外反して開き、口縁端部は丸く、器壁は薄い。口径約15.8cm、残高約10.9cmを測る。全面に磨滅気味であるが、指頭圧痕がある。胎土には赤色粒を含み、色調は灰黄色をなす。

図８－１、２は鼓形器台で、口縁部あるいは脚端部は外方に引き出され、口縁端部は面をなし、筒部は短い。１は器受部から筒部にかけての破片で、口径約17cm、残高7.4cmを測る。全面に磨滅気味で、脚台部内面はケズリが施してあり、胎土に長石、石英を含み、色調は浅黄橙色をなす。部分的に赤く発色している。２は脚台部から器受部にかけての破片で、脚径約14.8cm、残高6.8cmを測る。脚台部には２ヶ所に円孔が残る。全面に磨滅気味で、脚台部内面はケズリが施され、胎土に長石、石英を含み、色調は浅黄橙色をなす。部分的に赤く発色している。

図８－３、４は低脚坏の脚部で、胎土に長石、石英を含む。３は脚径3.8cm、残高1.8cmを測り磨滅気味で、色調は浅黄橙色をなす。４は脚径4.9cm、残高1.9cmを測る。全面にナデが施され、色調は橙色をなす。

図８－５～20は高坏である。５～９は坏部から接合部にかけての破片で、口縁部と坏部の境が明瞭に屈曲している。５は口径20.1cm、残高6.1cmを測る。内外面ともにハケメ後ミガキが施され、胎土は精製されているが、赤色粒を含み、色調はにぶい黄橙色をなす。６は口径約19.1cmを測る。内外面ともにミガキが施され、胎土は精製され、色調はにぶい橙色をなす。７は口径約14cm、残高4.2cmを測る。接合部内面には刺突痕がある。坏部外面にはハケメが施され、胎土は精製され、色調は浅黄橙色をなす。８は残高3.4cmを測り、接合部は厚く、内面では粘土が肥厚している。全面にナデが施され、胎土には長石、石英を含み、色調は浅黄橙色をなす。９は坏部から脚端部にかけての破片で、脚径9.8cm、残高8.2cmを測る。接合部内面には刺突痕がある。脚部外面はミガキ、内面裾部はハケメ後ナデ消しが施され、胎土は精製され、色調は橙色をなす。10～16は接合部から脚部の破片である。12以外の10～16は磨滅気味であるが、脚部外面にミガキ、内面にケズリが施され、色調は浅黄色をなす。12は坏部が椀状をなし、接合部内面が肥厚する。外面はハケメが施してある。17～19は脚部の破片で、筒部から強く屈曲して裾部が開く。17は脚径約10.1cm、残高6.4cmを測り、外面はハケメ後ミガキが、

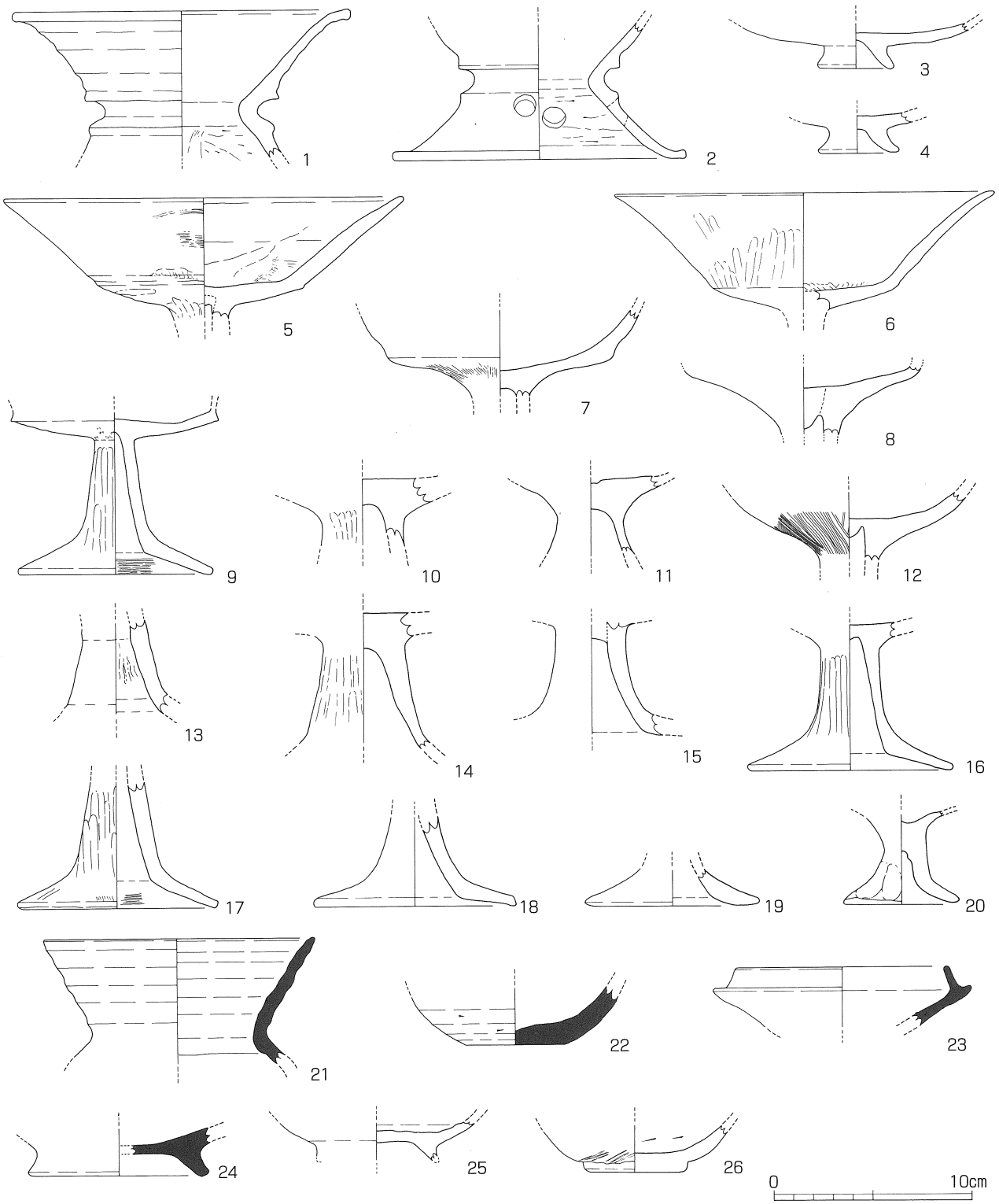


図8　包含層出土遺物実測図　2

内面はハケメ後ナデ消しが施してある。色調は浅黄色をなす。18、19は胎土が精製され、全面に丁寧なナデが施され、色調は浅黄色をなす。18は脚径10.1cm、残高4.5cmを測る。19は脚径約8.8cm、残高1.7cmを測る。

図８－20は接合部から脚部にかけての破片で、手捏土器である。脚径約5.9cm、残高4.7cmを測り、脚外面に指頭圧痕が強く残る。胎土に長石、石英を含む。

図７－３～図８－20の時期は古墳時代前期後半～中期前半にかけてと考えられる。

図８－21～24は須恵器である。21は直口壺の口縁部片で、口径約13.6cm、残高6.3cmを測る。口縁部外面は回転ナデが強く、屈曲部内面に接合痕が見える。22は壺の底部片と考えられ、底径約5cm、残高2.9cmを測る。底部外面には回転ケズリが施してある。23は坏身片で口径10.8cm、残高３cmを測る。かえりは口縁部より長い。24は高台付埦の底部片で、底径約９cm、残高2.4cmを測る。高台はハ字状をなし、底部と体部の境に付く。図８－21～23の時期は古墳後期（大谷編年４期）、24は奈良時代頃と考えられる。

図８－25、26は土師器である。25は高台付埦の底部である。底径は約６cm、残高1.9cmを測り、全面にナデが施してある。26は底部片で底径約5.2cm、残高2.4cmを測る。底部はボタン状に突出しており、胴部外面はタタキ後ナデ消し、内面はケズリが施してある。色調は灰黄色をなす。25、26の時期は不明である。

第4節　まとめ

三谷遺跡は放水路建設に伴う分布調査、試掘調査により見つかった新発見遺跡である。当遺跡の特徴は遺跡の全体の範囲が小さいことがあげられる。遺跡が機能していた頃は、北側が池上の落ち込み、東西は丘陵、南は細い谷筋といった地形であったと考えられる。また、遺構としてはピット群と土坑があるのみで、一般的な集落跡とは性格を異にすることが考えられる。

三谷遺跡は包含層出土土器から弥生後期、古墳時代、平安時代の遺跡であることがわかった。特に遺跡の中心となる時期は、古墳時代前期後半～中期前半にかけてで、ピット群や土坑も当該期であった可能性が高い。出土遺物からは、図８－20の手捏土器で、当遺跡で何らかの祭祀行為が行われた可能性が考えられる。先述の立地の問題と絡めて考えると当遺跡の性格の解明に近づくことが可能である。ただ、祭祀に係わる遺物は他に出土していないため祭祀遺跡とする根拠には乏しい。

出雲平野では以前から、遺構外遺物として量的には少ないが古墳時代前期後半～中期の土器は出土していた。また、古墳も数は少ないがその存在は知られていた。しかし、生活空間についてはほとんど分かっていない状況で、古墳時代前半（草田６期後半～草田７期）に遺跡が解体し、当該期が遺跡の空白期などと呼ばれることが多かった。近年の発掘調査の増加により、当該期の様子が少しずつ解明されてきている。特に、三田谷Ｉ遺跡では中期の竪穴住居跡が12棟確認されている。また、当遺跡の南にある長廻遺跡でも竪穴住居跡や土坑、溝などが確認されており、集落の分布などがより鮮明になってきている。

当遺跡は今回の調査で一般的な集落跡ではないことが想定される。この場所を使用した人たちは、遺跡の分布から南側の尾根を越えた長廻遺跡の人々である可能性が考えられる。今後は長廻遺跡との関連性を考慮しながら、出雲平野の弥生時代から古墳時代前半期の動向を解明していく必要があろう。

第５章　藤廻遺跡

第１節　位置と環境

藤廻遺跡は出雲市大津町字藤廻３４４３外に所在し、出雲平野の南丘陵の谷奥に位置する。現況は小川状をなし、所々に岩盤が露出し、常に水が流れている状況であった。この小川は、丘陵に降った雨水が集まってできたもので、水量は少量であるが、北側の三谷遺跡を通り、高瀬川に流れている。

東側の丘陵を越えると、島根県東部を代表する河川である斐伊川が北に向かって流れている。近隣の遺跡としては、当遺跡の東丘陵に瀧谷山城跡や長廻横穴墓群・長廻遺跡などがあり、北側には三谷遺跡がある。

第２節　調査の概要

藤廻遺跡は斐伊川放水路事業に伴う分布調査により発見した新発見遺跡である。大津地区の分布調査において、瀧状に岩盤が露出している場所があり、東側丘陵に所在する山城跡（瀧谷山城跡）に関連する水門状遺構ではないかと考えられた。よって、当遺跡を藤廻遺跡として命名し、発掘調査を出雲市教育委員会で実施することになった。

当遺跡の発掘調査は、平成12年９月25日～平成12年11月24日までの約２ヶ月間実施し、発掘調査面

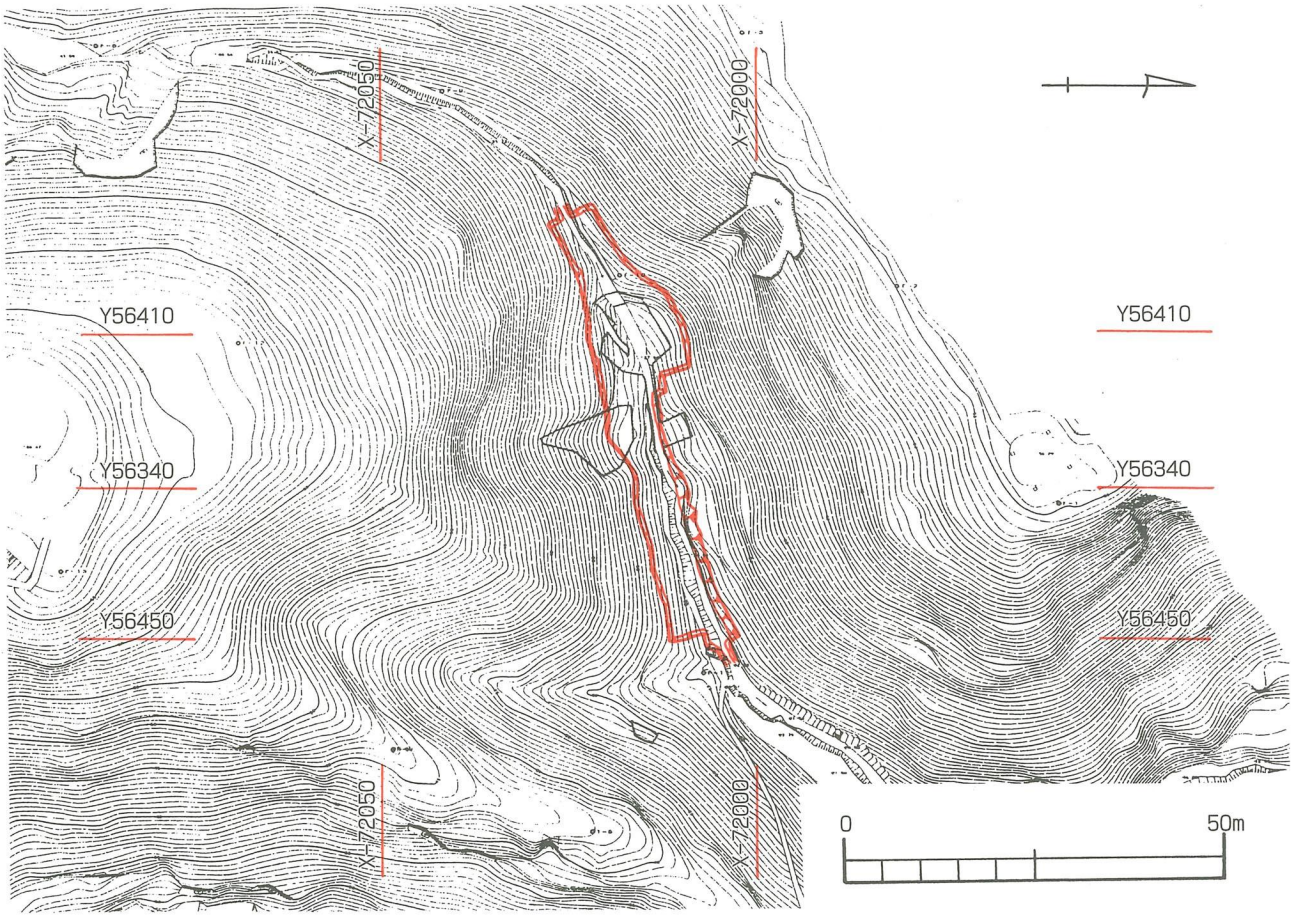


図9　調査前測量図

積は約200㎡であった。

調査地の地形は、北東から南西にかけて標高が上がっており、調査区の中央から東よりに瀧状の段がある。瀧の上段を１区、瀧の下段を２区とし調査を行った。

第3節　調査の結果

（１）層序

１区の層序は、２層の表土、３層の暗褐色シルト、軟らかい岩盤となる。岩盤上に約50cmのシルト層が堆積しているが、岩盤は風化が激しく、岩盤表面は凹凸している。

２区の層序は、斜面には約20cmの２層の表土が堆積し、谷底付近では３層も堆積している。その下は硬い岩盤となる。遺物の出土はなく、遺物包含層は確認できなかった。

（２）調査の結果

１区の調査では、遺構・遺物は確認できなかった。２区と大きく異なる点は、地山である岩盤が非常に軟らかく、風化が著しい点である。調査中にも、岩盤の表面が剥がれてしまう状況であった。

２区の調査では、調査区全体に硬い岩盤があることが確認できた。瀧については、人工的なＬ字状カットの痕跡は確認できず、自然にできた瀧の可能性が高い。しかし、瀧に登る両サイドには岩盤を刳り貫いて造ったピットを４つ、南側には階段状遺構を確認した。このピットは水を溜めるための水門状遺構の一部で、そこに行くための階段と考えられる。また、２区の南では、この瀧（水門）に向かうための道状遺構を確認した。斜面の岩盤をノミによりＬ字状にカットし、歩く面を作り出している。また、２区東の谷底稜線付近にも人為的に岩盤を加工した跡（ＳＸ０１）を確認した。しかし、この遺構についての性格は不明である。以下、２区の遺構について説明する。

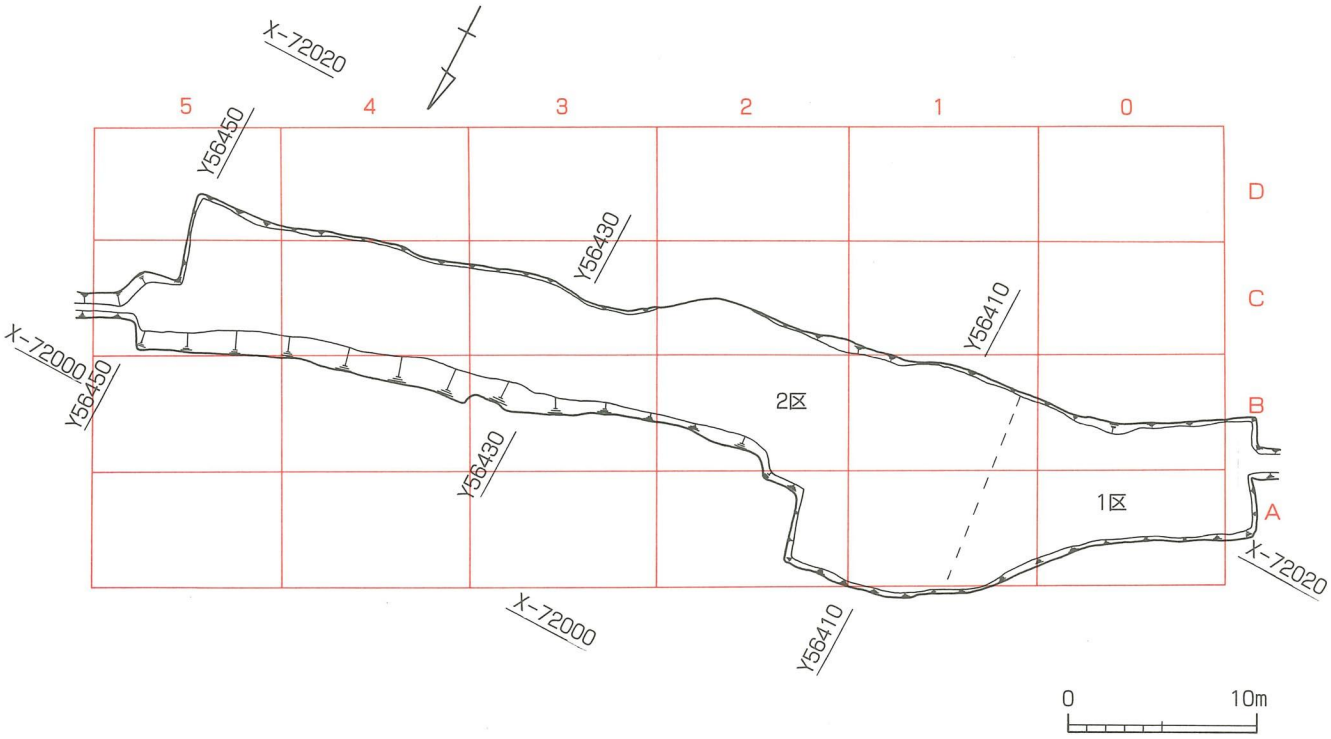


図10　調査区配置図

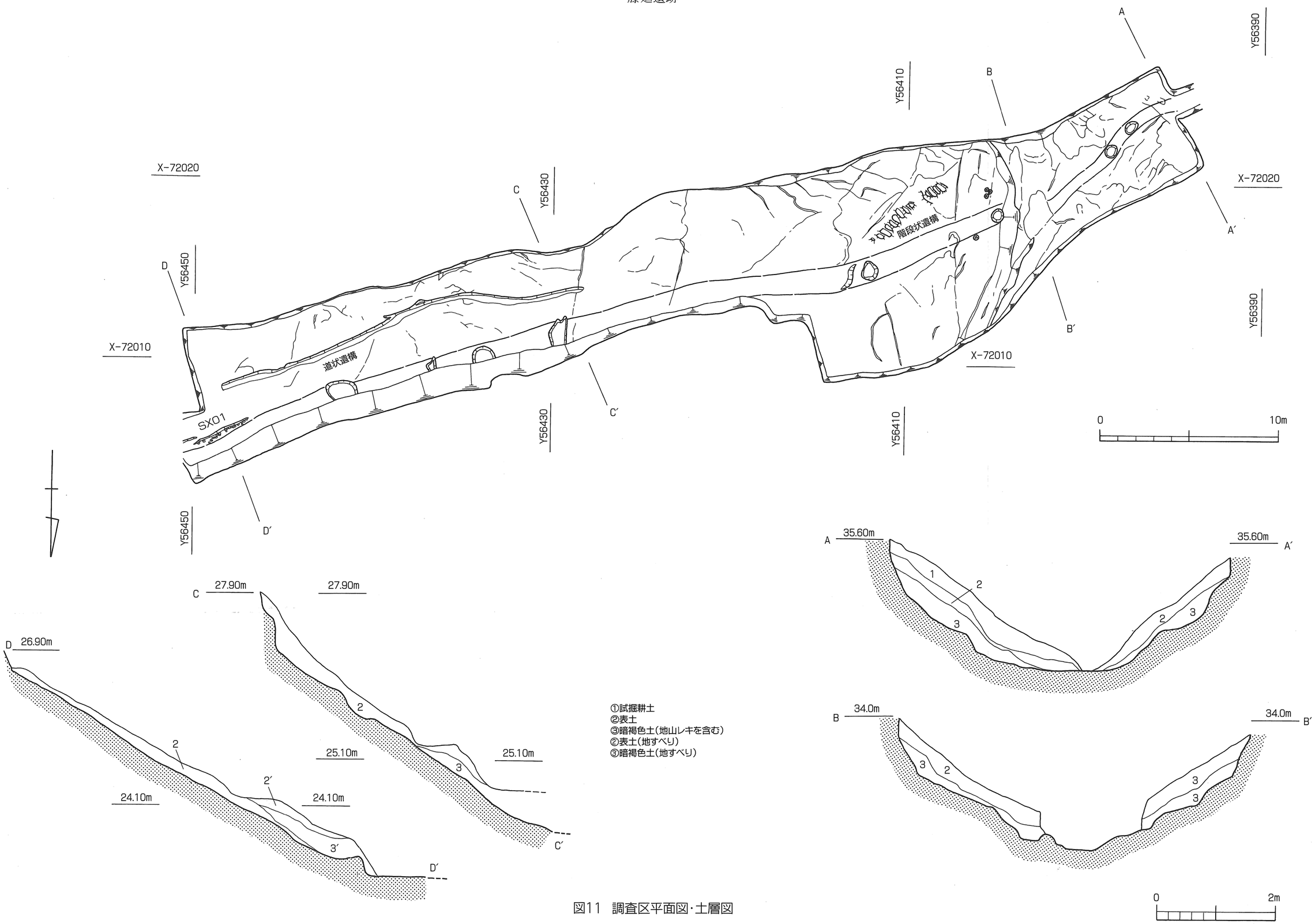


図11　調査区平面図・土層図

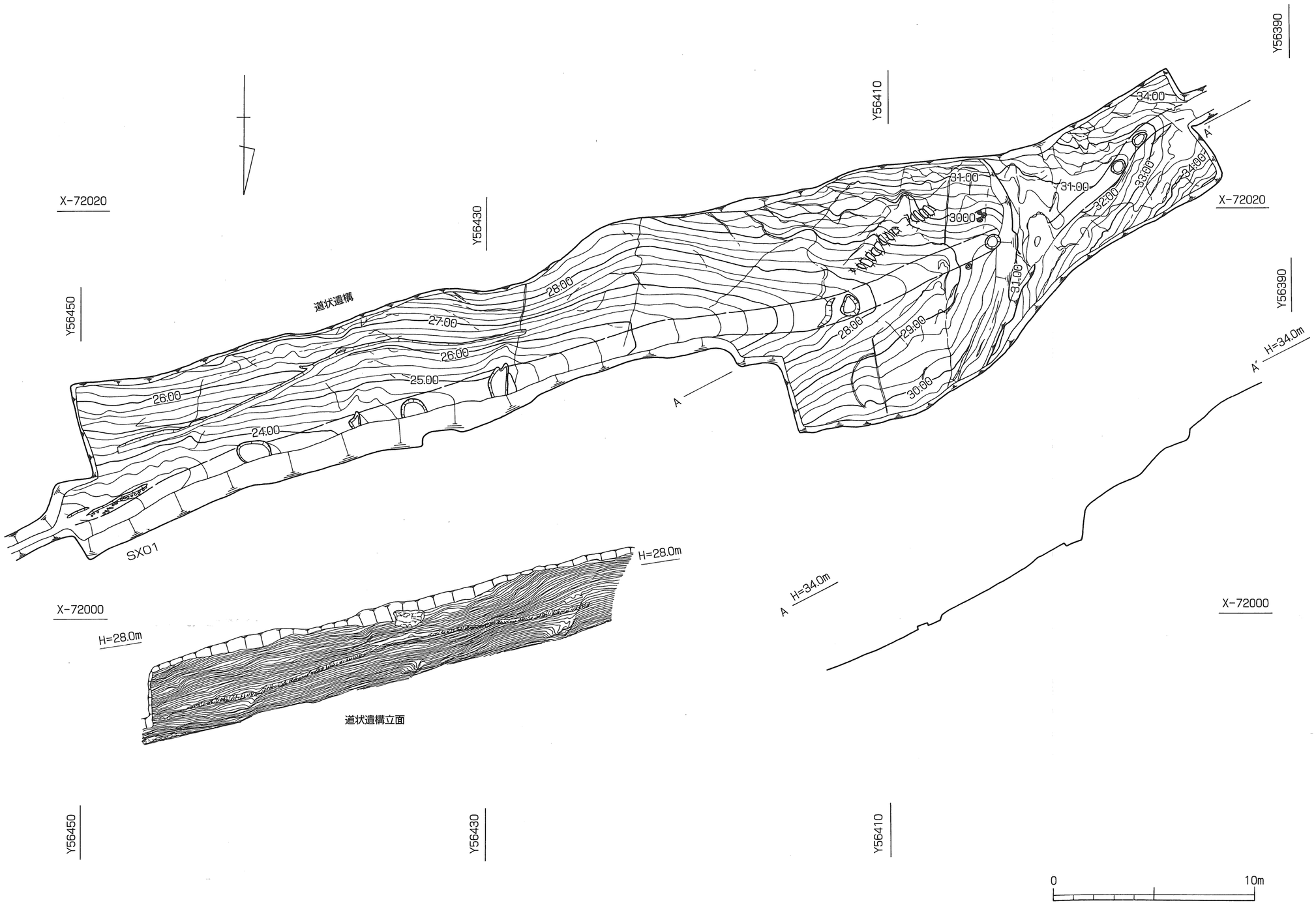


図12 調査終了後測量図

瀧（図12、図13）

この瀧は、分布調査の際に瀧谷山城跡に伴う水門状遺構の可能性があると考えられていた。また、瀧の段は人工的にカットしたものではないかということが考えられていた。調査前から岩盤が露出している部分もあったが、苔や植物で覆われた状況であった。

瀧の上段と下段の比高差は約1.5m、幅８mを測る。この滝の岩盤や周辺の岩盤の表面観察では、ノミ痕は確認できず、人工的にカットしてできた段という根拠は見つからず、自然にできた段の可能性が高いと考えられる。

瀧の水が落ちる場所（瀧壷）に、円形の窪みを検出した。直径は約80cm、深さは約30cmを測る。この窪みの岩盤表面観察を行ったが、ノミ痕は確認できず、長年の落水による浸食で生じたと考えられる。このような、瀧壷状の窪みは調査区の中で9ヶ所確認したが、いずれもノミ痕は確認できず、これらも水による浸食でできたと考えられる。

ピット（図13、図15）

瀧壷から1.5m北東でピット１（Ｐ１）、南東に1.5mでピット２～４（Ｐ２～４）を検出した。これらのピットにはノミ痕が確認でき、人工的な窪みと考えられる。これらのピットは瀧から流れてくる水をためる為の水門状遺構の柱穴と想定できる。Ｐ２～４は水門の建替えにより生じた柱穴で、Ｐ１とＰ２～４の距離は約2.5ｍで、幅約2.5mの水門が建てられていたと考えられる。これらのピットは斜面に穿たれ、いびつな楕円形状をなす。Ｐ１は直径26cm、深さ12cm、Ｐ２は直径20cm、深さ約10cm、Ｐ３は直径18cm、深さ15cm、Ｐ４は直径20cm、深さ15cmを測る。

階段状遺構（図13、図14）

瀧から７ｍ東で階段状遺構を検出した。階段は下段の11段と上段の６段の計17段で、岩盤を削って造ってある。明瞭なノミ痕は残っていなかった。段差は約10cm、幅30cm程度であり、先述の水門状遺構の南側（Ｐ２～Ｐ４）に向かうように造っているようである。

道状遺構（図11、図12）

２区東側で道状遺構を検出した。道状遺構は斜面の岩盤をＬ字状にカットして造られており、ノミ痕が約21.2ｍにわたり確認できた。道は垂直方向に約20cm～30cmカットし、道幅約20cmのものを造っている。この道状遺構は、先述の水門に向かうための道と考えられる。調査中にこの道を歩くと、幅が20cmでは非常に狭く、歩きづらい状況であった。この道は、堆積土や造成土を利用して道幅を若干広げていたことも考えられるが、調査時の土層では土による道の拡張は確認できなかった。

ＳＸ０１（図11、図12）

２区東端谷底稜線付近で、人工的に岩盤を加工した跡を約4.5mにわたり確認した。斜面をＬ字状にカットしたノミ痕があり、底面にも円形にノミ痕が残っていた。この加工痕の性格は不明で、底面にノミ痕が見られることから、何らかの遺構の加工途中である可能性が高いと考えられる。

図13　調査区西半部遺構図

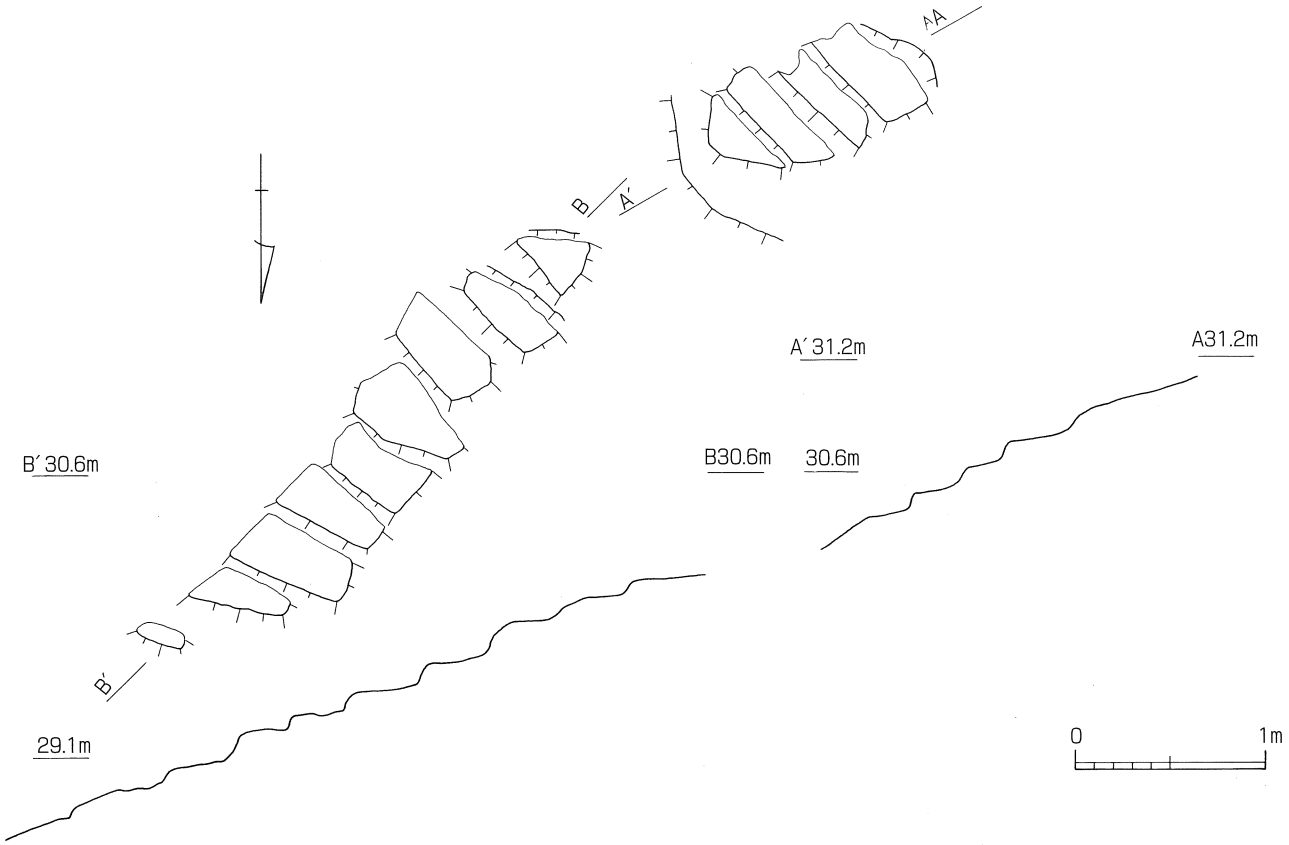


図14　階段状遺構図

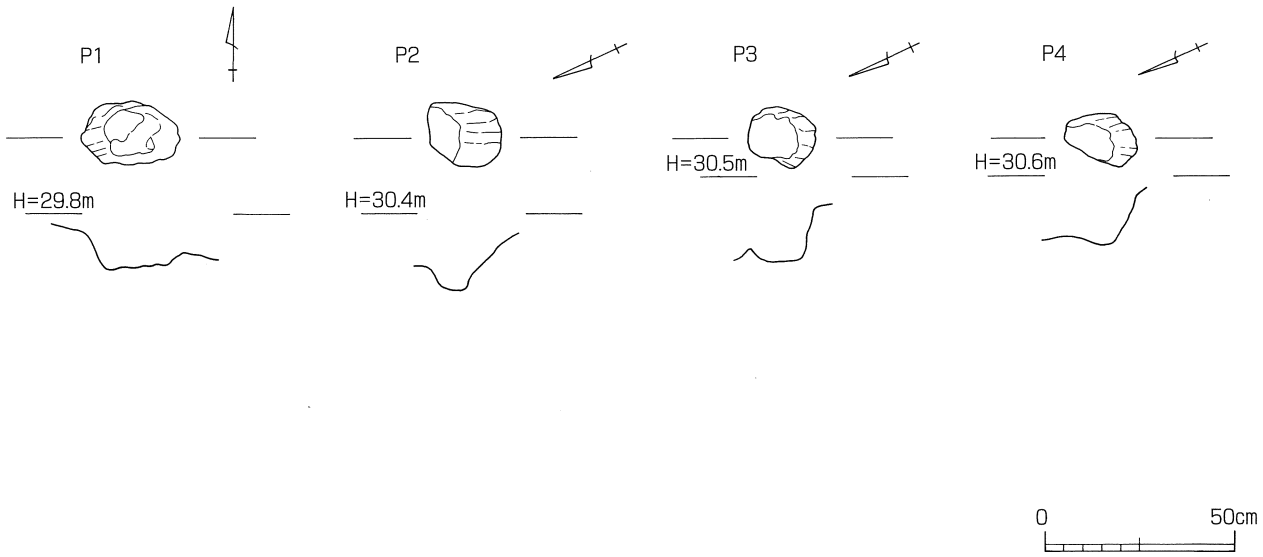


図15　ピット図

第4節　まとめ

藤廻遺跡では水を堰き止めるための水門状遺構の一部を検出した。堰きとめた水を汲みにいくための道状遺構や階段状遺構も確認した。これらの遺構の時期は、出土遺物がないため不明であるが、当遺跡の南側丘陵上にある瀧谷山城跡との関連性が高いと考えられる。瀧谷山城跡は16ｃ頃の支城で、当遺跡との関係は、山城の水手（飲用水や生活水）として水門状遺構で溜めた水を利用していたと想定される。また、当遺跡の道や階段を通って、瀧谷山城跡の北１郭に向かう通路として使用されたと考えられる。

このような山城の水手について島根県内での報告事例[1]は、三刀屋町の尾崎城や宍道町の金山要害山城跡があげられる。尾崎城では「殿井手水路」と伝わる水路が３kmにわたり築かれている。また、金山要害山城跡でも約2.7kmの山肌を伝って水路を築いている。この2例は約３kmも離れた場所から水路を造っての導水に苦労がうかがえる。藤廻遺跡では人力による水の運搬が想定されるが、瀧谷山城の掘切跡まで約130m、布掘建物跡までが約220m、掘立柱建物跡までが300mでごく近くに水手があったことがわかる。

また、藤廻遺跡の特徴としては、立地があげられる。当遺跡の立地は、斐伊川方面を意識して造られた瀧谷山城丘陵の裏側にあたり、外敵から水手が見えない場所にある。山城の遺構の中でも特に重要であった場所と考えられる。

今回の発掘調査は、島根県内で調査例が少ない山城跡の水手である水門状遺構を検出した。今後は瀧谷山城跡との関連性を重視しながらより詳細な研究が必要である。また、斐伊川沿岸に分布する山城跡との関係や出雲平野内にある城館との関連についての研究・調査が必要であろう。

第６章　長廻遺跡

第１節　位置と環境

長廻遺跡は出雲市大津町3219外に所在し、出雲平野の南丘陵斜面に位置する。当地は、以前は水田や畑として利用されていたようであるが、調査時は荒野地となっていた。当遺跡の東側には島根県東部を代表する河川である斐伊川が北に向かって流れている。近隣の遺跡としては、当遺跡の南に権現山古墳、北西側に長廻横穴墓群、瀧谷山城跡がある。

第２節　調査の概要

長廻遺跡については、1980年の門脇俊彦氏により遺物散布地として紹介されており[2]、表採遺物から古墳時代後半の小集落と考えられていた。その後、島根県教育委員会により平成11年～13年度にかけて遺跡の大部分の発掘調査が実施されている[3]。今回出雲市教育委員会が調査した場所は、県教委が調査した丘陵の谷をはさんだ西側である。

当遺跡の発掘調査は平成13年４月16日～平成13年９月30日の約５ヶ月間実施した。調査は人力掘削で行い、発掘調査面積は500㎡であった。

調査区の地形は段状になっており、下段を１区、上段を２区、斜面を３区として調査を行った。

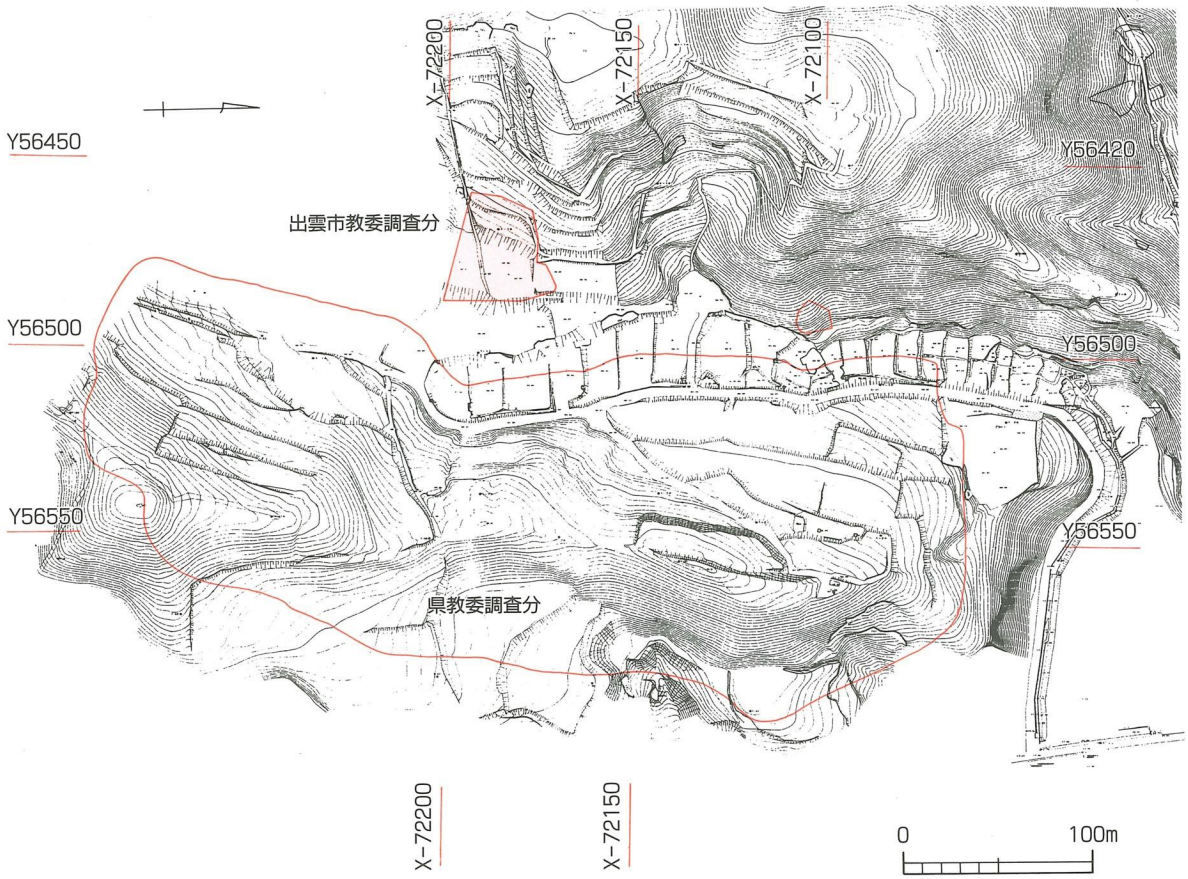


図16　調査区配置図

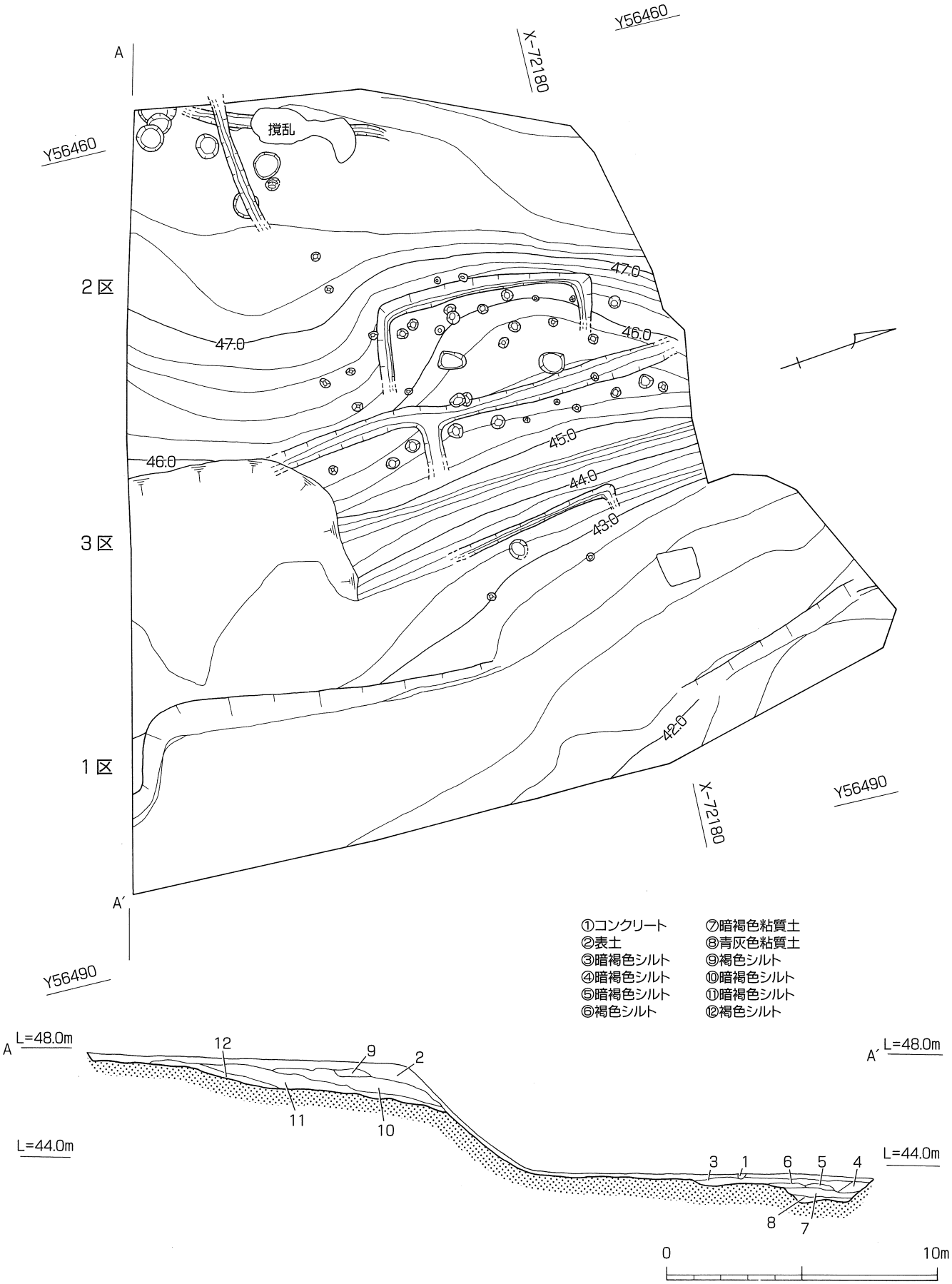


図17　調査区平面図・南壁土層図

第3節　調査の結果

（1）層序

１区の層序は、２層の表土、３層～６層の暗褐色シルト、７層の暗褐色粘質土、８層の青灰色粘質土、地山となる。ただ、３層～８層が堆積する部分は１区の南東部のみで、他は２層の下層が地山となる。２区の層序は、２層の表土、９層～12層の暗褐色シルト層、地山となる。暗褐色シルト層は約１ｍと厚く堆積していた。３区の層序は、２層の表土、地山となる。遺物は表土から暗褐色シルト層まで出土しており、平坦面を造成あるいはカットした際に、かなり土層は撹乱されているようである。

（2）調査の結果

１区の調査では、ピット３穴を確認した。このピットの性格は、３区の調査で検出した落ち込みに関連し、これらは竪穴住居跡（ＳＩ０２）と考えられる。１区南東の落ち込みは近現代の水田と考えられ、１区の平坦面は最近つくられたことがわかった。２区の調査では、南西に土坑群を検出したが、これも遺物などから近現代の遺構と考えられる。遺物は10層、11層から古墳時代の土師器を中心に出土している。遺構は古墳時代の竪穴住居跡（ＳＩ０１）と溝を検出し、完形に近い土師器が出土している。以下、遺構・遺物について説明する。

ＳＤ０１（第18図）

ＳＩ０１は２区の緩斜面に位置し、平面形は隅丸方形状をなす竪穴住居跡と考えられ、東側は崩落している。ＳＩ０１は11層から地山に掘り込まれ、床面付近は11層の堆積土が残って床面を形成しており、埋土は暗褐色シルト層であった。幅8.2m、長さ３m以上を測り、壁帯溝がある。住居内には14穴の柱穴を確認し、建替えが数回行われたと考えられる。住居外には21穴の柱穴があり、住居の東側を囲んでいたようである。また、住居内には焼土面を二ヶ所確認した。

特に、住居内の北の壁際で、平面径が隅丸方形、断面は二段掘り状をなす土坑を検出した。直軸1.2m、短軸0.7mを測る。この土坑の上層からは、完形の複合口縁をなす甕（図19－１）が出土しており、この住居を廃棄する際に埋められたと考えられる。住居かの出土遺物はこの１点のみである。

図19－１は複合口縁の名残がある甕で、口径15cm、器高29.4cmを測る。屈曲部は「く」字状をなし、口縁部は曖昧なＳ字状をなす。胴部は球形をなし、器壁は厚く、底部は丸底をなす。口縁部はナデ、胴部外面はタテハケメ、内面はケズリ、内面下半には指頭圧痕が多く見ら、色調は浅黄橙色をなす。この土器は古墳時代中期前半のものと考えられ、ＳＩ０１の廃棄時も古墳中期前半と考えられる。

この土坑に類似した遺構は近年の発掘調査で数例検出されており、壁際土坑と呼ばれている。出雲平野では古志本郷遺跡[4]の古墳時代前期後半ＳＩ０４が知られている。古志本郷遺跡の壁際土坑からは手捏土器が出土しており、土坑の機能が停止埋められた後に祭祀行為が行われたと考えられている。また、出雲東部の門黒谷Ⅱ遺跡[5]や石田遺跡[6]でも報告されており、壁際土坑の機能は灰穴炉ないし火に関わる施設と考えられ、こうした土坑から出土する高坏、器台、滑石製臼玉は、住居址廃棄時に炉（火処）に関して何らかの祭祀行為を行った結果ではないかと指摘されている。

当遺跡の壁際土坑からは、祭祀遺物は出土していないが、住居廃棄時に甕を土坑に埋めたと考えられ、石田遺跡の例と類似していると考えたい。ただ、当遺跡の住居内に焼土面が別にあるということを考慮し、壁際土坑の性格を続けて検討していきたい。

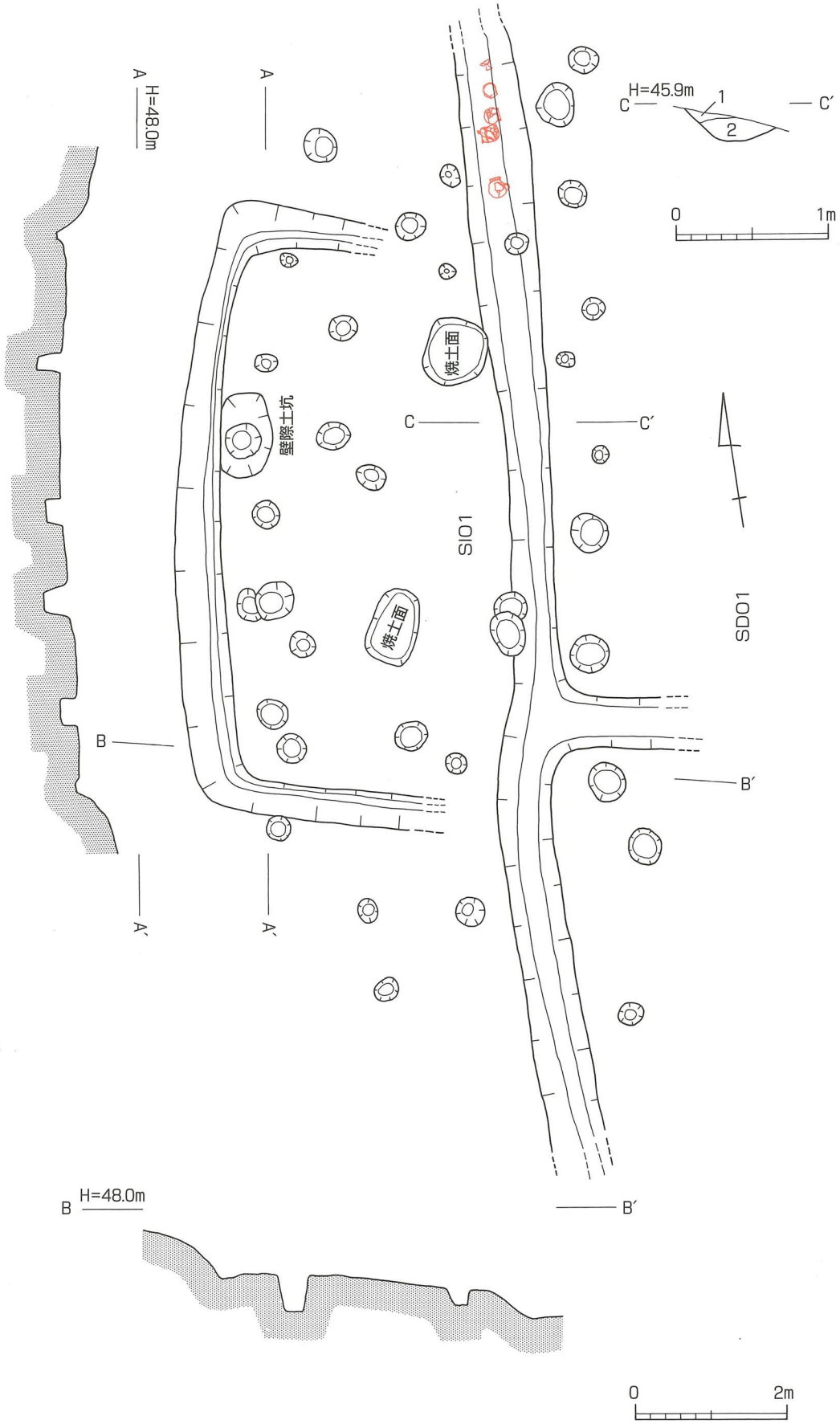


図18 SI01・SD01遺構図

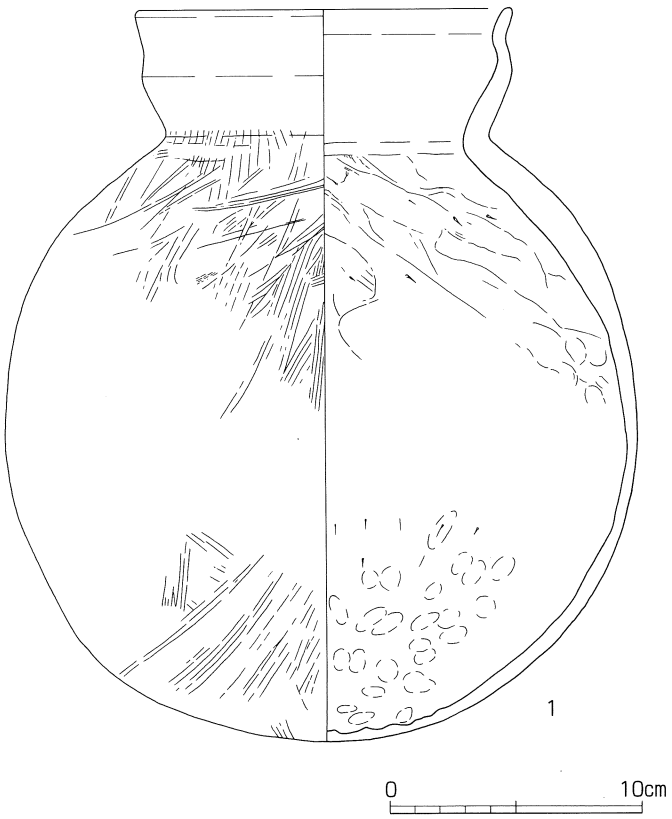


図19 SI01出土遺物実測図

ＳＤ０１（図18、図20）

ＳＤ０１はＳＩ０１の東にあり、地山に掘り込まれ、南北方向を通り、中央付近で東に直角に折れるＴ字状をなす。水は南北それぞれから流れてきて、東斜面に流れるようになっていたと考えられる。幅0.8m、長さ15m以上、深さ20cmを測る。ＳＤ０１はＳＩ０１の周りを囲むと考えられる柱穴に切られていることから、ＳＤ０１はＳＩ０１より古いと考えられる。出土遺物は調査区の北側で完形に近い土器が５点まとまって出土し、一括性の高い資料である。甕が4点、高坏が１点出土し、甕は口縁部をそれぞれ別の方向に向けて横たわっていた。

ＳＤ０１出土遺物（図21）

ＳＤ０１からは５点の土器が出土し、それぞれは重なり合ってはいない。

図21－１～４は土師器の単純口縁をなす甕で、胴部は球形で、底部は丸底をなす。口縁部から胴部上半にかけて器壁は厚く、胴部下半は薄い。１は口径16cm、器高26.5cmを測り、胴部上半に最大径をもつ。口縁部はハ字状に開き、口縁端部は面をなす。口縁部はナデ、胴部外面はタテハケやナナメハケが施され、胴部上半には成形の甘さにより、球形にならず面をなす部分もある。内面上半はケズリの凹凸が激しく残り、底部付近は指頭圧痕が多く見られる。色調は黒褐色をなす。２は口径14.4cm、器高25.6cmを測るほぼ完形で、口縁部はハ字状に開き、口縁端部は面をなす。胴部は楕円形状をなす。屈曲部内面はナデによる窪みが巡る。外面は磨滅が著しく、胴部内面はケズリ、底部には指頭圧痕がみられる。色調は浅横橙色をなし、胴部には煤が付着している。３は口径15.4cm、器高22.5cmを測るほぼ完形で、口縁部はハ字状に開き、口縁端部は内面に肥厚する。胴部は楕円形状をなす。口縁部はハケメ後ナデ、胴部外面はヨコハケやタテハケが施され、内面はケズリが施してある。色調は浅横橙色をなし、胴部には煤が付着している。４は口径約12.4cm、器高20cmを測り、土器を中心から２つに割ったような状態で、その片方が出土している。口縁部は外反気味に開き、口縁端部は内面に肥厚する。胴部は楕円形状をなす。外面は磨滅が著しく、胴部内面はケズリ、底部付近には指頭圧痕が見られる。色調は浅横橙色をなし、胴部には煤が付着している。

図21－５は土師器の高坏で口径16.2cm、器高11.4cmを測る。坏部と口縁部の境に曖昧な段をもち、口縁端部は先細る。接合部内面の粘土は若干肥厚し、脚部は坏部と同じ位の器高である。内外面とも磨滅していいるが、ハケメが施してある。胎土は精製され、色調は黄橙色をなす。

ＳＤ０１の時期は出土遺物から、古墳時代中期前半と考えられる。

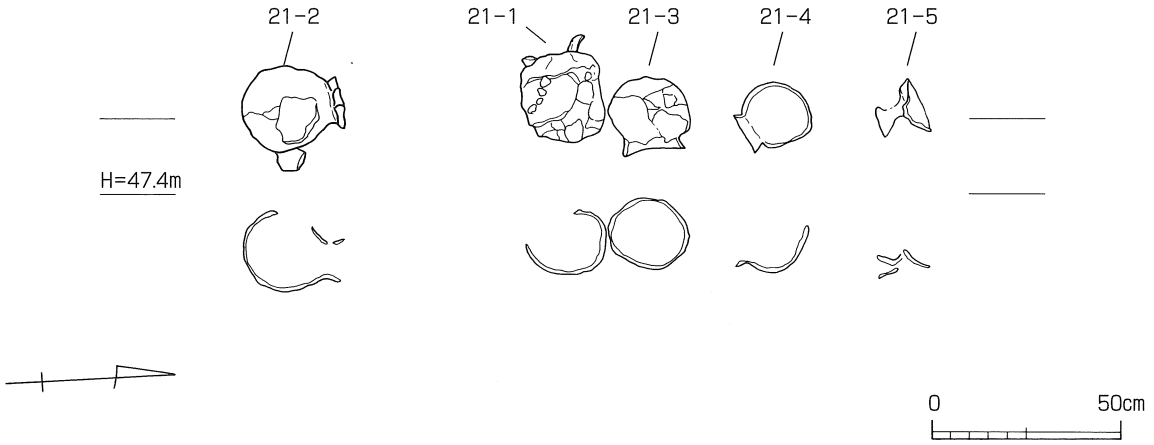


図20 SI01遺物出土状況

ＳＩ０２（図22）

ＳＩ０２は１区と２区の境で検出した平面形が隅丸方形をなす、竪穴住居跡と考えられる。ＳＩ０２は地山に掘り込まれ、壁帯溝をもつ。遺構のほとんどが壊され、西壁の一部が残っていたのみで、南北の残存長6.4m、東西の残存長0.6mを測る。床面も壊され、壁帯溝部分が残っていた。ＳＩ０１と同様に壁際で円形土坑を検出した。この土坑は直径約0.7m、深さ0.1mを測る浅い土坑で、遺物は出土していない。柱穴は床面が残っていないため明確ではないが、２穴検出し、当遺構に伴うと考えられる。

ＳＩ０２出土遺物（図23）

ＳＩ０２からは２点の土師器が出土している。２点とも壁帯溝の上面で出土している。

図23－１は甕の胴部上半で、残存長10.5cm、最大径20cmを測る。胴部は楕円形状をなすと考えられ、上半の器壁は厚く1.5cmを測る。胴部外面には粗いタテハケメ、内面は粗いケズリが施してあり、屈曲部の接合痕が見られる。色調は浅黄橙色をなす。

図23－2は高坏の脚部片で、脚径13cm、残高5.6cmを測る。筒部はハ字状をなし、裾部は大きく開く。筒部には円孔が２ヶ所に残っている。全面に磨滅気味であるが、ハケメ後ナデ消しが施してある。胎土は精製され色調はにぶい橙色をなす。

SI02の時期は出土遺物から古墳時代中期前半と考えられる。

１区包含層出土遺物（図24）

１区は土層がかなり撹乱されている状況であった。出土遺物は土器片で、11点の土器を図化した。

図24－１～９、11は土師器である。１は小形丸底壺の頸部から胴部の破片で、最大径7.7cm、残高4.8cmを測る。胎土は精製され、色調は橙色をなす。

図24－２～５は甕の破片で、２は複合口縁の名残があり、口径10.6cm、残高5.1cmを測り、器壁は厚い。１字口縁と2次口縁の境は、内外面ともに窪み、２次口縁は内傾する。全面に磨滅が著しく、色調は浅黄橙色をなす。３は単純口縁をなし、口径約12.6cm、残高6.2cmを測る。口縁部は内湾気味に開く。全面に磨滅が著しく、胴部内面に粗い指頭圧痕がみられ、色調は浅黄橙色をなす。４は単純口縁をなし、口径９cm、残高6.5cmを測り、器壁は厚い。屈曲部がすぼまり、一般的な甕とは異なるものと考えられる。全体に磨滅気味であるが、胴部外面はヨコハケメ、内面はナデが施され、指頭圧痕がみ

図21　SI01出土遺物実測図

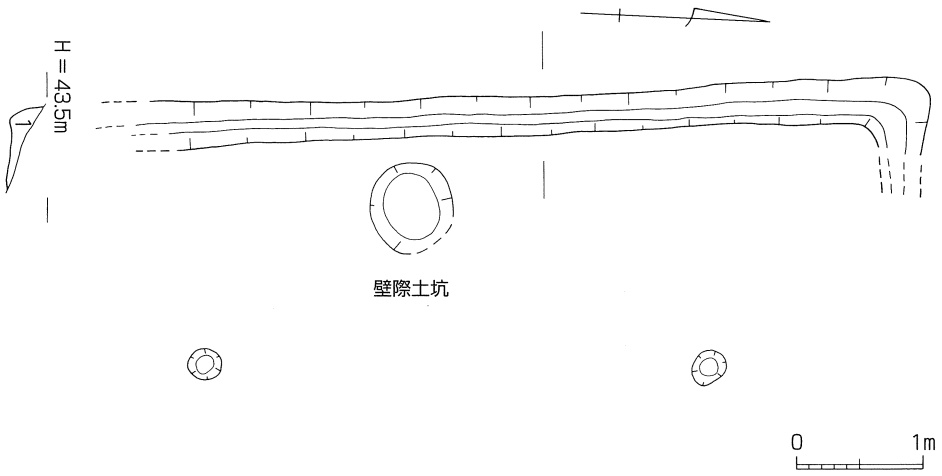


図22　SI02遺構図

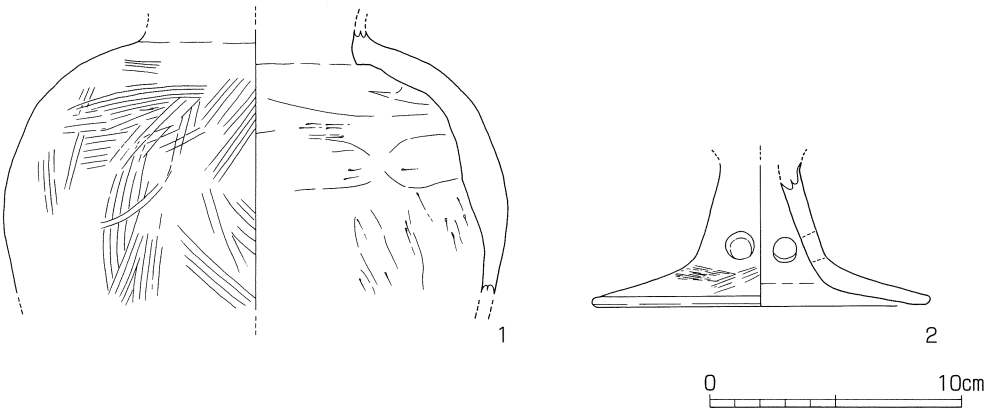


図23　SI02出土遺物実測図

られる。胎土は精製され、色調は浅黄橙色をなす。５は胴部上半で、最大径約23.6cm、残高9.2cmを測り、器壁は厚い。胴部は楕円形状をなすと考えられる。全体に磨滅気味で、胴部内面はタテハケメ、内面はケズリが施され、色調は浅黄橙色をなす。

図24－６～９は高坏で、６は坏部で、口径約18.8cm、残高5.7cmを測る。坏部と口縁部の境には曖昧な段がある。全体に磨滅気味で、口縁部内面にハケメが施されている。胎土は精製され、色調は黄橙色をなす。７～９は接合部片で、７は坏部が皿状をなし、胎土には長石、石英を多く含み、色調は橙色をなす。８と９は胎土が精製され、色調は浅黄橙色をなす。９は坏部が?状をなす。

図24－10は陶器の高台付?の底部片で、底径6.9cm、残高2.3cmを測る。内外面に白色の釉がみられ、外面高台付近は露胎をなす。

図24－11は土師器の小皿で、注口が付いている。口径約６cm、器高2.3cmを測る。色調はにぶい橙色をなし、内面には煤が付着している。

図24－１～９の時期は古墳時代中期前半頃、図24－10と11は近世以降と考えられる。

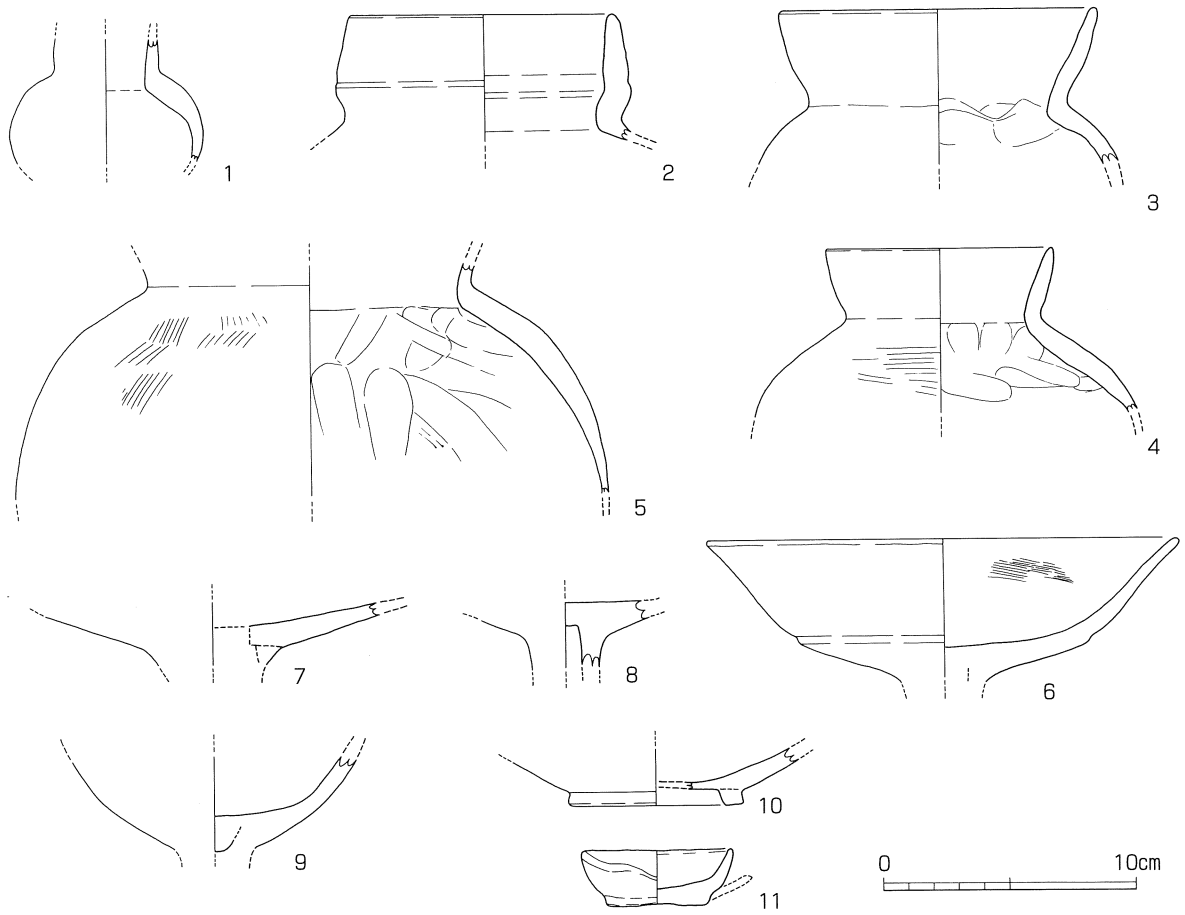


図24　１区包含層出土遺物実測図

２区包含層①出土遺物（図25）

２区包含層①とは基本層序の10層で、図化したのは25点である。

図25－１～19は土師器である。１は複合口縁をなす壺の口縁部から頸部にかけての破片で、口径約21cm、残高7.6cmを測る。口縁端部は丸く、全体に磨滅している。頸部内面にはしぼり状の指頭圧痕が見られ、色調は浅黄橙色をなす。２は直口壺の頸部から胴部上半の破片で、残高6.6cmを測る。頸部は直線的に外傾し、胴部内面には指頭圧痕がみられる。胎土は精製され、色調は明黄褐色をなす。

図25－３～６は甕の口縁部から胴部上半にかけての破片である。３は複合口縁壺の名残があり、口径約19.6cm、残高8.9cmを測る。１次口縁は短く、内面が全体に肥厚し、１次口縁と２次口縁の境の稜線は曖昧である。口縁部はハケメ後ナデ消し、胴部外面はタテハケメ、内面はケズリが施され、色調はにぶい黄橙色をなす。４～６は単純口縁をなす甕で、４は口径約20.4cm、残高7.2cmを測る。口縁部は大きく外反し、屈曲部内面には鋭い稜線がある。口縁部はハケメ後ナデ消し、胴部外面はタテハケメ、内面はケズリが施され、色調は暗灰黄色をなす。５は口径約14.4cm、残高6.8cmを測り、口縁端部は面をなす。全体に磨滅気味で、内面はケズリが施され、色調は橙色をなす。６は残高5.9cmを測り、口縁部中央の器壁が厚く口縁端部は面をなす。全体的に磨滅しており色調は浅黄橙色をなす。

図25－７は低脚坏の接合部の破片で残高2.4cmを測る。器壁は厚く、色調はにぶい黄橙色をなす。

図25－８～19は高坏の破片で、８～11は坏部で、口縁部は外反しながら開き、端部は先細る。８は、

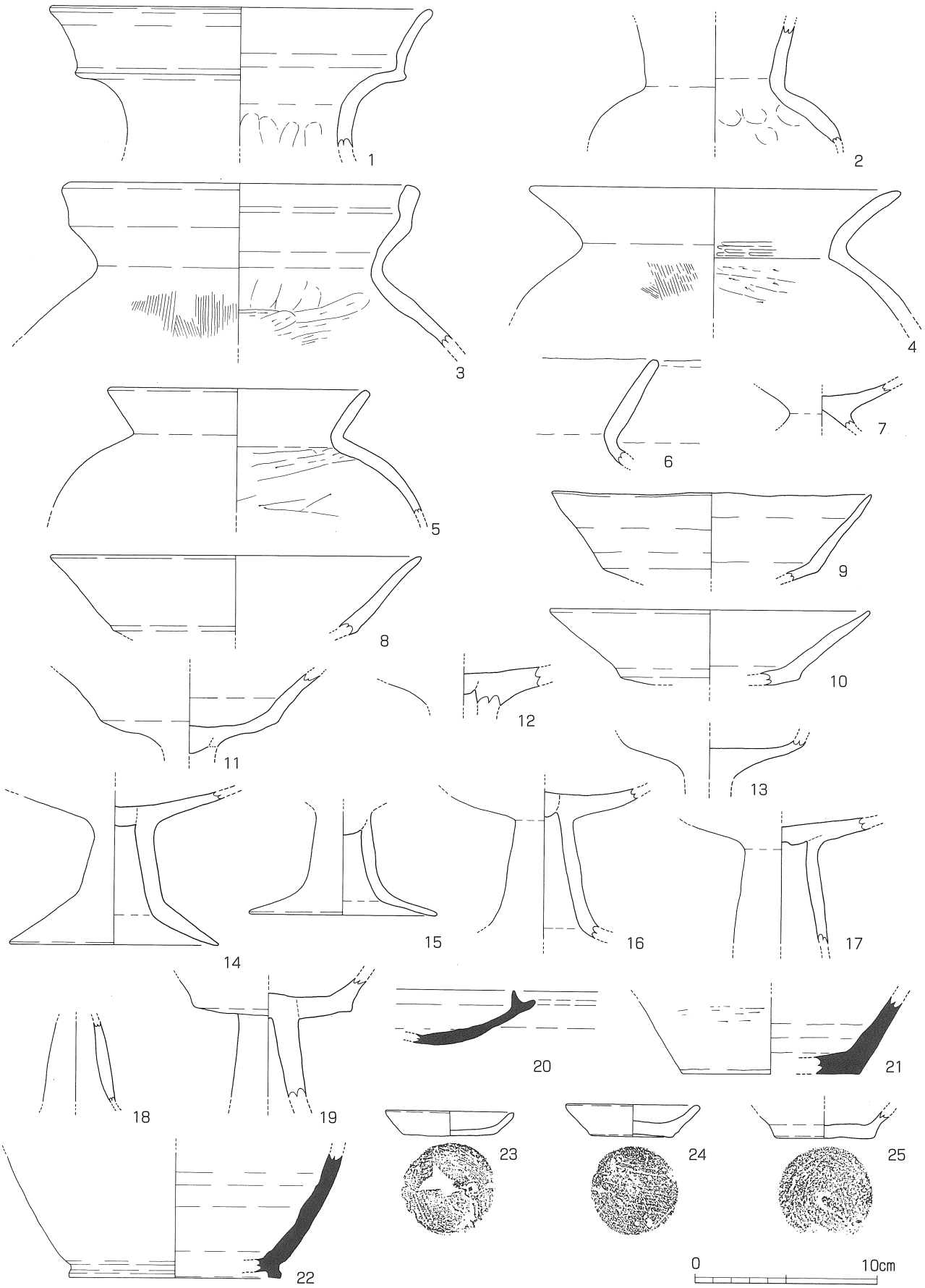


図25　2区包含層①出土遺物実測図

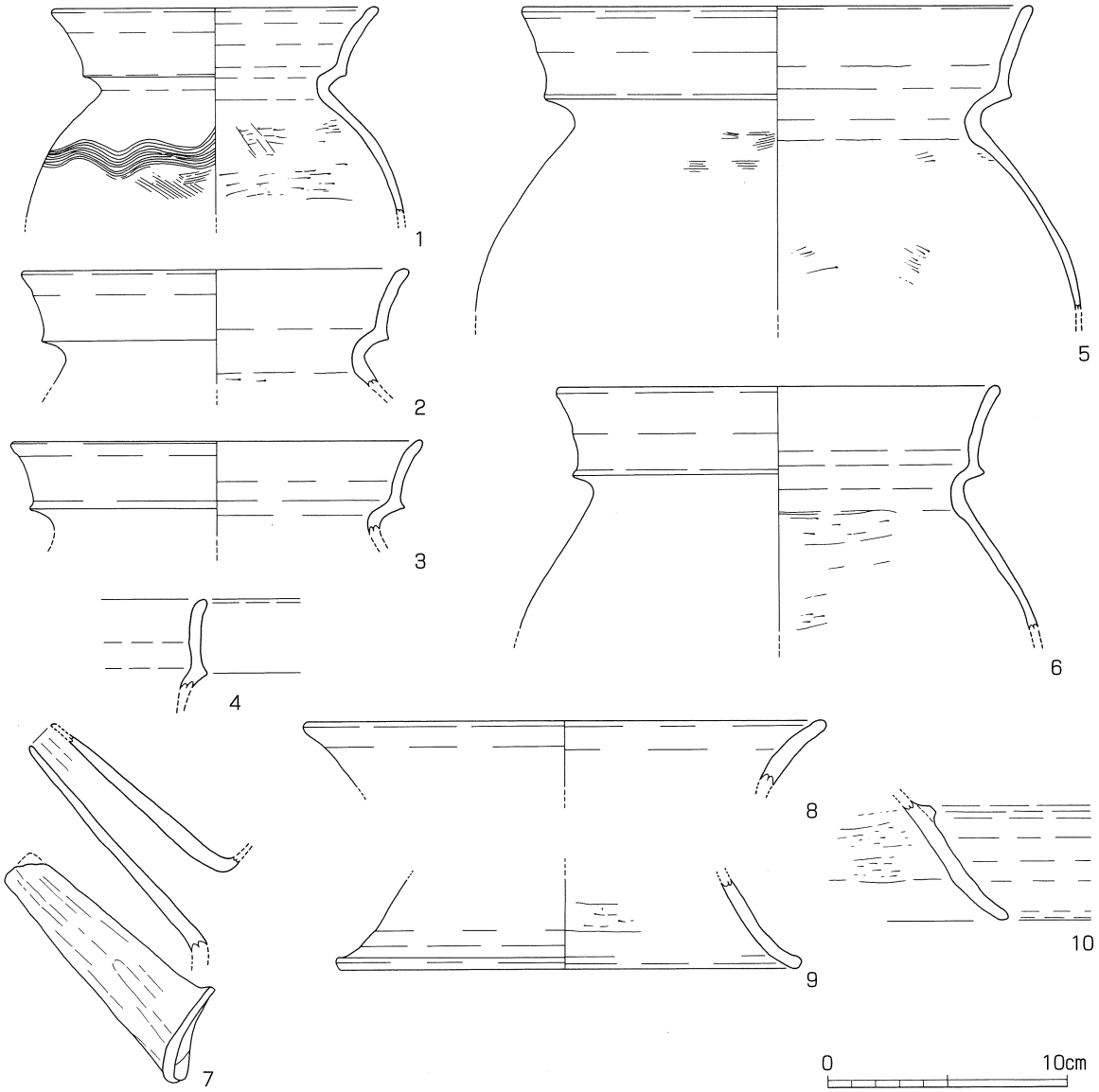


図26　2区包含層②出土遺物実測図

口径約20.4cm、残高4.3cmを測り、口縁部と坏部の境に曖昧な段がみられ、胎土には赤色粒を含み、色調は橙色をなす。９～11は口縁部と坏部の境が屈曲して開く。９は口径17.6cm、残高4.8cmを測り、色調は浅黄橙色をなす。10は口径約17.6cm、残高4.1cmを測り、色調はにぶい橙色をなす。11は口縁端部を欠損し、残高4.5cmを測る。接合部内面の粘土が肥厚し、色調はにぶい橙色をなす。12と13は接合部片で、12は接合部内面が肥厚し、色調はにぶい橙色をなす。13は胎土が精製され、色調は橙色をなす。14～19は接合部から脚部の破片で、開き気味の筒部から大きく裾部が開き、脚端部は先細る。14は脚径11.4cm、残高8.4cmを測り、全体に磨滅し、胎土は精製され、色調はにぶい橙色をなす。15は脚径約10.3cm、残高6.1cmを測り、接合部内面は肥厚している。色調はにぶい橙色をなす。16は残高8.3cmを測り、接合部内面は肥厚している。色調はにぶい橙色をなす。17は残高７cmを測り、器壁は薄く接合部内面に刺突痕がある。色調は黄橙色をなす。18は残高4.6cmを測り、色調は橙色をなす。19は残高6.7cmを測り、全体に磨滅し、色調は淡黄色をなす。

図25－１、７、17は弥生後期（草田５期）頃、その他は古墳時代前期末～中期前半と考えられる。

図25－20～22は須恵器で、20は坏身で、残高３cmを測る。口縁端部よりかえりが若干高い。21は壺の底部片で底径約9.8cmを測り、内外面に回転ナデが施してある。22は高台付壺の底部片で、底径約11.6cmを測り、高台が胴部の立ち上がりに接している。内外面ともに回転ナデが施してある。

図25－23～25は土師器の小皿で、23は口径７cm、器高1.5cmで、底部に糸切痕があり、浅黄橙色をなす。24は口径7.1cm、器高1.8cmで、底部は若干上げ底をなし、静止糸切痕がある。口縁部に煤が付着し色調は淡赤橙色をなす。25は底径5.2cm、残高1.5cmで、底部に糸切痕がある。

図25－20は古墳後期（大谷編年４期頃）、21と22は平安時代頃、23～25は近世以降であろう。

２区包含層②出土遺物（図26）

２区包含層②とは土層の11層で、出土遺物はＳＩ０１の床面を形成していた土層から出土した土器が殆どで、10点図化した。図26－１～10は弥生土器で、１～６は複合口縁をなす甕の口縁部から胴部にかけての破片で、２次口縁部は外反し、口縁端部は丸い。色調は浅黄橙色をなす。１は口径約13.8cm、残高8.7cmを測る。胴部外面には波状文が、内面にはケズリが施してある。２は口径約16.2cm、残高4.9cmを測る。胴部内面にケズリが施してある。３は口径約12cm、残高４cmを測る。磨滅が著しい。４は残高3.8cmを測る。磨滅が著しい。５は口径約21.4cm、残高12.7cmを測る。全面に磨滅し、胴部外面はヨコハケメ、内面はケズリが施してある。６は口径約18.6cm、残高10.2cmを測る。磨滅が著しく、胴部内面にケズリが施してある。７は注口の破片で、残高9.6cmで、浅黄橙色をなす。

図26－８～10は鼓形器台で、浅黄橙色をなす。８は器受部片で口径約22.3cm、残高2.7cmを測り、外面は黒斑がみられる。９と10は脚台部片で、内面はケズリが施してある。９は脚径約19.3cm、残高3.6を測る。10は残高5.1cmを測る。図26－１～10の時期は弥生後期後半（草田５期）であろう。

第４節　まとめ

長廻遺跡の出雲市教委の調査では、古墳時代中期前半頃の竪穴住居跡（SI01、02）２棟と溝（SD01）を検出した。竪穴住居跡では壁際土坑を検出した。出雲平野における壁際土坑の検出例は少なく、今後の調査例の増加を待って、遺構の性格を再検討したい。また、遺物包含層からは、弥生後期後半（草田５期）や古墳後期（大谷４期）、平安時代、近世以降の土器も出土しており、人々が時折りこの地で行動していたことがわかる。当調査区の中心をなす時期は遺構を検出した古墳中期前半頃である。

長廻遺跡は同時期に島根県教委による調査が行われ、その全容が明らかになってきている。当遺跡の出現は弥生中期後半頃で、続いて弥生終末～古墳時代、奈良時代の竪穴住居跡や加工段、溝などの遺構や遺物を検出している。また、前期古墳の権現山古墳や横穴墓も存在し、墓域と集落が一緒に存在していたこともわかってきている。

当遺跡の中心地は、県教委が調査した斐伊川沿岸の丘陵と考えられ、谷をはさんだ東側の市教委の調査区は、古墳中期前半を中心にごく短期間に使用された地域と考えられる。ただ、市教委の調査した丘陵斜面は近現代にかなり改変されている。また、県教委調査区では出土していない弥生後期後半（草田５期）の土器が出土しており、遺跡内の移動等も考えられる。また、草田５期は当遺跡の北側に位置する西谷墳墓群の９号墓と同時期であり、当遺跡の人々との関連が想定される。

今後は、県教委と市教委の調査成果を合わせて、再度、長廻遺跡の検討を進めて行きたい。

第７章　大井谷Ⅱ遺跡

第１節　位置と環境

大井谷Ⅱ遺跡は出雲市上塩冶町1319外に所在し、出雲平野の南丘陵大井谷の谷奥に位置する。現況は、荒野地となっていたが、以前は民家が建っていたようである。近隣の遺跡としては、上塩冶横穴墓群や大井谷Ⅰ遺跡、般若寺北古墳等がある。また、当遺跡の北には天応元辛酉（781）年草創と伝えられる般若寺がある。

第２節　調査の概要

大井谷Ⅱ遺跡は平成10年に分布調査及び試掘調査により確認された遺跡である。出雲市教育委員会では平成11年～平成12年にかけて遺跡の大部分の調査が終っており、その際の調査報告書は既に刊行済みである。今回の調査は、残土処理場の拡大により新たに発掘調査を実施した部分である。前回の調査では当遺跡をＡ～Ｃ区の３つに分けて実施したため、今回の調査区をＤ区として調査をすることとした。前回の調査結果から、大井谷Ⅱ遺跡から仏具などが出土していることで古代寺院に関連する遺跡として評価されている。

Ｄ区の調査は平成13年８月に試掘調査を実施し、遺物が出土したため、本調査を平成13年10月１日～平成13年10月10日までの約10日間行った。調査は人力により掘削し、調査面積は約50㎡である。

第３節　調査の結果

（１）層序

Ｄ区の層序は、１層の表土、２層・７層の暗褐色シルト層、地山となり、遺構面は地山面である。３層～13層は遺構埋土と考えられる。

（２）調査の結果

Ｄ区は、Ａ区の北側に位置し、地形はＡ区の緩斜面から北斜面につながる変換点付近である。平成13年８月の試掘調査では、約1.8m掘削し多くの遺物が出土した。しかし、試掘調査時には遺構に伴うものか包含層遺物なのかは不明であった。本調査に入り、試掘トレンチ以外の場所の掘削を進めると約50ｃｍ程度で地山を検出し、２層から数点の遺物が出土した。これらのことから、試掘トレンチを入れた場所に何らかの遺構があることがわかった。そして、試掘トレンチ付近を徐々に掘削を進めて行ったところ地山の落ち込みを確認し、その落ち込みの中から多くの遺物が出土した。試掘トレンチから出土した遺物はこの遺構に伴うものである。この遺構は大溝（ＳＤ０１）と考えられ、北側の調査区外からＡ区に向かって流れていたと考えられる。

以下、ＳＤ０１、出土遺物について説明する。

ＳＤ０１（第29図）

ＳＤ０１は北側斜面から南に流れる大溝で、断面形態はＶ字状をなす。幅は約6.7m、検出長約2.9m、深さ1.4mである。ＳＤ０１はＡ区に向かって流れているようであるが、Ａ区の調査ではＳＤ０１につ

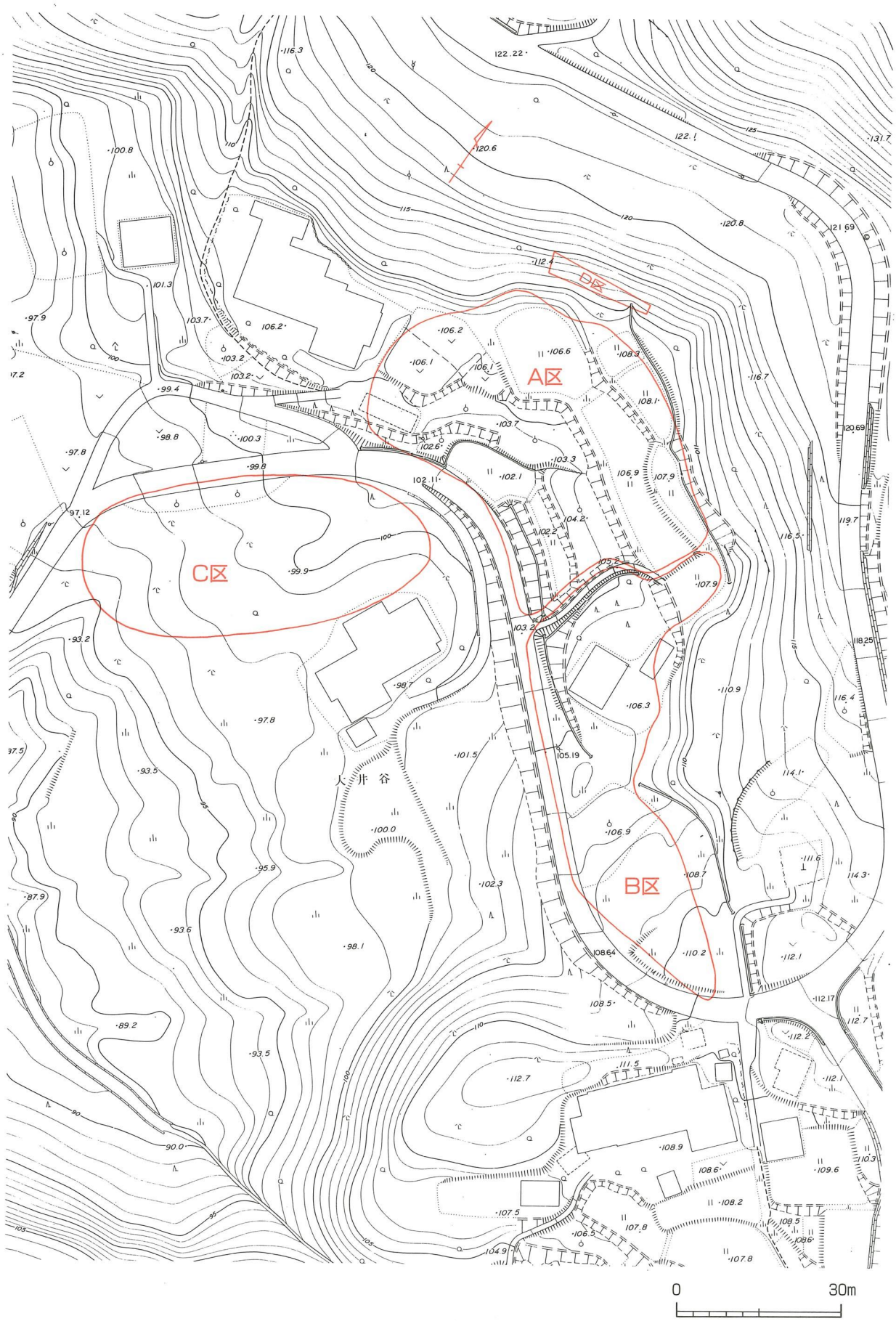


図27　調査区配置図

A区
D区
X-73480
X-73470
X-73460
X-73450
Y55550
Y55560
Y55570
Y55580
Y55590
Y55600
Y55610
SX03
SB01
SD01
SK02
大溝01
大溝02
大溝03
大溝04
石段遺構
水路遺構
池状遺構
石敷建物跡
中世墳墓
荒神
大樋
0
10m

図28 A区・D区平面図

ながる大溝は検出されていない。ＳＤ０１から約15m南に大溝０３と、約25m南に大溝０２が検出されており、このどちらかの大溝につながると考えられる。このようにＳＤ０１とつながる大溝が不明確なのは、Ａ区の調査において最終遺構面（地山）まで調査を行っていないためであろう。

ＳＤ０１出土遺物（図30）

図30－１～13は須恵器である。１～６は蓋の破片である。１は口縁部片で口径約19cm、残高1.6cmを測る。天井部は水平気味で、口縁端部はＺ状にカーブを描き、端部は下方に屈曲し、外面は沈線状に窪む。全面に回転ナデが施してある。２は口縁部片で口径約13.5cm、残高９mmを測る。天井部は水平気味で、口縁端部はＺ状にカーブを描き、端部は下方に屈曲し、外面は沈線状に窪む。全面に丁寧な回転ナデが施してある。３は口縁部片で口径約10.6cm、残高1.2cmを測る。天井部は水平気味で、口縁端部はＺ状にカーブを描き、端部は下方に屈曲し、外面は沈線状に窪む。全面に丁寧な回転ナデが施してある。４は天井部片で、残高1.5cmを測る。天井部は水平気味で、扁平な擬宝珠状つまみをもち、中央がやや突出している。全面に回転ナデが施してある。５は天井部片で、残高1.5cmを測る。天井部は水平気味で、扁平な擬宝珠状つまみをもち、中央がやや突出している。全面に回転ナデが施してある。６は天井部片で、残高1.7cmを測る。天井部は水平気味で、扁平な擬宝珠状つまみをもち、中央が平らで突出していない。焼成は不良で、淡黄色をなし、全体に磨滅気味である。

図30－７～13は埦の破片である。７は口縁部片で、口径約14.4cm、残高3.7cmを測る。器形は体部から若干開きながら立ち上がり、口縁端部は先細る。全面に丁寧な回転ナデが施してある。８は高台付埦の底部片で、底径約14.9cm、残高5.7cmを測る。高台は体部の立ち上がりに接している。体部内外面は丁寧なナデが施され、底部内面には回転糸切痕がある。９は高台付埦の底部片で、底径8.5cm、残高３cmを測る。高台は体部の立ち上がりに接し、高台の底は窪む。体部内面には指頭圧痕があり、外面には回転糸切痕が残る。10は高台付埦の底部片で、底径約11.5cm、残高1.3cmを測る。高台は体部の立ち上がりに接し、全面に回転ナデが施してある。11は高台付埦の底部片で、底径約８cm、残高２cmを測る。高台は体部の立ち上がりに接し、全面に回転ナデが施してある。12は埦の底部片で底径約8.2cm、残高1.7cmを測る。底部中央は器壁が薄くなり若干上げ底をなし、底部外面には回転糸切痕がある。13は埦の底部片で底径約6.6cm、残高1.7cmを測る。底部中央は器壁が薄くなり若干上げ底をなし、底部外面には回転糸切痕がある。

図８－14～18は土師器片で、14～16は単純口縁をなす甕の口縁部片である。14、15は口縁部外面がナデ、内面はヨコハケ、胴部外面はケズリが施され、色調は橙色をなす。14は口縁端部を欠損するが最大径30.8cm、残高4.8cmを測る。15は残高５cmを測る。16は残高3.8cmを測る。全体に磨滅が著しい。

図30－17は高台付埦の底部片で、底径７cmを測る。高台は体部の立ち上がりに接し、ハ字状に開く。全体に磨滅が著しく、糸切痕はみられない。色調は橙色をなす。

図30－18は埦の底部で、底部に円盤状の粘土を貼り付けて成形してある。底部外面には回転糸切痕がある。胎土は精製され、色調は橙色をなす。

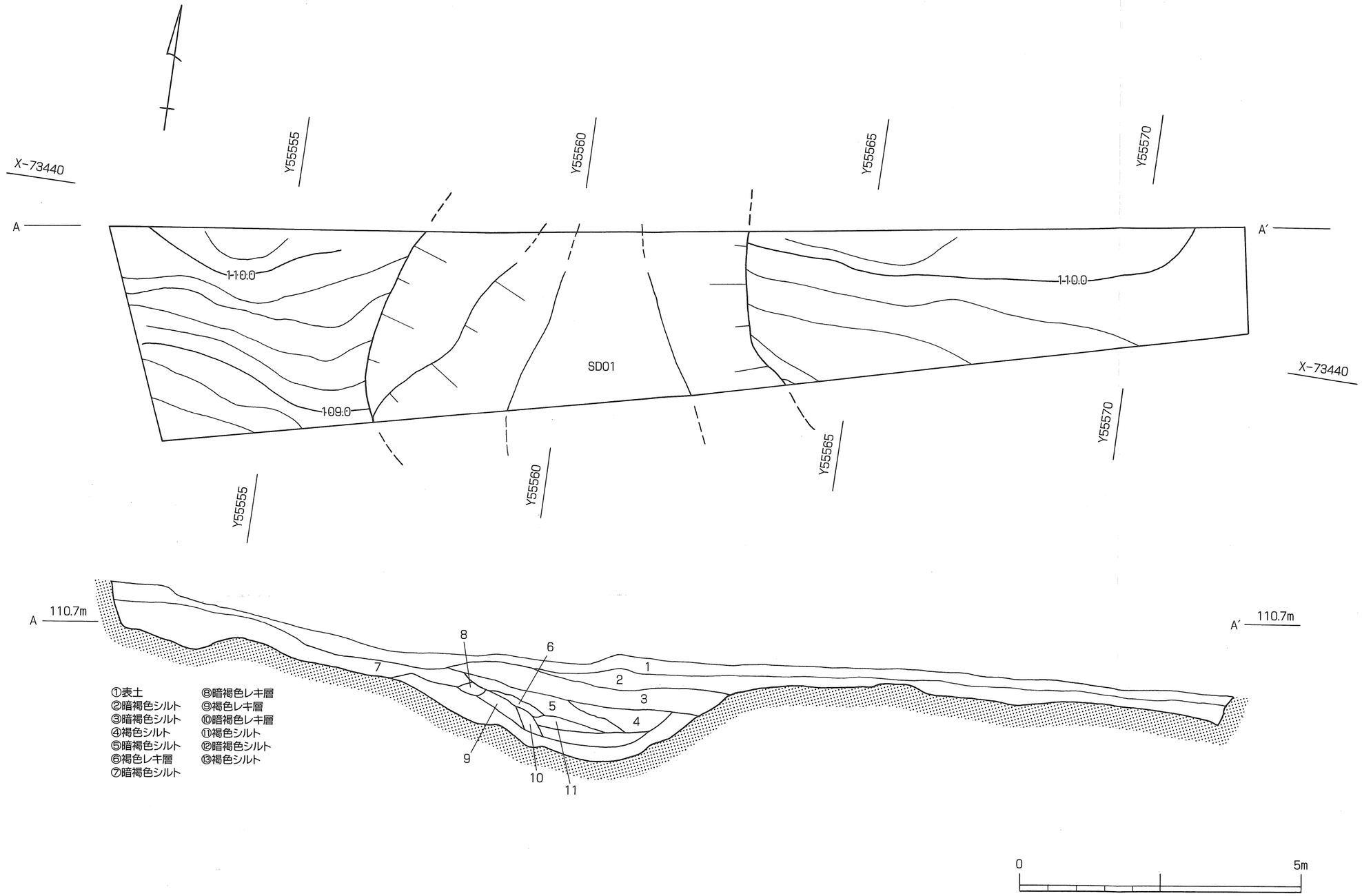


図29　D区平面図・土層図

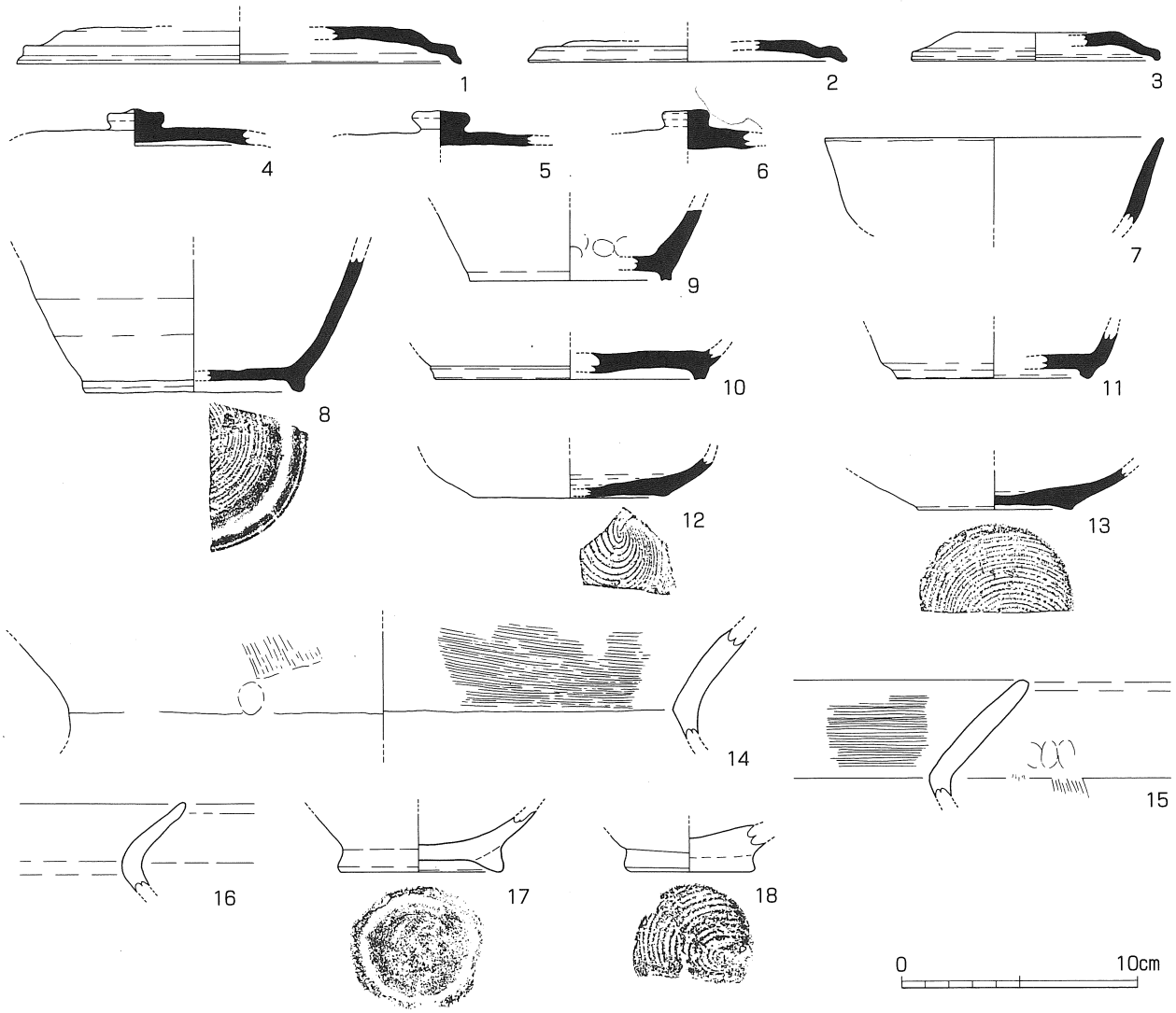


図30　SD01出土遺物実測図

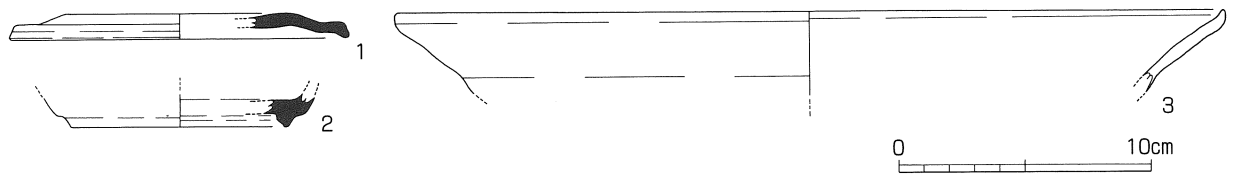


図31　包含層出土遺物実測図

ＳＤ０１出土遺物の時期は須恵器の年代から８ｃ～９ｃ頃と考えられる。図30－17、18は中世土師器と考えられるが、詳細な時期は不明である。よって、ＳＤ０１が機能した中心の時期は８ｃ～９ｃ頃で、中世頃に完全に埋まったと考えられる。

包含層出土遺物（図31）

ＳＤ０１以外から出土した遺物の報告をする。図31－１、２は須恵器片で、１は蓋の口縁部片である。口径約13.4cm、残高１cmを測り、天井部は水平気味で、口縁端部はＺ状にカーブを描き、端部は下方に屈曲し、外面は沈線状に窪む。全面に回転ナデが施してある。時期は８ｃ～９ｃと考えられる。

図31－２は高台付椀の底部片で、底径約8.6cmを測る。高台は体部の立ち上がりに接し、全面に回転ナデが施してある。時期は８ｃ～９ｃと考えられる。

図31－３土師器の単純口縁をなす甕の口縁部片である。口径は約32.6cmと大きく、残高は3.3cmを測る。胎土には長石、石英、赤色粒を多く含む。全体に磨滅が著しく、色調は浅黄橙色をなす。時期は不明である。

第４節　まとめ

大井谷Ⅱ遺跡Ｄ区の調査では、８ｃ～９ｃ頃を中心とする大溝（ＳＤ０１）を検出した。大井谷Ⅱ遺跡全体の中でも古い時期（第１興隆期）である。Ａ区の調査では、Ｄ区から続く大溝は検出されていない。ＳＤ０１から約15m南に大溝０３が、約25m南に大溝０２が検出されており、このどちらかの大溝にＳＤ０１はつながると考えられる。大溝０３からは７ｃ～９ｃにかけての遺物が出土しており、大溝０２からは当該期の遺物は出土していない。また、ＳＤ０１は南東方向に流れを変えており、大溝０３に向かった流れが自然である。よって、Ｄ区のＳＤ０１はＡ区の大溝０３につながって流れていた可能性が高い。大井谷Ⅱ遺跡全体をみると、Ｄ区のＳＤ０１からＡ区の大溝０３を流れ、Ｃ区の谷へと大溝が通っていたと考えられる。

Ａ区の調査では大溝０３から古代寺院に関係する遺物が多数出土している。今回のＤ区の調査では古代寺院に関係する遺物は出土していない。しかし、大溝０３の遺物はＤ区のＳＤ０１を流れてきたものと考えられ、古代寺院が存在する場所は、Ａ区周辺ではないことがより明確になった。そして、古代寺院はＤ区より北側にあると考えられ、より一層現在の般若寺周辺にある可能性が強くなったと考えられる。

出雲平野における大井谷Ⅱ遺跡の位置付けはあまり進んでいない。出雲平野の古代～中世にかけての発掘調査の中でも当遺跡の遺物の出土量はかなり多く、出雲平野のなかでも主要な遺跡であることは間違いないと考えられる。この多くの貴重な遺物を調査していき、出雲平野の古代から中世にかけての生活の解明を再検討する必要があろう。

第８章　瀧谷山城跡

第１節　位置と環境

瀧谷山城跡は中国山地から派生する丘陵の尾根上に位置している。この尾根はほぼ北に延びており、この山城の縄張りは尾根の先端から長さ約500mを測る範囲に及んでいる。西流してきた斐伊川は、この山城の手前で尾根沿いに流れを変え、出雲平野を北流している。したがって、この尾根上からは平野のみならず斐伊川の見通しも非常に良い。また、縄張りを概観しても切岸や堀切は斐伊川側を意識した普請が施されており、尾根の西の谷には水の手も確保されている。これらの位置関係からこの山城は、平野のみならず斐伊川及び東の対岸を監視する目的で地取りが行われたと考えられ、おそらく南東約４kmの地点に位置する上之郷城の支城としての役割を担っていたと考えられる。

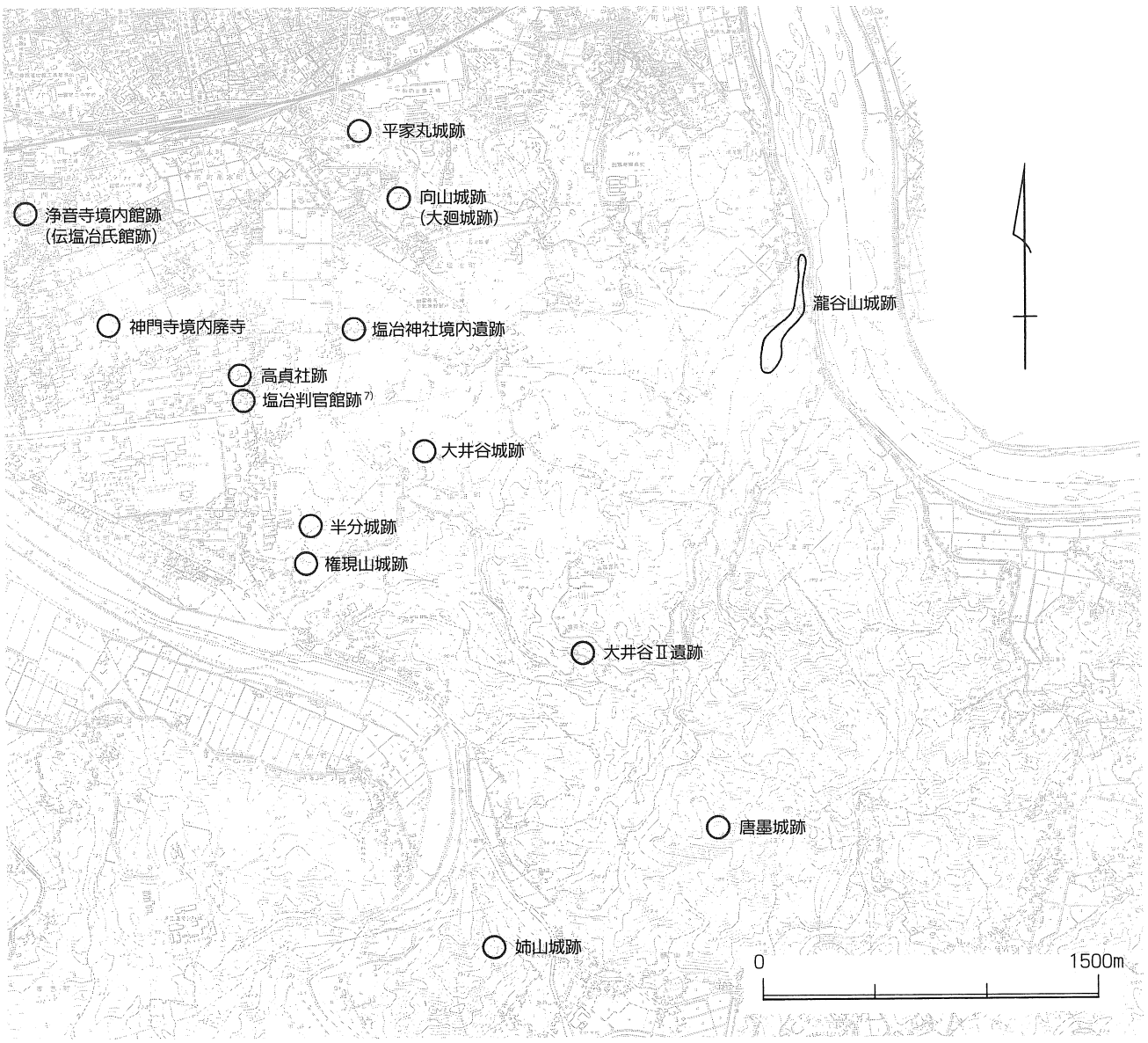


図32　瀧谷山城跡と周辺の中世城館跡(1:30,000)

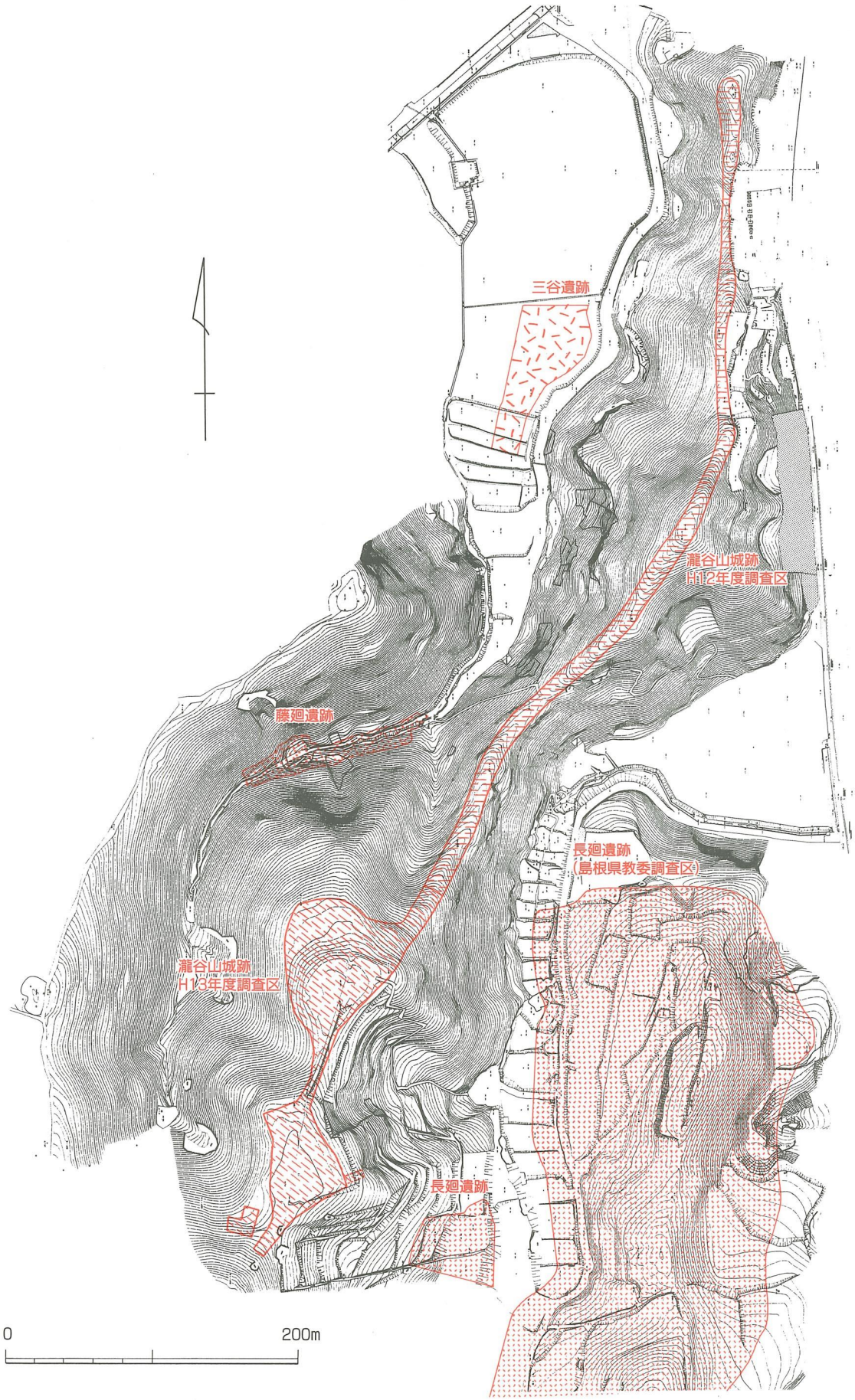


図33　瀧谷山城跡調査範囲図(1:4,000)

第2節

平成12年度調査の概要

斐伊川と神戸川を結ぶ斐伊川放水路の予定地である出雲市大津町瀧谷で、平成11年度に島根県教育委員会及び出雲市教育委員会によりトレンチによる試掘調査が実施されたところ、山の尾根上の１カ所で堀切と思われる遺構を確認した。また、山頂部分にやや平坦な面が拡がっていることから、地形から考えても山城である可能性が高いということで、平成12年４月から尾根上部分の発掘調査を実施した。

調査面積は約1,800㎡で、尾根上の幅５ｍほどの平坦な部分の調査を行った。調査区の東側は近世以降の石切場があってかなり危険な状態であったため調査は尾根上に限って行った。

まず、尾根上にできるだけ直線に近い状態で10ｍごとに基準杭を設置し、それぞれ１～33Grとして、人力で堆積土を取り除いて遺構を検出した。

堆積土は厚いところでも50㎝ほどしかなく、遺構はいずれも直接岩盤に加工されていた。

遺構は試掘調査で確認されていた堀切状遺構１、石切状遺構２、竪堀状遺構１、性格不明遺構１を検出している。遺物は土器小片が３点出土しているが、いずれも遺構に伴うものではなく、遺構の時期を特定する材料とはならなかった。

掘切状遺構

上端部幅約１ｍ10㎝、下端部幅約38㎝で、長さは約３ｍ30㎝、最深部は約90㎝である。東側から湾曲して北に向かって下がりながら拡がっている。西側部分は、調査区外にも伸びていると考えられる。

遺構の北側は肩から約70°の角度で下がっており、遺構の上端・下端の線がはっきりとしており、法面はノミのような工具で丁寧に加工されている。しかし、南側はそれほど丁寧に加工されておらず、遺構の上端の線もはっきりせず、やや緩やかな法面が続いている。

石切の関係から地形がやや変化してしまっているが、山城全体から考えると、堀切としては最適な場所にあるといえる。土橋がかかっているのが一般的であるということであったが、調査段階では確認できなかった。

ここは、島根県教育委員会のトレンチ調査で確認されていた遺構である。

石切場跡

遺構の大きさは東西約１ｍ、南北約1.8ｍで、厚さ約40㎝の石が３カ所に分けて切り出された跡と考えられる。北から３段の階段状に切り出されており、壁面にはその際のノミ状工具の跡が見られる。

ＳＸ０１

全長６ｍ40㎝、最大幅約１ｍ40㎝で、深く掘り込まれた跡が２ヶ所ある。その深さは北東側が約90㎝、南西側が約１ｍ20㎝で、２つの穴は一部でつながっている。内面にノミ状工具痕があったため、石を切り出した跡とも考えられたが、この付近の岩盤は非常にもろく崩れやすいため、切り出すには不向きと考えられる。

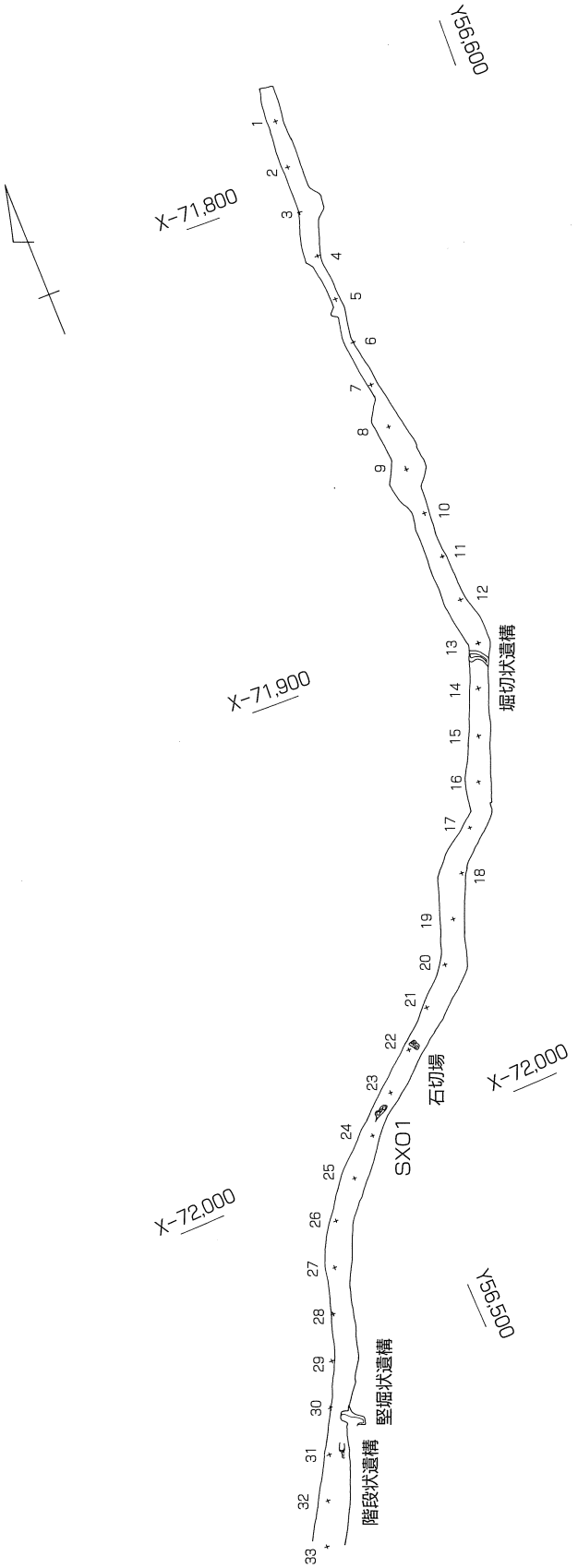


図34　瀧谷山城跡平成12年度調査区（1:1,500）

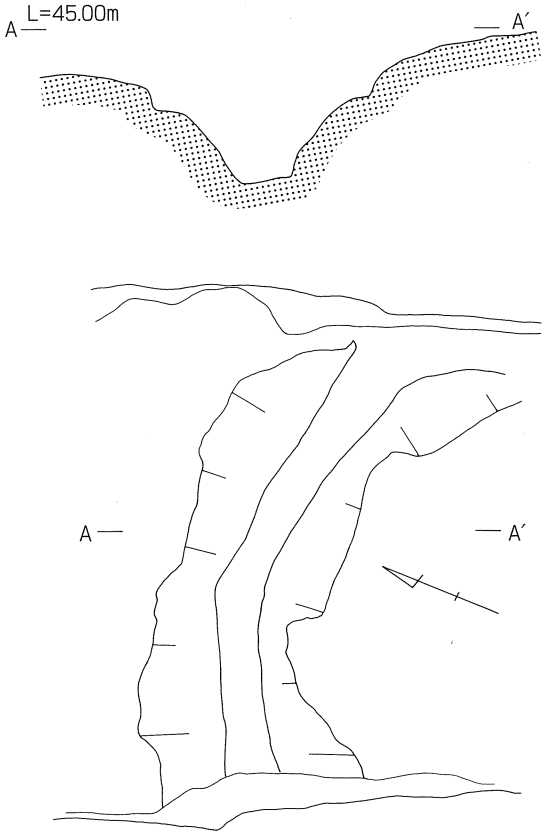


図35　堀切状遺構実測図(1:60)

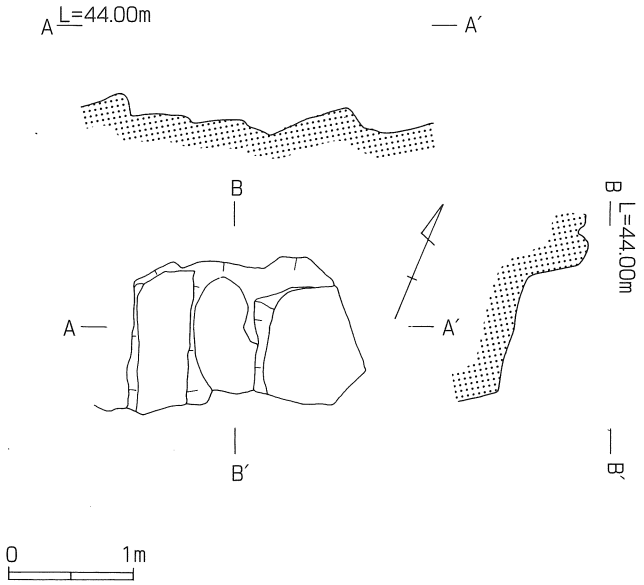


図36　石切場実測図(1:60)

島根県宍道町佐々布の要害遺跡には、落とし穴と考えられるピット状遺構がある。尾根上の一番標高の低い位置にあることから、山城の一部であるその類の遺構とも考えられるが、形状が大きく違うため現在のところ詳しい性格は不明である。

竪堀状遺構

上端部幅１ｍ30㎝、下端部幅30㎝、最深部は１ｍ60㎝、全長が５ｍである。遺構の東側は尾根の斜面まで続いている。両壁面、底の部分はノミ状の工具で丁寧に加工されている。北側の壁にはステップ状に加工された段があり、下に降りるために加工されたものではないかと考えられる。尾根の半分までしかないことから、竪堀として造られたものと思われる。ちょうど斐伊川から見上げると深く掘り込まれた堀が堀切のように見える位置であり、川からの視覚効果を強く意識したものと思われる。また、尾根上は半分

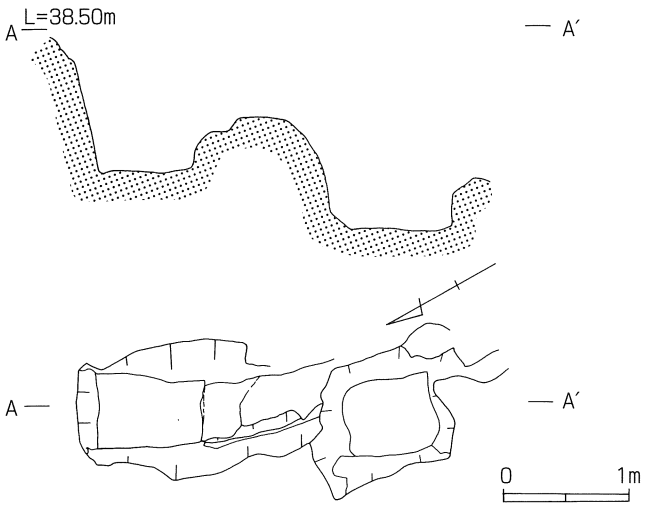


図37　SX01実測図(1:60)

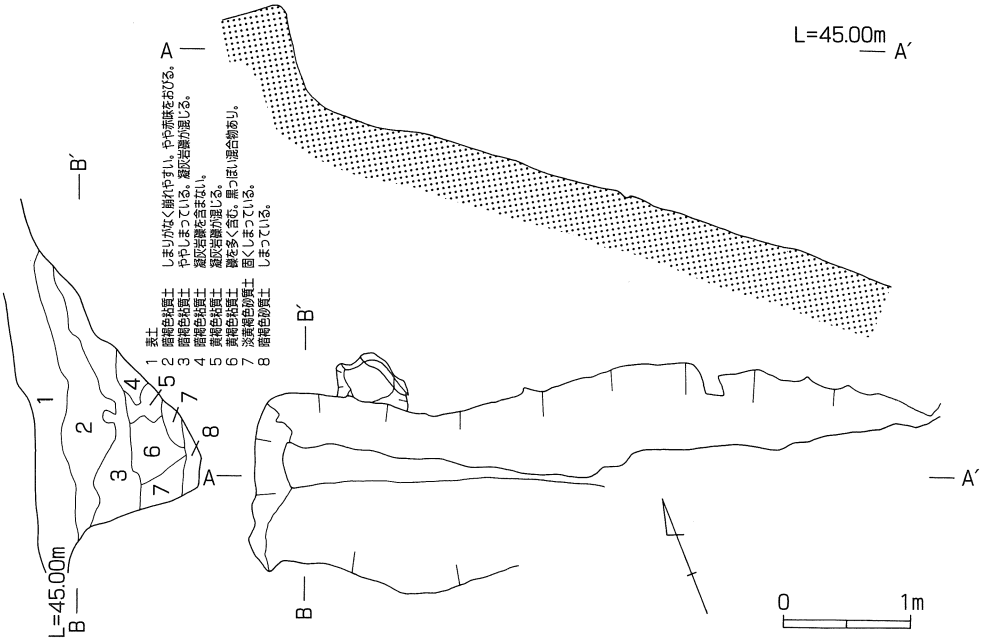


図38　竪堀状遺構実測図(1:60)

までしか掘り込まれていないが、切断効果は十分にあったと考えられる。

階段状遺構

東西幅１m22cm、南北１m84cm、最深部は48cmである。遺構の南側は階段状に加工されており、５段のステップが石を切り出したと思われる大きなくぼみに向かって続いている。

石はまず、切り取る部分の周囲に溝を掘り込み、その後斜面の下側からノミ状工具で剥がしたものと考えられる。周囲には、切り出す際の工具痕が多く残っている。

まとめ

12年度調査では、直接山城の一部として機能していた遺構は堀切状遺構と竪堀状遺構の２箇所のみであった。調査範囲は山城全体ではないため全ての遺構の性格を判断するのは難しいが、いずれも山城と無関係ではないと考えられる遺構であるといえる。

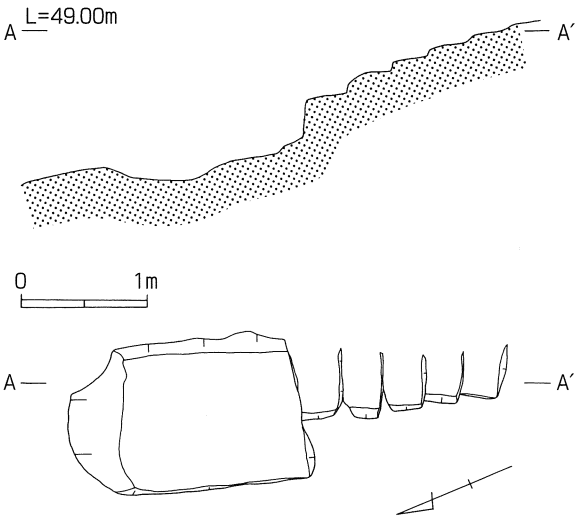


図39　階段状遺構実測図(1:60)

第３節　平成13年度調査

平成13年度調査の概要

平成13年度調査は、瀧谷山城跡の全調査面積4,100㎡のうち2,300㎡を対象として、平成13年（2001）４月23日から12月21日までの約８ヶ月間にわたり実施した。この範囲には、山城の北に位置する３つの広い平坦面が含まれている。これらは標高75m、69m、65m付近に認められ、山城を構成する郭と考えられる。よって、瀧谷山城跡の最頂部を主郭（標高85m付近）と想定して、順に北１郭、北２郭、北３郭と呼称することとした。また、北１郭の西斜面に傾斜が緩やかな箇所があり、何らかの遺構が存在する可能性があったため、ここを北1郭西斜面として約75㎡の追加調査を実施した。

基準杭の設置に際しては、まず、調査区の長軸に平行するように西から東にＡラインからＩラインを設定した。さらに、これに直交するように北から南へ１ラインから25ラインを設定し、交点に基準杭を設置した。各ラインはいずれも５m間隔とし、これらによって区画される一辺５mのグリッドについては、北西に位置する杭の名称を用いることとした。なお、任意の杭も調査の必要に応じて設置している。

調査にあたっては、Ｅライン際にサブトレンチを設定し、土層の堆積を確認しながら面的な掘削を実施して進めた。すると20cmから50cm程度堆積する表土の直下には風化が進行する岩盤が広がっていたため、遺構の検出はこの岩盤上で行っている。この結果、すべての郭から切岸が確認できた。その他、検出した主な遺構は次のとおりである。

北１郭からは１間×２間の掘立柱建物跡であるＳＢ０１などを検出した。ピットの規模は最大のもので長辺90cm、短辺72cmの方形を呈しており、深さは80cmを測る。主郭への虎口付近に位置していることから、門などである可能性もある。

また、北２郭からは布掘建物跡と思われるＳＢ０２などを確認した。長さ8.7m、幅１m、深さ80cmの規模の土坑が、1.5mの距離をおいて平行に築かれている。詰め所などの建物跡が想定される。

北３郭から建物跡は確認されていないが、断面観察から郭の成形が大部分盛土で行われていることがわかった。北１郭、北２郭が広範囲にわたり地山を削平して成形しているのに対し対照的である。

なお、遺物についてはほとんど出土していないため、遺構の時期や性格については不明な点も多い。しかし、検出したこれらの遺構はその配置状況から、山城に伴うものと考えられる。

杭	X	Y
D1	−72071.392	56425.076
D2	−72076.209	56423.737
D3	−72081.026	56422.398
D4	−72085.843	56421.059
D5	−72090.661	56419.719
D6	−72095.478	56418.380
D7	−72100.295	56417.041
D8	−72105.113	56415.702
D9	−72109.930	56414.363
D15	−72138.834	56406.327
D16	−72143.651	56404.988
D17	−72148.469	56403.649
D18	−72153.285	56402.310
D19	−72158.102	56400.970
—	—	—

杭	X	Y
E1	−72072.731	56429.893
E2	−72077.548	56428.554
E3	−72082.365	56427.215
E4	−72087.182	56425.876
E5	−72092.000	56424.536
E6	−72096.817	56423.197
E7	−72101.634	56421.858
E8	−72106.452	56420.519
E9	−72111.269	56419.180
E10	−72116.086	56417.840
E11	−72120.904	56416.501
E12	−72125.721	56415.162
E13	−72130.538	56413.823
E14	−72135.356	56412.483
—	—	—

杭	X	Y
E15	−72140.173	56411.144
E16	−72144.990	56409.805
E17	−72149.808	56408.466
E18	−72154.625	56407.127
E19	−72159.442	56405.787
E20	−72164.259	56404.448
E21	−72169.077	56403.109
E22	−72173.894	56401.770
E23	−72178.711	56400.430
E24	−72183.529	56399.091
E25	−72188.346	56397.752
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—

杭	X	Y
F2	−72087.887	56433.371
F3	−72083.704	56432.032
F4	−72088.521	56430.693
F5	−72093.339	56429.353
F6	−72098.156	56428.014
F7	−72102.973	56426.675
F8	−72107.791	56425.336
F16	−72146.329	56414.622
F17	−72151.147	56413.283
F18	−72155.965	56411.944
F19	−72160.782	56410.604
F20	−72165.598	56409.265
F21	−72170.416	56407.926
F22	−72175.234	56406.587
F23	−72180.051	56405.247

表３　主要基準杭座標一覧表

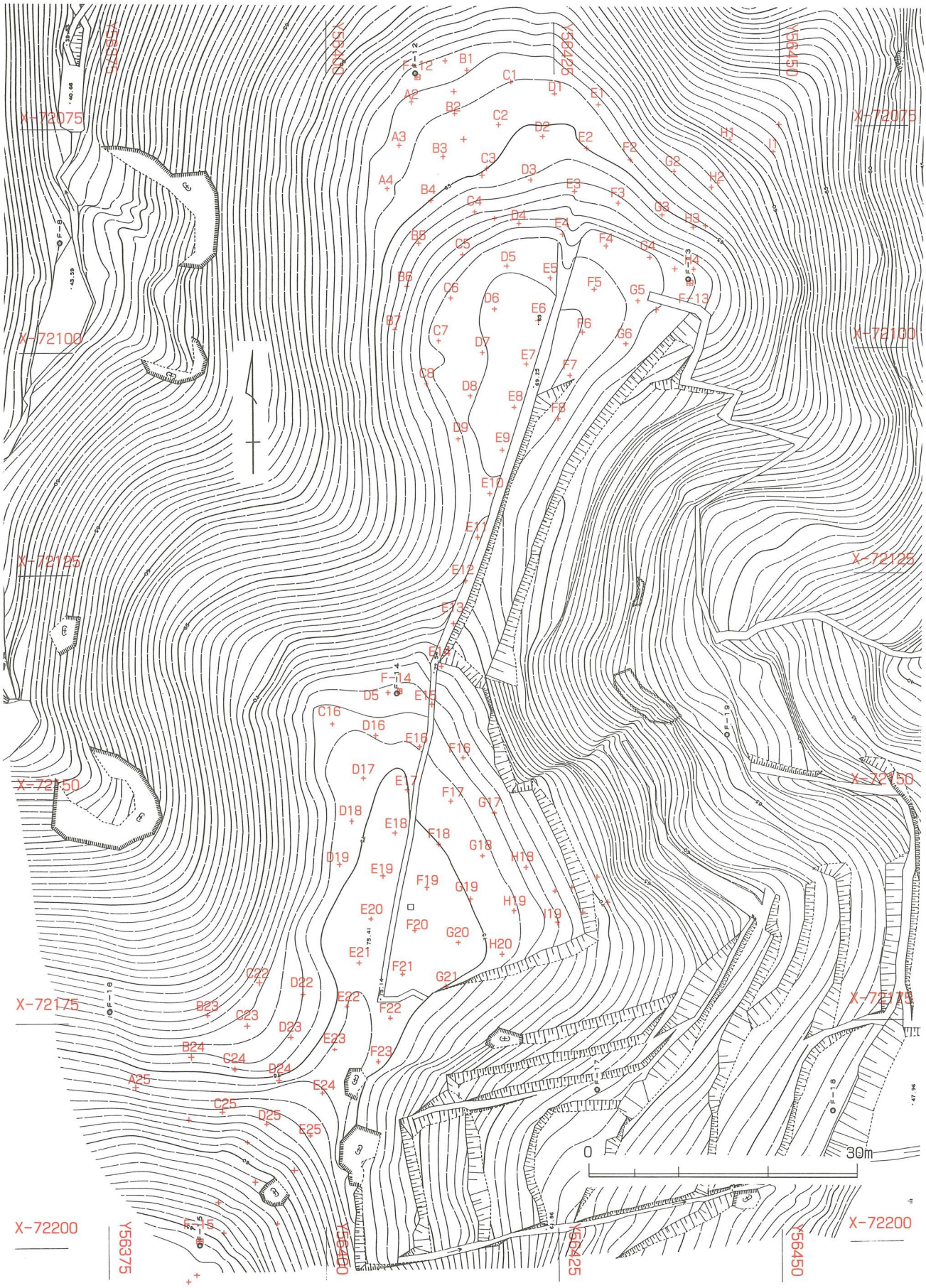


図40　杭配置図(1:600)

図41　遺構配置図(1:500)

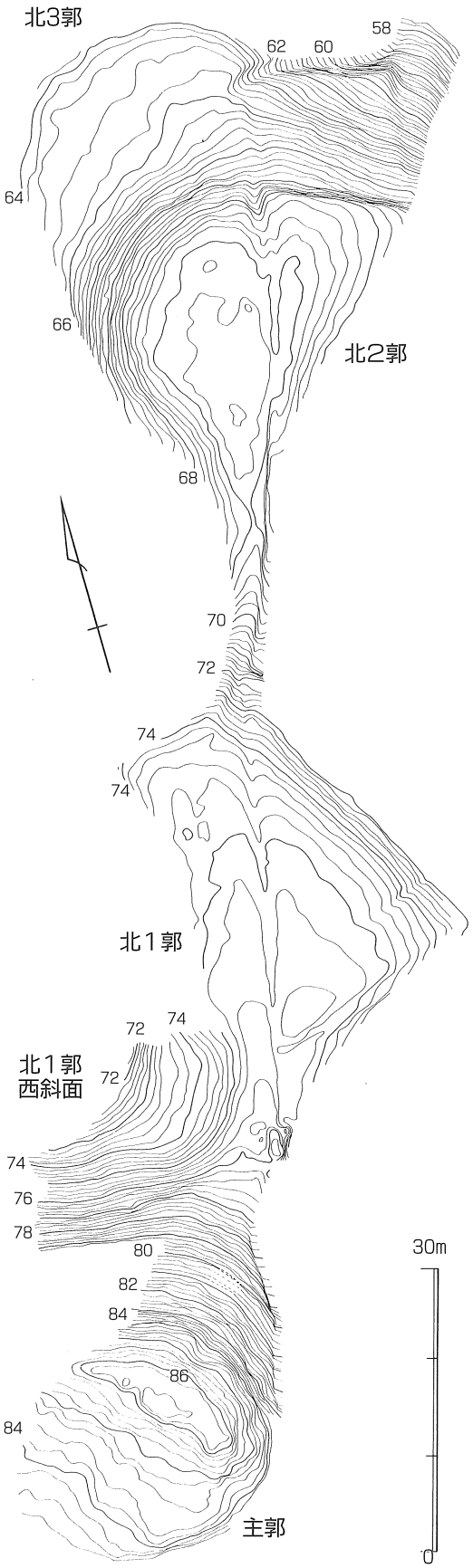


図42　調査前地形測量図(1:700)

平成13年度調査の結果

平成12年度調査区が丘陵の尾根部分であったのに対して、平成13年度調査区は丘陵の山頂付近の調査区である。調査前からここには山城の郭と考えられる平坦面が３箇所確認されていた。また、南の調査区外には丘陵の頂があり、ここには主郭と考えられる郭を確認している。

以下、郭と考えられる平坦面を南から順に、主郭、北１郭、北２郭、北３郭と呼称し、郭の築成や検出遺構などについて述べる。なお、北1郭西斜面についてもあわせて報告したい。

主　郭

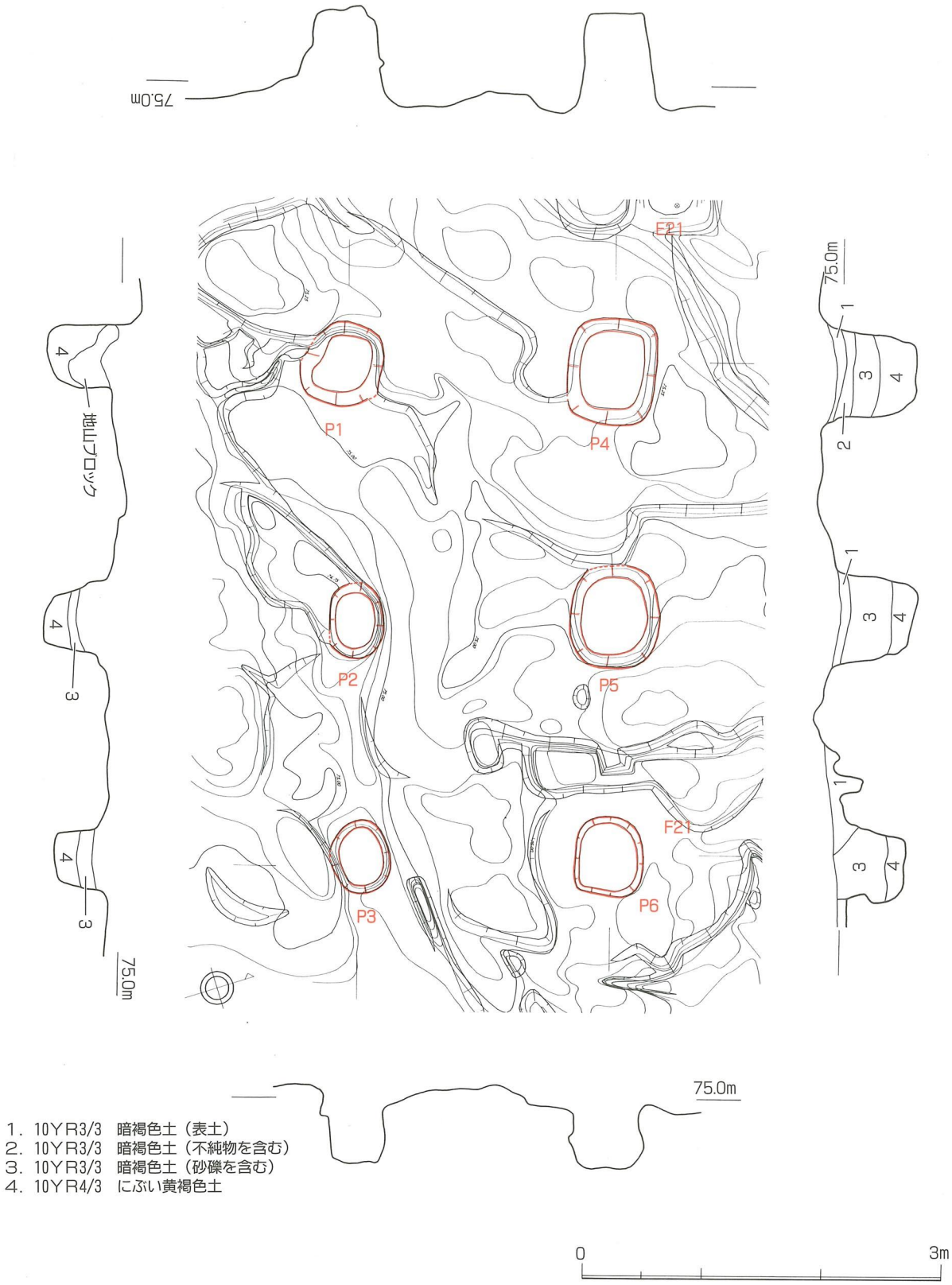
主郭は瀧谷山城跡が占地する丘陵の標高85m付近で確認している。北１郭に面する虎口には高さ約１mの土塁が配され、その他の箇所は緩い傾斜を有する約220㎡の平場が円形に広がっている。また、崖端は急斜面である。この主郭は調査範囲外であったため、発掘調査は行っていない。よって、土塁や切岸の築成及びその他の遺構の有無については不明である。

なお、この主郭を起点として北方向に尾根が２本「V」字状に延びている。斐伊川に臨する東側の尾根に瀧谷山城跡は占地しているのであるが、もう一方の尾根には、現地踏査の結果、遺構や遺物は確認されていない。また、両者間の谷には藤廻遺跡があり、水が溜まる場所が確認されている。この山城の水の手として利用されていたものと考えられる。

北１郭

主郭の北斜面を下ると標高75m付近に北1郭が広がる。ここからは、掘立柱建物跡のＳＢ０１や溝状遺構のＳＤ０１のほか、切岸、帯郭、盛土による郭造成を確認している。

ＳＢ０１は主郭に通じる虎口付近で検出した、N-74°-Wに長軸をとる１間(２m)×２間(４m)の掘立柱建物跡である。Ｐ１～Ｐ６の合計６基のピットを検出しているが、Ｐ１～Ｐ３と比較し、Ｐ４～Ｐ６はしっかりとした造りとなっている。中でもＰ４は、90cm×72cmの長方形の平面形を呈し、深さは80cmを測る検出規模である。



1．10YR3/3　暗褐色土（表土）
2．10YR3/3　暗褐色土（不純物を含む）
3．10YR3/3　暗褐色土（砂礫を含む）
4．10YR4/3　にぶい黄褐色土

図43　SB01測量図(1:50)

各ピットの断面を観察しても柱痕は認められず、２層から４層堆積する覆土から出土遺物はなかった。よって、遺構の時期や性格の詳細は不明であるが、配置位置から山城に付随する施設と考えられ、性格としては建物のほか、主郭への進入を防ぐ門などである可能性も指摘できよう。

ＳＤ０１は長さ30m、幅0.5m～1.4mを測り、N-11°-E方向に直線的に延びる溝状遺構である。鑿で地山の岩盤を15cm～50cm程度削って成形した痕跡が認められ、底は平坦に加工されている。出土遺物はなく時期は不明であるが、山城に付随する施設と思われる。

この遺構はＳＢ０１のＰ０５から北１郭と北２郭の連結部にかけて延びており、ちょうど北１郭の中央を走っている。このことから、ＳＤ０１は排水用の溝ではなく、連結部からＳＢ０１にかけての通路としての機能を担っていた可能性も考えられる。

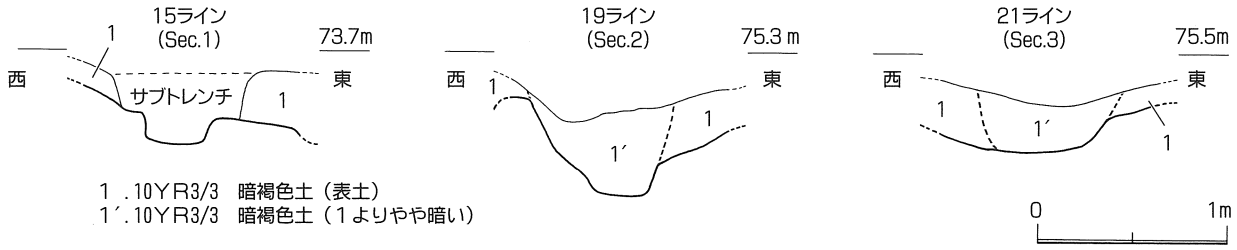


図44　SD01断面(Sec.1～Sec.3)図(1:40)

切岸は北１郭東斜面の標高71m前後で、全域にわたり確認できた。サブトレンチを１本設定し断面観察を行った結果、旧表土上に土を盛って急勾配を造り出していることが認められた。なお、この部分での切岸の高さは2.4mを測る。また、標高70m付近には幅約1.3mで緩やかな勾配が帯状に確認できるこ

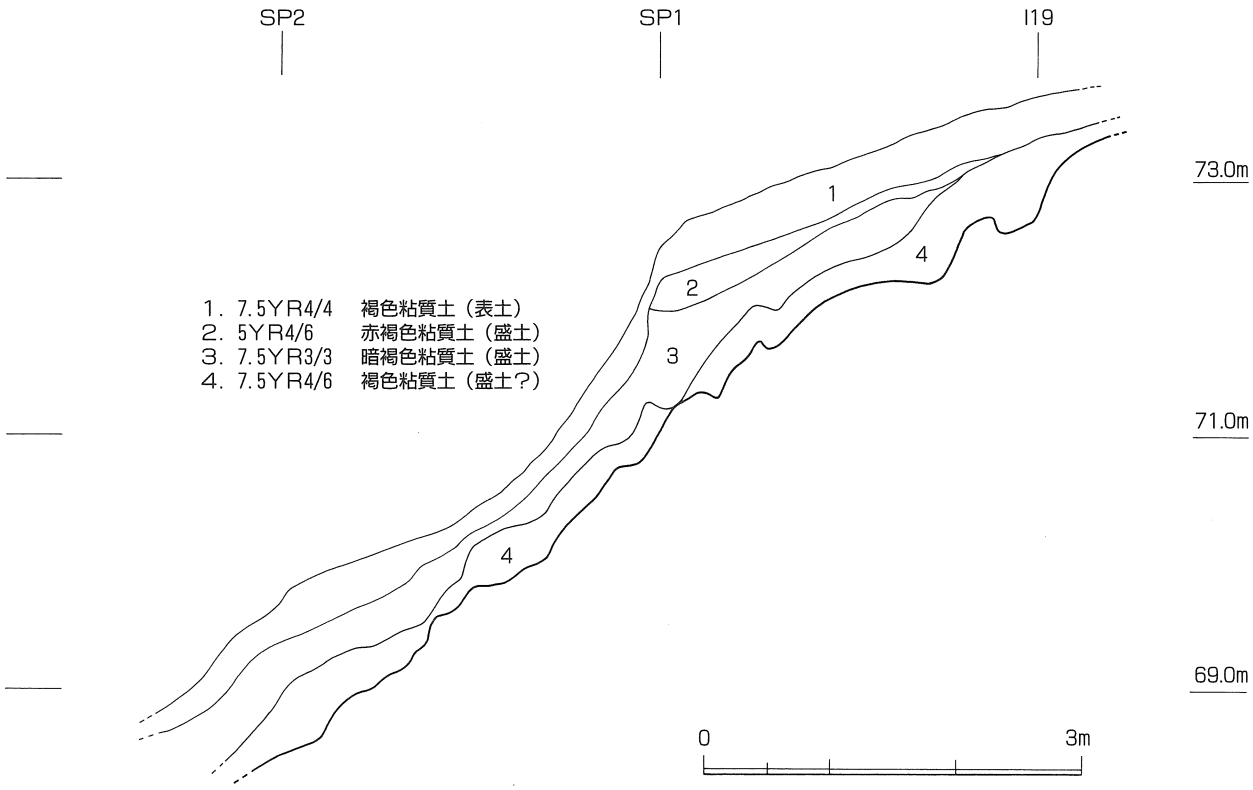


図45　北１郭東切岸断面(Sec.4)図(1:60)

とから、切岸直下には帯郭が巡らされていたものと考えられる。この帯郭から谷底までは丘陵の自然傾斜面が続いている。これに対し西側の斜面は、丘陵の自然斜面が緩やかに谷底まで裾を広げており、普請が施されていない。また、郭の北西隅のＣ15Gr・Ｄ15Gr付近では造成土が確認でき、盛土による郭造成が確認できている。

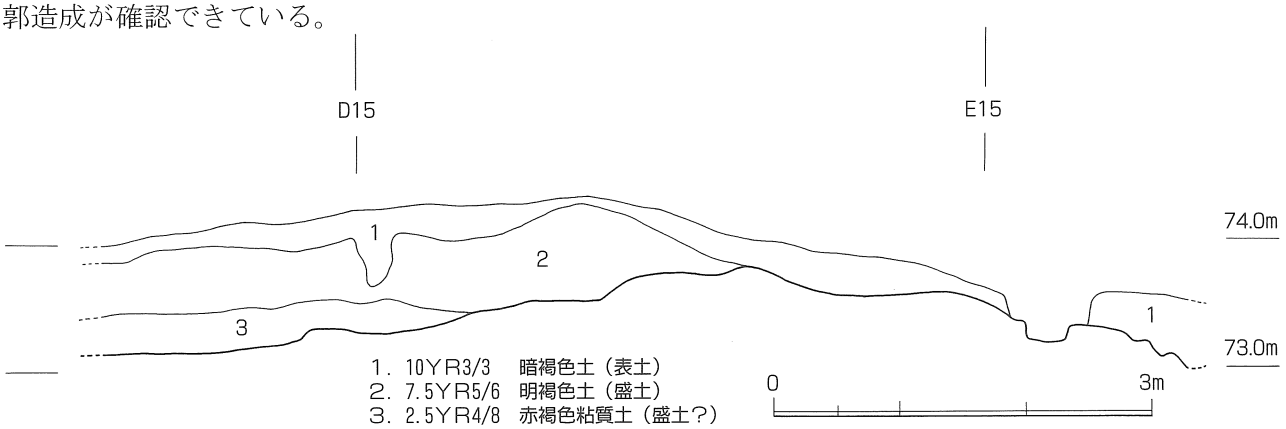


図46　15ラインセクション(Sec.5)図(1:60)

北１郭西斜面

北１郭西斜面では、尾根寄りに傾斜が緩やかな箇所が認められた。この山城が東の斐伊川側を意識した縄張りをとっていることを考えると、この箇所は敵の死角にあたる。よって、何らかの遺構が確認できる可能性があったため一部追加調査を行った。この結果、直径30cm～50cm程度のピット状の穴が数基確認できたが、樹木根の痕跡である可能性が高いと思われる。その他には遺構と遺物ともに検出できなかった。Ｃ23－Ｄ24ラインセクションを観察しても、現表土の下に黒色粘質土の旧表土が堆積しているだけで、人が手を施したと思われる痕跡は見あたらなかった。

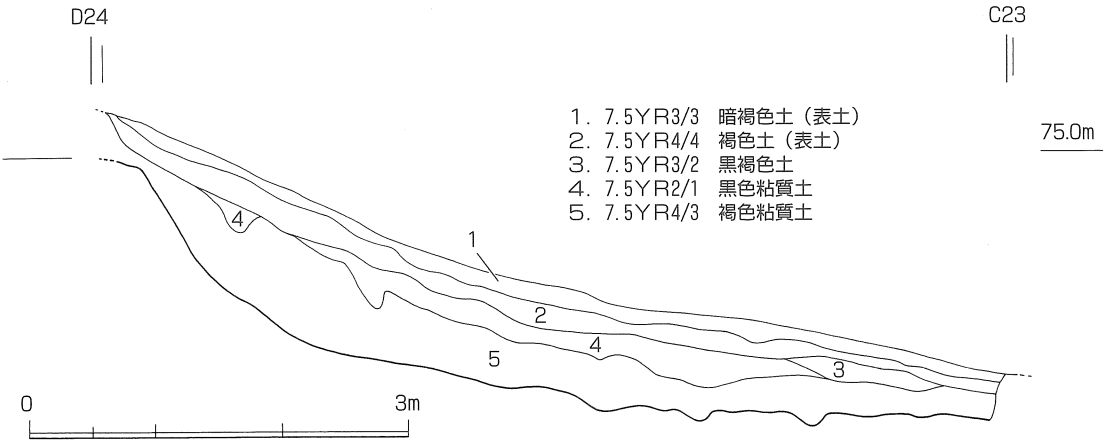


図47　C23－D24ラインセクション(Sec.6)図(1:60)

北２郭

北２郭は北１郭から約25mの連結部によって結ばれる郭であり、標高69m付近に占地している。ここからは、布掘り建物跡のSB02や溝状遺構のSD02のほか、切岸や土坑などが確認されている。

ＳＢ０２は郭の南西にあたるＣ６GrからＣ７Grにかけて検出した布掘り建物跡である。北を主軸とし、1.5mの間隔をあけて、布掘りが二本検出できた。東側のものは、長さ8.5m、幅１m前後、深さ1.2mの検出規模で、西側のものは、長さ9.0m、幅１m前後、深さ0.8mである。両者とも底は標高67.7mで平

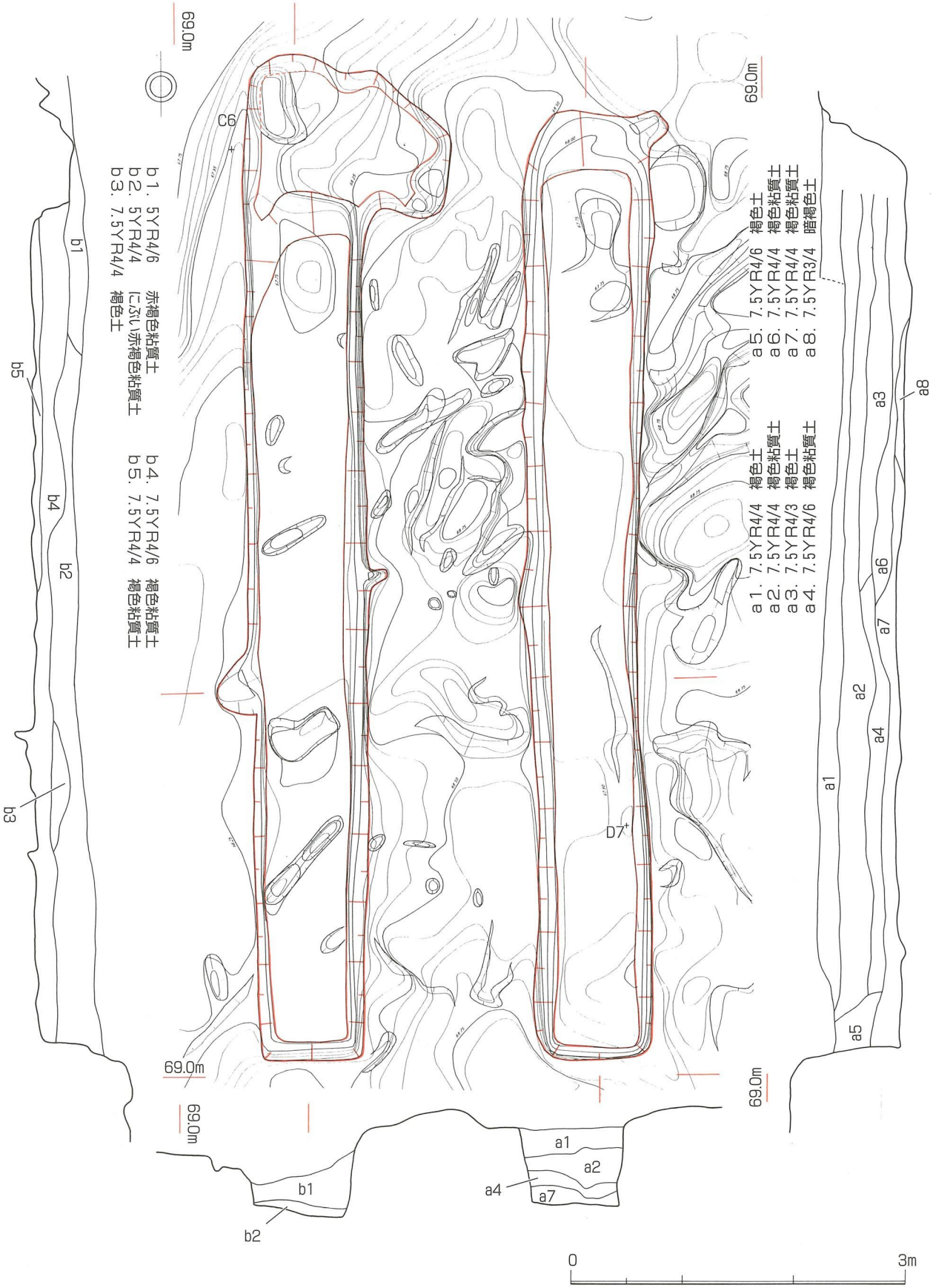


図48 SB02測量図(1:50)

坦に加工されており、側壁の立ち上がりは急である。検出した長さに若干の違いがあるものの、南端は揃う。

覆土はいずれも数層の堆積が認められるが、概ね水平に堆積しており、断面を観察しても柱痕は認められない。また、出土遺物が全くないことこら、この遺構の時期や性格は不明であるが、おそらく山城に伴うもので、詰め所などに利用されていた建物ではないかと思われる。

ＳＤ０２は北２郭の中央より東寄りのＥ４GrからＥ７Grにかけて検出した。N-17°-E方向に直線的に延びており、北１郭のＳＤ０１とは軸方向が異なる。この遺構の南寄りでは部分的にいびつな平面形を呈する箇所も認められるが、直線的な部分の検出規模は長さ16m、幅1.2m～0.4m、深さは直上の表土から0.3mを測る。

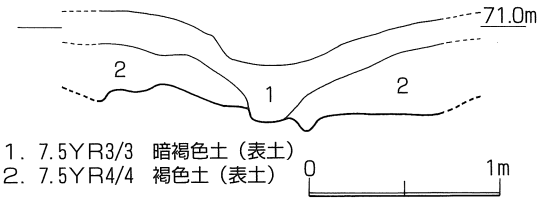


図49　SD02断面図(Sec.7)図(1:40)

土の堆積状況を観察すると、表土がそのまま落ち込みこの遺構の覆土を構成している。また、調査前の表土面でもこの遺構は比較的はっきり確認できていた。よって、瀧谷山城跡より新しい遺構である可能性が高い。遺構の性格については、ＳＤ０１と同様に通路として使用されていた可能性も残るが、詳細は不明である。なお、出土遺物はなかった。

切岸は北２郭の北端で確認できた。この切岸は幅10m、高さ1.5mを測る規模であり、北側の細長い尾根から敵の進入を阻む目的で築かれたものと思われる。上部は平坦に成形されており、断面を観察すると旧表土上に土を盛って築かれている様子が明瞭に確認できた。

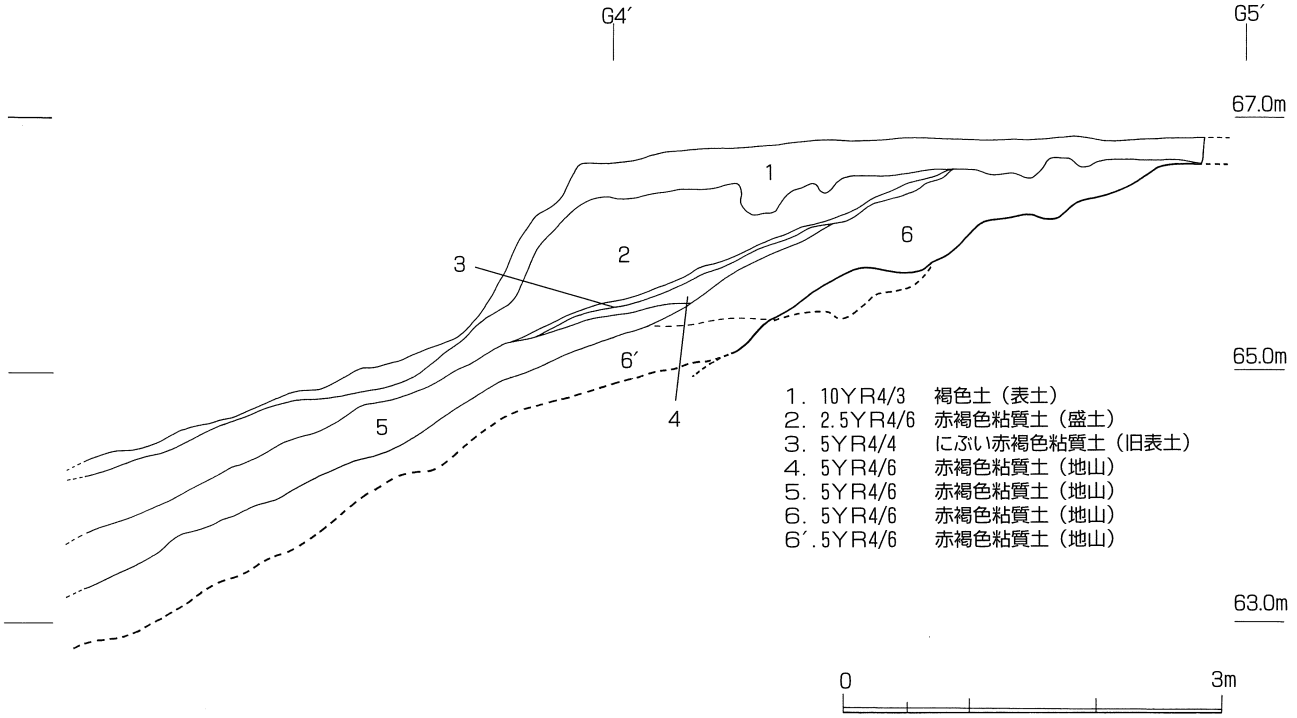


図50　北2郭北切岸断面(Sec.8)図(1:60)

北２郭西斜面は６ライン際にサブトレンチを設置して断面観察を行った。その結果、断面中程に薄く旧表土の堆積が認められた。これより上位には北２郭を平坦に成形する際に生じた排土による盛土と考えられる土が確認できた。また、旧表土より下位には落ち込みが観察できた。これは溝状に巡るものではなく、土坑状の落ち込みである。ここからの出土遺物はないが、他のグリッドからは表土中などから僅かな点数ではあるが土師器片が出土している。よって、この落ち込みはこの山城より古い時代の遺構である可能性がある。

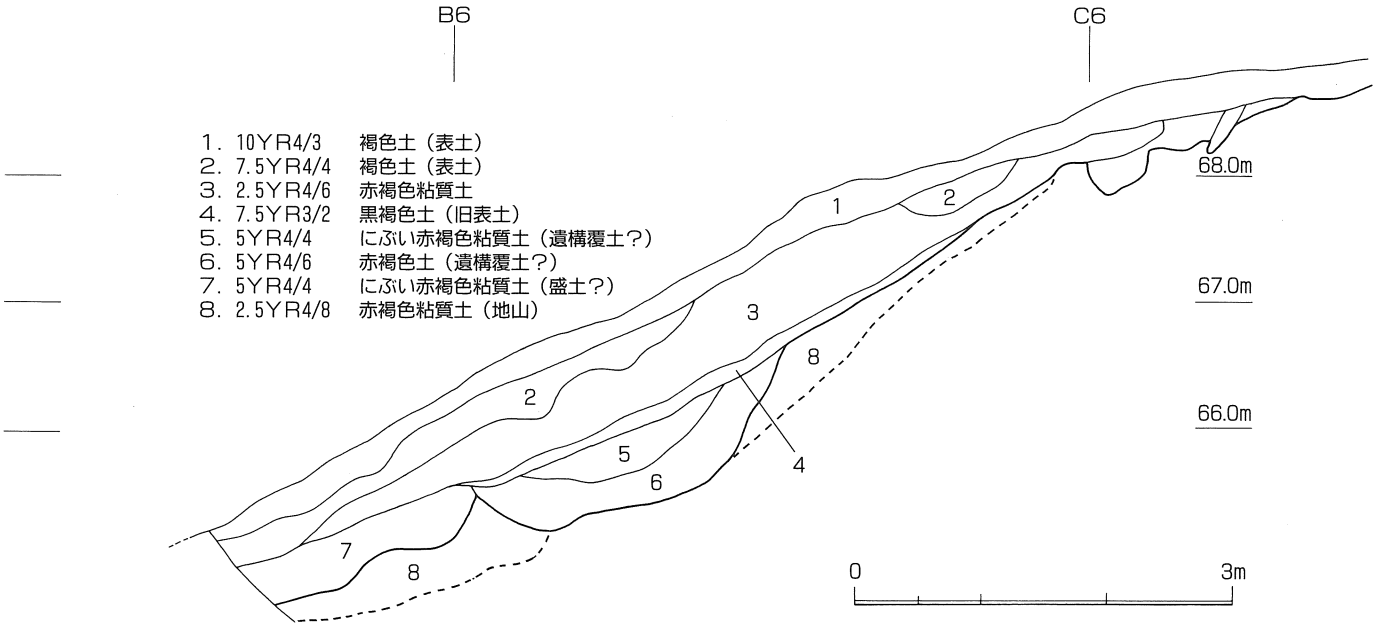


図51　6ラインセクション(Sec.9)図(1:60)

北２郭からは、他にピット状の遺構も確認されている。しかし、これらからは出土遺物がなく、時期や性格などは不明である。なお、樹木根の痕跡である可能性もある。

北３郭

北３郭は北２郭北側斜面の下、標高65m付近に広がる郭である。北東方向に延びる尾根から郭に立ち入る場合、正面にあたる郭は北２郭であるが、先に述べた切岸に行く手を阻まれるため、必ず北３郭を経由することとなる。よって、北３郭は尾根から進入を図る敵と最初に対峙する郭である。

まず、北３郭の普請について述べたい。これを調査するため、任意に２本のサブトレンチを設定した。１本は杭Ｄ５からN-19°-W方向に約20m間、もう１本は郭の中央付近で南北方向に約12m間のものを設定した。これらを掘削し土層断面を観察すると、前者では表土から50cmまでの深さで地山が確認できるのに対して、後者は南寄りから北に向かい次第に厚くなる盛土が認められた。つまり、前者付近では平坦な自然地形が活かされているが、後者付近では城誘え時に自然勾配があったため、造成を行い郭全体が平坦になるよう成形されていることが分かった。ここで用いられた盛土は、おそらく北２郭を平坦に成形する際に生じた排土であると推測される。

北３郭ではＦ１Gr付近に切岸も認められた。任意のサブトレンチを設定して断面を観察したところ、旧表土上に造成土が確認でき、他のものと同様に盛土による成形がなされている。なお、上部は緩い勾配がついているが、これは土が流れたためと推測でき、城誘え時には平坦に成形されたと思われる。

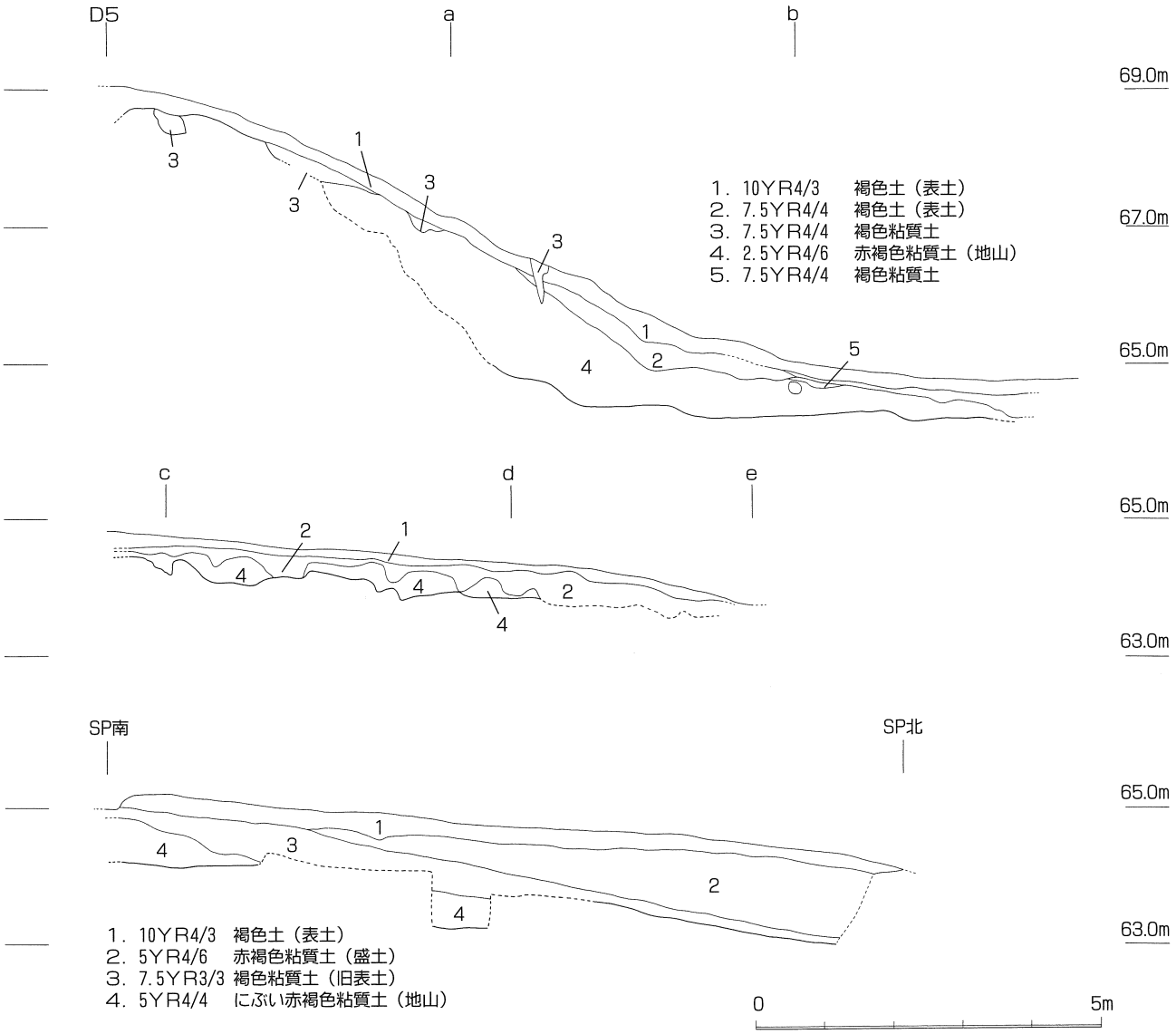


図52　北3郭セクション(Sec.10・Sec.11)図(1:100)

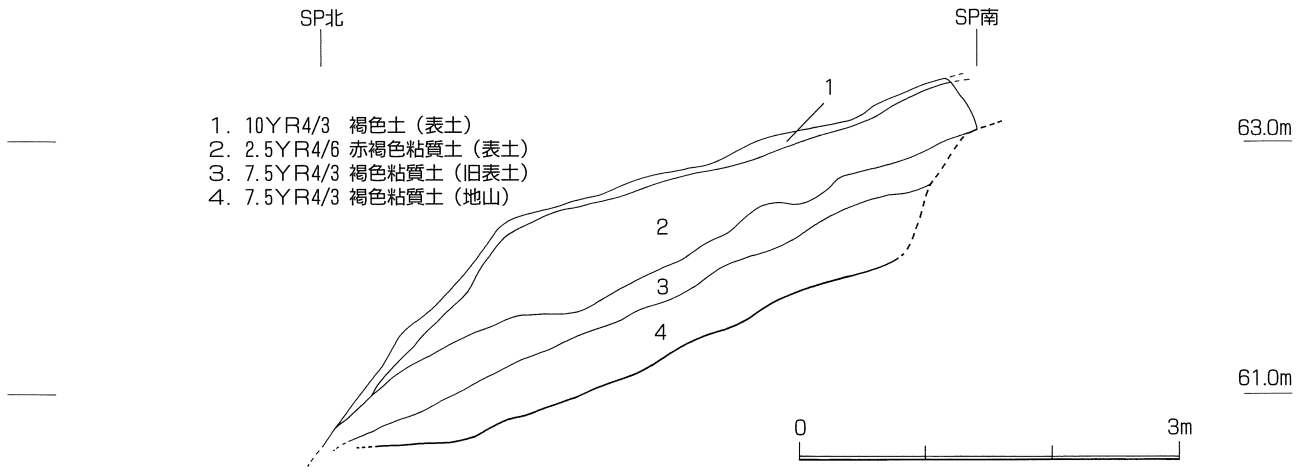


図53　北3郭北切岸断面(Sec.12)図(1:60)

また、Ｅラインに設定したサブトレンチの断面を観察すると、Ｅ３付近からＥ２付近にかけて、地山の岩盤を削って加工した平坦面が確認できた。ここでは、城誘え時に盛り上がっていた地山の岩盤を削平して郭を成形している様子が窺える。

この他、北３郭からはピット状の穴も検出している。しかし、いずれも不整形で出土遺物もないことから、遺構ではなく樹木の根痕である可能性が高いと思われる。

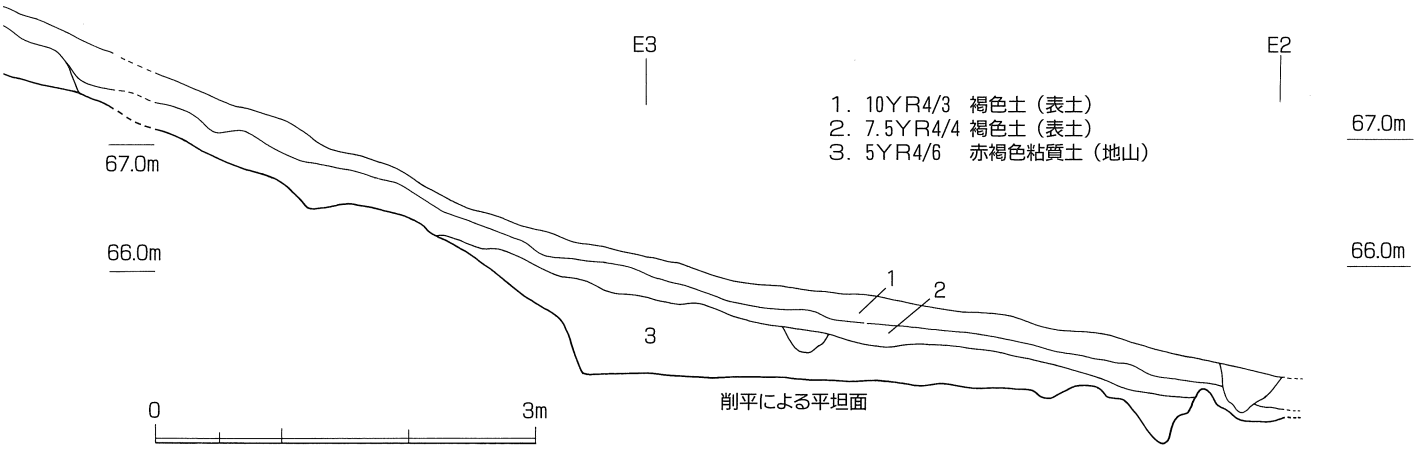


図54　Eラインセクション(Sec.13)図(1:60)

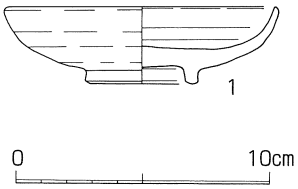


図55　E22Gr出土磁器実測図(1:3)

出土遺物

瀧谷山城跡の平成13年度調査区からは、土師器、須恵器、陶磁器、砥石などが出土しているが、これらの点数はごく僅かである。また、ほとんどが小片であり実測に堪えるものは図示した２点を数えるにすぎない。

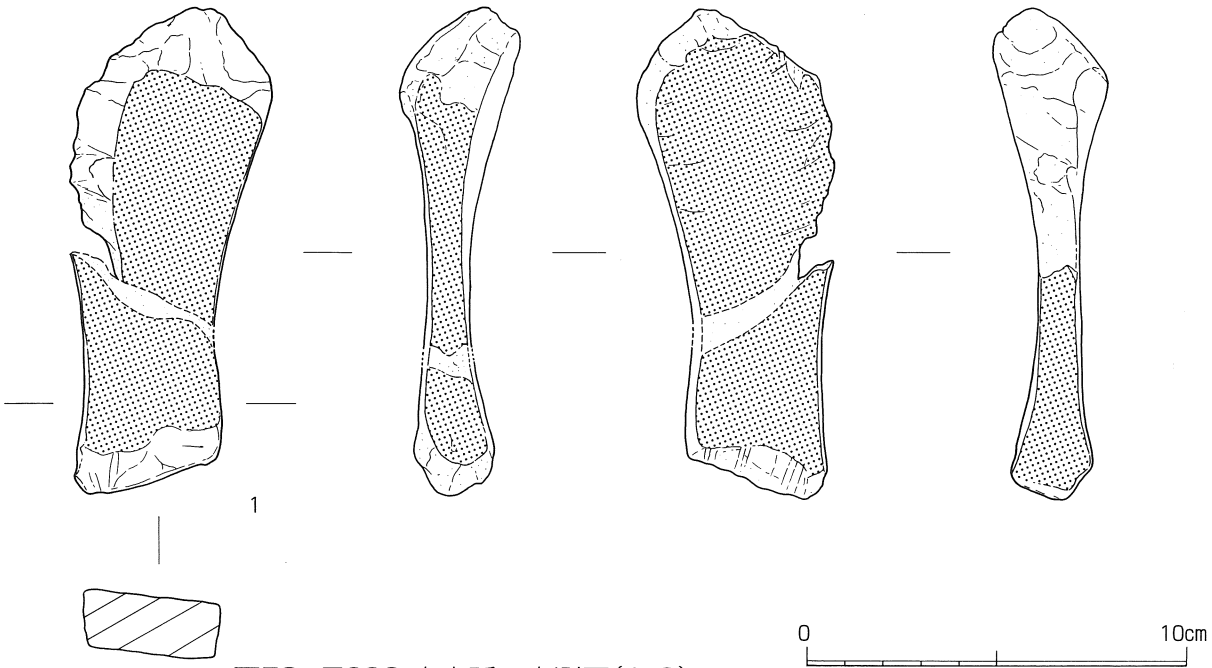


図56　E23Gr出土砥石実測図(1:2)

図55-1はＥ22Grから出土した磁器の皿である。法量は口縁径10.6cm、高台径4.1cm、器高3.1cmを測る。器壁は底部から浅く立ち上がるが、体部で強く内湾し開口する。また、全面に施釉が認められるが畳付にはかからず、見込み部は蛇の目釉剥ぎが施されている。体部内外面に黒褐色の斑が確認できるが、ちょうどこの部分が欠損しており、絵柄なのか釉薬の変色かは判断できない。なお、時期については近世と思われる。

図56-1はＥ23Grから半分に割れた状態で出土した、流紋岩質凝灰岩の砥石である。割れ口で僅かに欠損する箇所が認められるが、ほぼ完形に復元できる。粗い砥石で、表面、裏面、両側面の合計４面に研ぎ面が確認でき、いずれの面もかなり使い込まれているため凹面状を呈している。大きさは長さ12.1cm、幅5.0cm～3.4cm、厚さ2.9cm～1.1cmで、重さは137gを量る。なお、共伴する遺物がないため、時期は不明である。

第４節　まとめ

瀧谷山城跡は出雲市大津町に所在し、斐伊川放水路の開削部に位置する中世山城である。現地踏査で初めてその存在が確認されたことから、文献による資料は今のところ確認されていない。しかし、出雲平野南丘陵から派生する尾根上に占地しているため平野を一望でき、特に斐伊川や東の対岸を監視する上では絶好の地点に地取りが行われていることから、南東約4kmに位置する上之郷城の支城と考えられ、おそらく16世紀に築城されたものと思われる。以下、調査で得られた成果を元に、この山城の縄張りを概観しまとめとしたい。

この山城は南北に長い地取りが行われているが、平面構造上、北の尾根部（平成12年度調査区）と南の郭部（平成13年度調査区）の大きく二つの部分に分けられる。

北の尾根部では、堀切、竪堀、石切場、性格不明遺構が検出されている。堀切は尾根北寄りで確認されており、尾根北端付近からの敵の進入を防御するために築かれたものと考えられる。竪堀は尾根南寄りで検出されている。尾根の中央から斐伊川側に向かって掘削されているため、南東から望むと堀切と誤認される。竪堀の機能を備えながらも、堀切と誤認させる意図が読みとれ興味深い。石切場は尾根中央付近と南寄りの2箇所で発見された。これらから採取された石材は、この山城の普請の際に用いられた可能性もあるが、調査の結果、石材は出土していない。よって、この山城とは異なる時代のものである可能性も残る。性格不明遺構は尾根の中央付近で検出された。設置した目的は定かでないが、尾根の標高が最も低い地点に配置されている点に留意の必要があろう。

次に、南の郭部について述べたい。郭は主郭、北１郭、北２郭、北３郭が確認できた。主郭からは虎口で土塁を確認したが、工事予定地外であったため調査は行っていない。調査を実施した北１郭、北２郭、北３郭からは切岸、建物跡、溝状遺構などが検出されている。切岸は北１郭、北２郭、北３郭で確認されている。いずれも斜面を削るのではなく盛土によって成形されている。北1郭の切岸は、郭の東崖端に巡らされており西斜面には認められない。また、北2郭のものは郭の北端に築かれていたものを調査した。尾根筋から進入した場合、正面にあたる場所に築かれており、敵の侵入を阻むに大いに役立ったと思われる。この他、北2郭の切岸については、危険なため調査範囲から外したが、東斜面でも郭崖端付近で急勾配が帯状に巡るため、ここにも切岸が存在したと思われる。北3郭では尾根筋

の西で確認している。北2郭北端の切岸に行く手を阻まれた侵入者が、さらに進入を図ろうとする際、必ず経由しなければならない通路の手前に築かれている。この付近はちょうど尾根部と郭部の境目にあたり、守りを堅くする意図が感じ取れる。縄張りを考える際に重要な箇所に位置づけられていたことが窺える。

これらのほか、北1郭と北2郭からはそれぞれ建物跡と溝状遺構が検出されている。北1郭で検出された建物跡ＳＢ０１は、主郭への虎口に配置されていることから、門などである可能性も指摘できる。また、溝状遺構ＳＤ０１は、底が平坦に加工されておりＳＢ０１から北２郭への連結部に向かって直線的に伸びているため、通路として機能していた可能性も考えられる。北２郭から検出された建物跡ＳＢ０２は、その配置位置や規模から詰め所などが想定される。溝状遺構ＳＤ０２はＳＤ０１同様に通路の可能性もあるが、覆土の堆積状況から、山城より時代が下がる可能性もある。なお、調査の結果、郭は切土や盛土で成形されていることが確認されている。

以上、まとめとして山城全体を概観した。尾根部の竪堀や郭部の切岸配置に見て取れるように、斐伊川側を非常に意識した縄張りとなっている点に留意する必要がある。また、斐伊川を正面に据えた場合、この山城の水の手と考えられる藤廻遺跡はちょうど裏の谷に位置しており、安全な箇所に水源が確保されている点も興味深い。

現地踏査の結果[8]、主郭より南には山城に関係する遺構が見あたらなかった。よって、今回の調査は一つの山城をほぼ全面発掘した形となっている。つまり、縄張りの全容がほぼ明らかになったわけであり、このような事例は当地では希ある。今回の調査成果が、当地の中世山城の縄張り研究の一助となり、ひいては、この地の中世領国支配構造が明らかになっていくことを期待したい。

註

1) 島根県教育委員会 編『出雲、隠岐の城館跡』1998
2) 島根県教育委員会 編『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980
3) 島根県教育委員会 編『長廻横穴墓群・長廻遺跡(Vol. 1)』2001
4) 島根県教育委員会 編『古志本郷遺跡Ⅰ』1999
5) 島根県教育委員会 編『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』1998
6) 島根県教育委員会 編『石田遺跡Ⅲ』1998
7) 「塩冶判官館跡」との遺跡名がついているが、現段階では館跡であることすら確定していない。次の文献に詳しい。出雲市教育委員会 編『塩冶判官館跡』2003
8) 山根正明氏による現地踏査結果に基づく。

引用・参考文献

1. 出雲市教育委員会 編『上塩冶横穴墓群第17・18・19・38支群／大井谷Ⅲ遺跡／石切場１・２／三田谷３号墳』2000
2. 出雲市教育委員会 編『光明寺３号墓・４号墓』2000
3. 出雲市教育委員会 編『大井谷Ⅰ／大井谷Ⅱ』2001
4. 出雲市教育委員会 編「第１章 位置と環境」『下古志遺跡 -本編-』2001
5. 出雲市教育委員会 編『出雲市遺跡地図』1993
6. 島根県教育委員会 編『三田谷Ⅰ遺跡(Vol. 1)』1999

写　真　図　版

１　斐伊川と三谷遺跡
（南から）

２　三谷遺跡完掘
（上空から）

図版2

1　藤廻遺跡　調査前(東から)

2　藤廻遺跡　階段状遺構(北より)

1　斐伊川と藤廻遺跡
（西から）

2　藤廻遺跡完掘
（上空から）

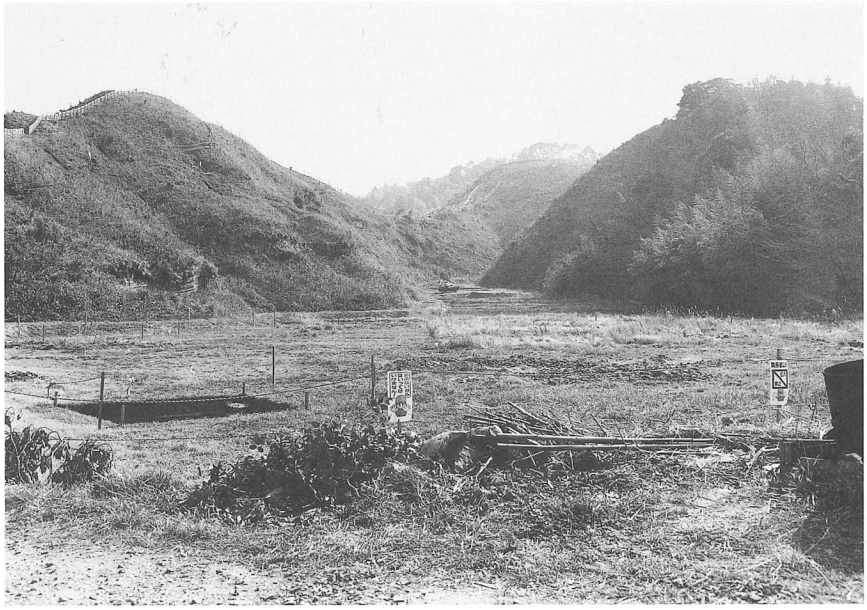
１　瀧谷山城跡全景（北から）

1　瀧谷山城跡遠景（東から）

2　瀧谷山城跡調査地全景（主郭から北を望む）

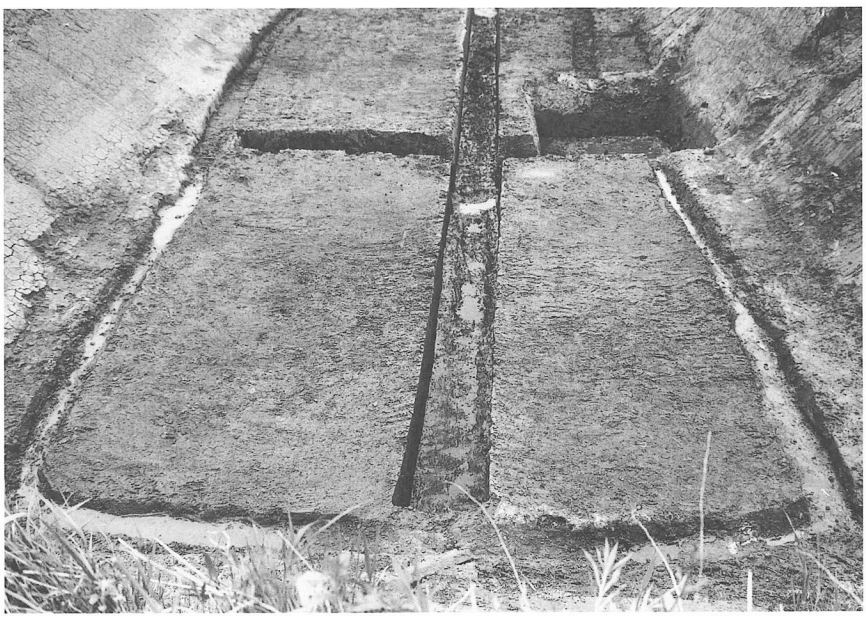
1　瀧谷山城跡SB02完掘状況(南から)

2　瀧谷山城跡北2郭北切岸断面:Sec. 8(西から)



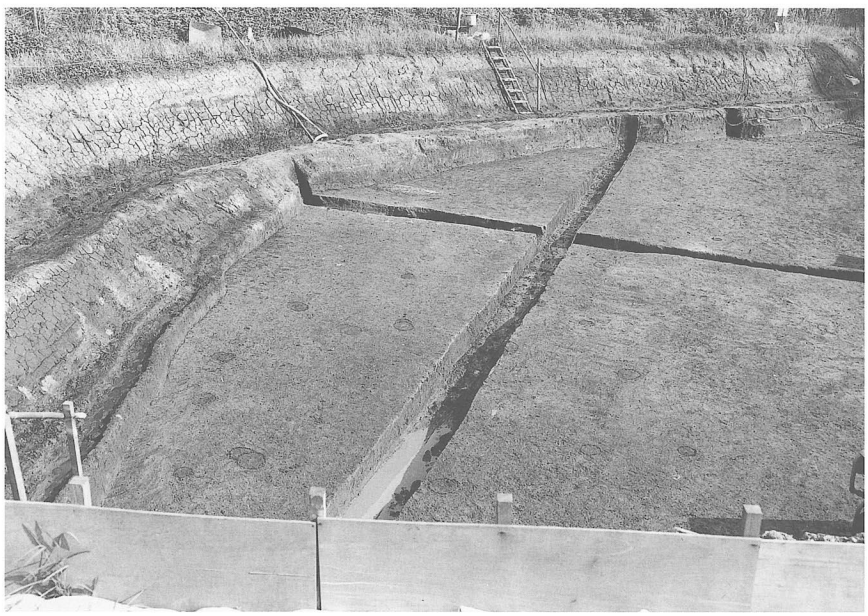
１　調査前（北西から）

２　調査前（東丘陵から）



３　１区完掘状況（南から）

1　土器出土状況



2　ピット検出状況(北から)

3　ピット完掘状況(北から)